地球温暖化の果てに　第四部

飢餓疫病列島

生野以久男

kinokopress.com
www.kinokopress.com

プロローグ

地球は気候変動の真っ只中にあった。

地球最大の熱エネルギー分配システムである海洋熱塩大循環が衰えだし、また、太陽活動が停滞して地球へ注ぐ太陽光線が弱まっても、人間活動から吐きだされる大量の二酸化炭素などの温室効果によって、地球温暖化の暴走は止まるところを知らなかった。

海水温が著しく上昇して海水が膨張して海面が盛り上がり、周辺海域には高温海面が広がっていった。日本列島は高温海水域にすっぽり包み込まれ、地球のホットスポットと化した。

地球のヒートアイランドとなった日本列島には、毎年のように熱波が襲い、巨大に発達した台風が襲うのだ。

地球温暖化は地球の生物生態系を締めつけだしていた。生態系がいたるところで綻びだし、森林地帯では立ち枯れや山火事が頻発する。食糧不足、水不足、バクテリアやウイルスなどのさまざまな病原体が人間社会を襲う。飢餓を広がり、食糧や水を巡る争いが世界各地で勃発する。

地球温暖化は人間社会に対して真綿で首を絞めるようにじわじわと影響をおよぼしはじめた。いたるところでさまざまな問題を生みだされていった。

気候変動だけではなかった。ついに、大気や海洋の大循環の乱れから地球の自転速度が変調を起こしていたのだ。これによって、地球内部のマントルの動きが変われば、地殻変動が呼び起こされるだろう。マントルの動きの変化は日本列島が位置する中緯度付近の地殻にとくに強く複雑な力をおよぼす。

日本列島に地殻変動の危険が迫っていた。

気候変動に翻弄され、気候異変や異常気象に悩まされることに加え、日本列島は地殻変動に直面することになった。

第一章

1

「大学を辞めるって、本当ですか、先生」
M新聞の佐藤が研究室に入ってくるなり、大声で言いながら、執務机の九鬼に近づいてきた。
彼は曖昧に返事し、いつもなら、佐藤の大きな声を聞きつけて教授が顔を出すところだと思いながら、応接セットの椅子へ移る。佐藤もいつものようにソファの真ん中に小柄な身体をどんと落とす。
彼は佐藤の小作りな顔をじっと見た。佐藤と会うのは教授の弔い以来だった。佐藤はまるで珍獣を見るような目をして彼を見ている。
「なにか……」
なにもする気はなかったが、彼は毎日研究室に出て、一日中机に座っていた。誰にも邪魔されたくなかった。
「気候変動の予測はどうするんですか。それも止めるんですか」
「もちろんだ」
「なぜです？　それも突然になんですか……」
佐藤の顔が迫ってくる。
「……」
「佐々木先生が亡くなったからですか……」
佐藤はずけずけと切り込んでくる。
「……」
彼は佐藤をじっと見る。佐々木教授は彼の指導教官であり、義兄であり、上司であった。彼はまた佐々木の後継者でもあった。
「やつらは教授の死を最大限に利用しようとしている。それでいいんですか」
「やつら？」
「久遠課長や学界の反対派のやつらですよ」
佐々木教授はK省の委員会で座長をしていた。久遠課長は若いエリート官僚で、委員会の事務局を担当する課の課長だった。
「久遠課長がどうしたというのですか」
久遠課長には佐々木教授はたびたび異常気象の襲来を事前に予告し、その都度応急対策を要請していた。教授の生命を奪った超巨大台風に際しても東京を襲う直前に警告を発し、対策の迅速な実施の必要性を指摘していた。だが対策らしい対策は講じられることなく、多くの犠牲者や被災者の発生を招くことになった。
「佐々木教授に全責任をなすり付けようとしている」
異常気象や気候異変の予測の不十分さや不正確さが指摘されていた。投入されているK省関連の研究費の効果が疑問視され、研究活動の非効率性に批判が集中していたのだ。今回の超巨大台風によって首都圏のゼロメートル地帯一帯が洪水に見舞われ、二〇〇万人にものぼる被災難民が発生したことがさらに拍車をかけているという。
「……」
「黙っていていいのですか。佐々木教授が亡くなったことをいいことにして、やつらは自分たちの責任を回避している。佐々木先生が機会あるごとに口を酸っぱくして、予測研究の充実や対策の必要性を訴えていたのに、

委員たちの反応は鈍かったし、事務局も積極的にサポートしようとしなかった。にもかかわらず、すべてを座長のせいにしようとしているらしい」

佐藤は盛んにけしかける。

「……」

彼は口を閉ざしたまま、佐藤を見つめる。

「先生、いいんですか、このままで。先生は教授と同罪ということになってしまうのですよ」

彼の脳裏に久遠課長の白いのっぺりとした顔が浮かんだ。彼は超巨大台風襲来の直前に、委員会の打ち合わせに託つけて久遠課長が一人で教授を研究室に訪ねてきたときのことを思い出した。彼が一〇〇万人から二〇〇万人の被災難民が出ると指摘したとき、白いのっぺりとした顔が一瞬赤みを帯びた。

あれは一体なんだったのだろうか。大熱波が来襲したときになにもしなかったことを思い出したからだろうか。あのときも所管外だといって、久遠課長はなんら動くことはなかったのだ。そのうえ、教授の対策要請を無視してなんら手を打とうとしなかったことを隠そうとさえしたのだった。

だがいまの彼にはもはやこんな詮索はどうでもよかった。

「佐藤さん、どうして東京沈下のことを記事にしないのですか」

彼に突然ひとつの考えがひらめいて、話題を変える。

佐々木教授と一緒に、超巨大台風を追っていたとき、ＡＣＡＲのアンダーソンからプレート微震動のニュースが入った。日本列島に太平洋側から迫っている太平洋プレートとフィリピン海プレートのふたつの岩盤の先端付近で微震動が起きているという。そしてその微震動は日本列島の太平洋岸の地中で生じている緩慢な地滑りによるものだということだった。

「え？　ああ、あれですか……」

佐藤は複雑な笑みを浮かべた。

「専門じゃないので発言を控えていますが、日本にとって極めて重大なことじゃないですか、あれは。新聞記者が取り上げないのはおかしい。なぜですか」

「それは……、ウラが取れないからです」

なぜか、佐藤は苦しそうに口を歪めている。

「ウラが取れない？　それはどういう意味ですか」

彼は構わず突っ込む。

「まだ東京沈下のデータが取れていないというのですよ、誰に聞いても……」

「日本の地震学者がそう言っているのか……」

彼は一瞬なにかしら作為を感じた。

首都圏にはいまだに超巨大台風の爪痕が残っていた。水浸しとなったゼロメートル地帯では決壊した河川の堤防や高潮防御の防潮堤の復旧に手間取り、工事がつづいていた。なぜか一時は復旧できたようにみえても、すぐ地割れが生じ、水が染み出すのだ。今回の復旧工事はまさに「賽の河原の石積み」のようだった。

工事を請け負う建設業者にはまたとない工事だったかもしれない。永遠に仕事のタネが尽きることが無いのだから。だが住民には薄気味悪いことだった。

「まあ、それにデスクもこのテーマに乗り気でないので……」

「地震研究には巨額の研究資金が国から出ているしな。研究者といえども国の意向には逆らえないか」

「復旧工事で結構地元も潤っているし、景気対策にもなる。あそこは首都の一部だし、水漏れするゼロメートル地帯だからといって、国は簡単に見捨てることができない。とにかく国の方針にいちゃもんをつけるようなことをわが社も避けたいというわけさ」

佐藤は投げやりに言い、自嘲気味に鼻先でふんと笑う。

「だからといって、エンドレスな復旧工事をつづけることは全くムダなことだ。東京は沈みつづけているのだぞ。住民を目隠しにして何時沈むか分からない泥舟に乗せているようなものだ」

「じゃ、先生が書いてくれますか。気象学者の地震論も面白いかもしれませんよ」

佐藤は冗談めかしに言い、寂しく笑う。

「そうか。書いたら絶対ボツにするなよ」

彼は東京沈下地震のことを書いたら、気象学会からも地震学会からも総すっかんを喰らうことになるにちがいないと思った。

「ハイハイ。先生が地震研究をはじめたら、異常気象の予測はどうなるのですか。気候変動研究は大丈夫ですか」

「もちろん、気候変動研究は止めるよ」

「え？　なぜです。これまでやってきた研究をなぜ止めるのですか。極端事象の予測はどうするのですか」

最近、九鬼は気候変動において頻発傾向にある異常気象のうち、とくに大きな被害を出すおそれのある超異常気象ともいうべき極端事象を対象とする精度の高い予測モデルの開発をおこなっていたのだ。

「あれはもう終りにする……」

「……」

佐藤は口を開けたままだ。彼は佐藤の大きく見開いた目をじっと見た。

「実は、異常気象発生の予測があればそれに応じて十分な対策がなされ、被害発生が抑制されることになると考えていた。それで、精度の高い予測モデルの研究開発を進めてきたが、考えが甘かったことに気付いたのだ……」

彼はこの際、佐藤に胸の内を話しておこうと思った。

人びとはなぜか、極端事象であっても単なる予測では真剣に対処しようとしないのだ。予測は予測に過ぎないと思うのか、それとも予測結果を信用しないのか、とにかく予測された極端事象に対して自発的に回避行動を積極的にとろうとしない。そのせいか、国の将来や国民の生活を考えるべき政治家や行政を担当する官僚の動きも鈍い。いや、彼らはいつのまにか目先の利益にのみに気を取られるだけで、いつ起こるか分からない未来の事象に対しては真剣に対策を講じようとする意思を欠くか、はじめから持っていないのだ。これではいくら精度の高い予測をおこなおうとしてもムダだ。対策が期待できないのなら、ほどほどの予測でも十分なのだ。

不意に、話している最中、彼の脳裏に佐橋祐子の面影が浮かんだ。

あのとき、超巨大台風襲来を告げ、口を酸っぱくして危険を訴えたにもかかわらず、彼女は超高層マンション屋上の実験室に籠り、超巨大台風の襲撃に立ち向かっていたのだ。その結果、佐々木教授が生命を落とすことになった。なぜなのか。

さらに問題がある。

よしんば、予測結果を真剣に受けとめ、適切な対策を講じられることになったとしても、それはあくまで被害発生を食い止めるものに過ぎない。単なる予測だけでは異常気象を防げないし、気候変動を鎮静化することは

できないのだ。

何十年何百年つづくか分からない気候変動のなかで、異常気象を予測するだけではいかにも消極的過ぎる。これではまるで異常気象から逃げ回っているようなものだ。これでは日本は、そして世界はじり貧に堕ちていくだけではないのか。

人間はただ、熱波に襲われ、日照りに焼かれ、干害を被り、水を求めて彷徨うことになるのか。ゲリラ豪雨の襲撃に遇い、超巨大台風に襲われ、洪水のなかで溺れてしまうのか。森林が立ち枯れ、山火事が頻発し、火の粉が飛び散り、野や畑を不毛の地の変えてしまうのか。海水温が高まり、極氷床の溶融や高温化による海水の急膨張で海面が上昇し、低地を襲うのか。そして人類はその先はどうなるのか。

どうしても異常気象の根源を取り除かねばならない。気候変動を落ち着かせ、温和な気候を取り戻さなければならないのだ。

「どうしようというのですか、一体」

佐藤の目が異様に光っている。

「地球温暖化がはじまったとき、地球は寒冷化に向っていた。寒冷化を心配していたのに、一転して地球は温暖化していった。なぜか。海洋大循環の熱塩大循環が衰えだしているというのに、なぜ温暖化が止まないのか。太陽活動が弱まっているのに、なぜ地球が冷えないのか」

過去の事例では、熱塩大循環が衰えだしたり、太陽活動が弱まったりしたときに、世界の各地で冷害や気温の異常低下に見舞われたのだ。そして現在、熱塩大循環が衰えだし、太陽活動もなぜか弱まっているらしい。

「それはこれまでの温暖化で海洋に貯えられた熱のせいで、急に気温が下らないだけじゃないんですか。そのうち下り出すかも……」

「残念ながら、その兆候すらない」

「どうして……」

「寒冷化の過程でなぜ温暖化がはじまったのか。それは人間活動による大量の二酸化炭素の排出のせいなんだ。産業革命以来、かってない勢いで大気中の二酸化炭素濃度が増えだした。このほかに、メタンなどの温室効果ガスも急増している。これらの温室効果ガスは現在も増え続けている。このために、熱塩大循環が衰えだしても、また太陽活動が弱まっても温暖化が進行しているのだ。いまは自然の寒冷化よりも人為的な温暖化の勢いのほうが勝っている状態なんだな。人間活動による二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を抑えなければ温暖化は止まらないのだ。地球温暖化に対して自然がブレーキを掛けているのに、逆に、人間がアクセルを踏んで暴走させているようなものだ。人間が地球温暖化を暴走させている状況のもとで、異常気象の極端現象を予測することにどんな意味があると思う？ゼロメートル地帯の復旧工事を『賽の河原の石積み』と言ったが、それとなんら変わるところがないのではないか。とにかく、この際、異常気象予測研究は終りにするということだ」

「ふむ……、それでこれからなにをなさろうというのですか。まさか、地震の研究をはじめようと思っているんじゃないでしょうね」」

佐藤は鼻を突きだし、クンクンと臭いを嗅ぐしぐさをする。

「バカ言え、オレはなんとかして地球温暖化の暴走を止めたいのだ。このままではわが息子の代まで地球がもたないからな」

人間は気付かずに、人類の存続を否定しているのだ。でなければ、生存環境である地球環境を自ら悪化させて平気でいるわけはない。彼は自分の首を絞めながら、まだ大丈夫とさらに自ら首を絞めている人を思い浮かべ

た。地球は人類自らの自作自演の滅亡劇を冷やかに眺めているにちがいないと思いながら、彼は椅子から立ち上がった。

2

「おお、クキさん、元気だったか。なかなか電話がつながらず心配していたが、無事だったんだな。本当によかった」

受話器の奥からアンダーソンの大きな太い声がした。それからアンダーソンは幾分声を低めて、佐々木教授が亡くなったことに弔意をつづける。

彼はアンダーソンがどこからその情報を仕入れたか知りたかったが、黙って聞いていた。教授の面影がふたたび蘇る。

「ところで、プレートの微震動のことだけど……」

「え？　東京はまだ沈下していないのか」

「非常に緩慢に沈下しはじめているようだが、データが取れないんだ。将来どうなるか微震動の詳しい解析データがあれば欲しいんだが……」

彼は地震学者の誰もが東京沈下について言い出さないのなら、自分が言い出そうかと思いはじめていたのだ。どんなしっぺ返しを喰らおうとどうでもよかった。彼にはもはや恐いものがなかった。

「うん、ピーターソンにあたってみよう。だが最近、ヤツもデータを出したがらないんだ。上から箝口令が出ているのかな……」

「箝口令？　なぜだ。微震動が終息しつつあるわけでもあるまい」

「『東京沈下』はトップシークレットとなっているらしい。これが表沙汰になれば世界経済が大混乱に陥る。ことに、米国が大打撃を被る」

アンダーソンによると米国と日本の関係者によって「東京沈下」の被害想定がおこなわれ、その対策が極秘のうちに進められているらしい。日本は破産状態になり、何百兆円に上る国債や社債が紙切れ同然となり、社会システムや経済システムが破綻する。これに伴い、米国などへの莫大な外国投資が回収されることになるし、また日本が大量に購入している米国債も売られ、米国経済ばかりでなく、世界経済が大混乱に陥ることになる。このため、両国は「東京沈下」を極秘事項として、時間稼ぎをしているのだというのだ。

首都圏の範囲を東京を中心とする一都六県（東京、千葉、埼玉、神奈川、茨城、栃木、群馬）とすると、ここには日本の富の約半分が集中している。その殆どが沈下の中心に位置する東京都と周囲の三県すなわち千葉、埼玉、神奈川の三県にあるのだ。そればかりではない。東京は世界有数の経済大国日本の政治経済社会の中枢であり、世界経済の一大拠点でもある。これが突然海の中に沈み、姿を消すようなことになれば、その影響ははかりしれない。

首都圏整備法ではさきの一都六県に山梨県を加えて首都圏としているが、いまここには約四二〇〇万人の住民が居住する。もし首都圏全域が沈下するとなれば、彼らはなにも知らない間に、ある日突然沈下を迎えることになるのか。沈下の範囲が東京周辺に限られても、東京都に住んでいる一五〇〇万人の都民はどうなるのか

いまもゼロメートル地帯の住民たちは何も知らずに、超巨大台風で水浸しになり泥まみれになった家や家財の処理に追われ、復旧に命を賭けて闘っている。いずれ海中に没するのに、新しい家を建てようとまでしているのだ。

「なんとしてもデータが欲しい」
「努力してみるが……」
「頼む。恩に着るよ」
「いっそのこと、ACARにキミが来たらどうだ。ピーターソンも最近は毎日顔を出しているし……」
アンダーソンはしきりにACARでプロジェクトに加わってくれという。彼はふと、それも悪くないと思った。
だが彼にはアンダーソンの甘美な誘いにのる前に、まだなすべきことがあった。
「考えておくよ」
彼は曖昧に応え、アンダーソンの反応を待たずに受話器を置いた。

3

「お元気でしたか」
九鬼は作業着の佐橋祐子を見付けると、背後から声をかけた。
「まあ、先生、こんなところまでいらしたのですか」
彼女は一瞬顔を赤らめ、ヘルメットを脱いだ。
超高層マンションでは補修と補強工事を進めていた。彼女の建築事務所が補強工事のアドバイザーと監査を請け負っていたのだ。
工事がほぼ完成したらしく、エントランスまでの通路も綺麗に清掃されていたし、ホールもピカピカに磨き上げられている。
「すっかり元通りになったようですね」
彼は先だって進む彼女へ驚きを響かせる。
「こちらへどうぞ」と言って、彼女はホールの片隅に設けられているロビーへ案内する。すっかり新しくなったアームチェアが並んでいた。
「一度お伺いしなければと思っておりましたが、時間が取れなくて……。その節はいろいろ有り難うございました」
佐橋祐子はあらためて深々と頭を下げた。
「お変りございませんでしたか」と言いながら、九鬼に向かい合うように椅子を引き寄せて腰を下ろす。
彼も繰り返すように同じことを言って、彼女の顔を見た。笑みを浮かべているが、久しぶりに会った彼女はかなりやつれて見えた。超高層マンションの復旧工事に忙殺されていたのだろうか。
「今日はなにかご用でも……」
口を開こうとしない彼の様子に彼女はしびれを切らしたらしい。
「復旧工事をやっていると聞いたので、どんなふうかと思って見学に来たところです。かえってお邪魔したようで……」
彼は佐藤の新聞に東京沈下地震のことを書くまえに、そのことを彼女に話しておこう思ったのだが、復旧工事に勤しんでいる彼女を見て、口に出せずにいた。
「いいえ、全然そんなことありませんわ。そろそろ上がろうかと思っていたところでしたから」
「そうでしたか。どんな工事をなさっているんですか。補修や補強をなさっていると聞きましたが……」
「壊れた窓ガラスや窓枠、それにベランダ、剥がれ落ちてた外壁の一部などを補修しました。それと地階が簡単に水浸しになってしまったので、そ

のための水防工事を追加したのです。水没した地下四階の復旧工事が一番難工事でした。なにしろ、大量の土砂が入って、結局、機械類はすべて取り換えざるを得ませんでした」
「それはそれは……」
彼はじっと彼女の目を見た。
「基礎基盤を周囲に広げることを提案したのですが、コストがかかると却下されてしまいましたわ」
彼女は俯いてしばらく口を噤んでいたが、顔を上げると、バツ悪そうな顔をしてぽつんと言う。
どんな沈下対策をやったところで、東京沈下地震は超高層マンションをいずれ倒壊させるにちがいない。だが彼女は地震のことを気にして、なんらかの対策を試みようとしていたのだ。そのことを知って、彼は幾分勇気づけられた感じがした。だがどう切りだしていいものか思案にくれ、ふたたび口を噤んでしまう。
彼女も黙って、そんな彼をじっと見ている。
突然、彼の脳裏に倒れて横倒しになった超高層マンションが現れた。二〇〇メートルもある巨大な建造物が横たわっていた。
ふたりの目が合った。同時に口が動く。彼は声を呑み込み、彼女が話しだすのを待った。
「この仕事が終わったら、実家へ帰えってしばらく休養しようかと思っています。そのまえに一度研究室にお伺いするつもりでいましたが……」
「そうでしたか。いつでもどうぞいらしてくださいと申し上げたいところですが、あそこにいつまでいるか分かりません」
「え？　やはり大学をお辞めになるのですか」
「多分……」
彼は東京沈下地震のことを書けば、大学にいたくても追いだされてしまうだろうと思った。
「そんなことをなさったら、佐々木先生は悲しまれることでしょう。先生はきっと、気候変動研究をつづけることを願っていたにちがいありませんわ。九鬼先生を後継者に決めていらしたから……」
「……」
彼は研究室にいると佐々木教授のことが思い出されてならなかった。教授はいつものように不意に研究室に入ってきて、彼の机に近づき、背後からディスプレーを覗き込むのだった。
彼はじっと彼女を見た。彼は彼女の背後にいる佐々木教授を見ていた。教授は彼女と彼女の一人息子のヒロシを救おうと出掛け、生命を落としたのだ。なにを躊躇しているのだ。彼女を救うために、なにが起ころうともいますぐ地震のことを告げなければならない。
彼は横倒しになった超高層マンションをもう一度思い浮かべる。そのとき、ひとつのイメージが広がった。
「……実は、東京沈下についてだけど……」
彼は恐る恐る言い出し、彼女の顔色を窺う。
「……」
彼女は黙っている。
「なにか聞いていますか」
彼はアンダーソンがトップシークレットとなっていると言っていたことを思い浮かべながら、彼女の目を見た。
「……」

彼女は口を閉ざしたまま、頭を横に振る。
「そうですか。完全に秘密が守られているのかな」
「え？　どういうことですか。いつ沈下がはじまるのですか」
彼女は彼の目をじっと覗く。
彼は彼女を見ながら、復旧工事を監督していたのなら沈下現象に気付かないはずがない。
ふと、彼は地震研究者たちがプレートの微震動を観測していながら、沈下についてなにも言わないでいるのは、箝口令が敷かれているからではなく、まだ沈下現象がはじまっていないからなのかと思った。
「復旧工事中、変なことに気付きませんでしたか。なにかおかしなことはありませんでしたか」
彼は河川堤防工事や防潮堤の補修工事が何度もやり直しを強いられていると聞いたことを思い出した。やはり、沈下がはじまっているにちがいない。
「なにも変だなんて感じなかったわ」
彼女はかえって不審そうな目をして彼を見る。
「ふむ……」
てんで彼の話を信じようとしない彼女を見ながら、彼の頭のなかをさまざまな考えが渦巻く。
もしかしたら、超高層マンション近辺だけはまだ沈下していないのだろうか。それとも強力な基盤工事のせいでが超高層マンションの不等沈下を防いでいるのだろうか。
それはそれとして、もし沈下がはじまっていれば、超高層マンションの住人たちはどうなるのか。なにも知らずに、ある日、突然倒壊する超高層マンションとともに命を失うことになるのか。
こうなったら、東京沈下について一度佐藤の新聞に書いて見て反応を探るほかないと彼はこころに決めた。
「……近いうち、東京沈下について佐藤くんのM新聞に書くつもりです。ボツにならなければ……。あなたの超高層マンションにも影響があることでしょうから、まえもって話しておこうと思ったのです」
「……」
彼女の口が動いたように見えたが、声にならなかった。
「いつ、お帰りになるのですか。まあ、ゆっくり静養なさってください。お戻りになったら、またお会いしたいですね」
彼は目を大きくして見つめている彼女に微笑みながら、ゆっくり立ち上がった。

4

「アーちゃん、お父さんだよ……」
母がアキラを呼んだ。だがアキラは二間つづきの座敷を走り回って、彼の側に近寄ろうとしない。
急に思い立って、彼は母を訪ねたのだった。やはりこの夏の暑さが堪えたのか、三か月ぶりに会う母の頭髪はすっかり白くなっていた。
「アキラを母さんの押し付けてしまって……」
彼はつくづく自分には父親の資格がないと思う。わが子をほったらかしにして、アンダーソンの誘いに乗ろうとしている。一度は研究を止めよう

と決めたのに、佐橋祐子に「佐々木教授が悲しむ」と言われて、急に、迷ってしまった。教授には地球全体モデルに挑戦すると見栄を切ったことも思い出され、この際、アンダーソンのプロジェクトに参加してもわるくないなと思いはじめていたのだった。

だがすっかり真っ白になった母の頭髪を見、寄りつこうとしないアキラの走る姿を眺めているうちに、急に寂しさが込み上げてきた。ＡＣＡＲへ出掛けようとは考えずに、東京を引き揚げ、田舎で母とわが子と一緒にのんびり過したいと思った。

「『親がなくても子は育つ』だよ。アキラもすぐ大きくなる。ようやく歩き出したと思ったら、もう走り回っている」

母は目を細めて走り回っているアキラを見ている。母は彼の胸の内をすっかり見透かしているようであった。

「体調はどうなの……」

彼が北極海の海洋調査に出掛けているとき、母は体調を崩し、危篤状態に陥ったことがあった。奇跡的に快復したものの、夏の熱波にふたたび体調を崩していた。

「なんだか近ごろはここもとても暑かったり、雨が降らなかったりで、今年の米は相当の減収になるそうだよ。困ったもんだ」

母は自分のことのように言い、落ち込んでしまう。

全国で農作物が熱波と干害の被害を受け、穀類の収量が激減していた。東北地方の稲作地帯では五割から六割の減収になると囁かれていた。

彼は母から聞くまでは殆ど実感が湧かなかった。

「お兄さん、いらしておったんですか。いつ、お出でなさったんですか、お母さま」

弟の妻圭子だった。

「もう終わったのかね」

圭子は薬剤師で、弟が開業している医院に隣接して薬局を開いている。

「信二郎はまだかね」

「そろそろ終えるころと思いますが、お兄さまがいらしていることを知らせてきましょうか」

圭子は母に伺い、彼の顔を見た。

「陽一郎はゆっくりしていくんだろ」

「圭子さん、いいですよ。二、三日、泊めてもらいますから、よろしく。それにアキラが世話をかけて申し訳ないです」

「そんなこと……、お母さまが……」

アキラがいつの間にか圭子の膝に尻を乗っけて、じっと彼を見ている。

「……アーちゃん、お父さまよ」

圭子は背を押して彼のもとへ行かせようするが、アキラは背をくねらすだけで動こうとしない。

彼も手を伸ばして「お出で、アキラ」と言えばいいのだと思いながら、手も声も出ないのだ。

「あ、兄さん、来ていたの」

太った大男が近づいてきて、どかっと畳に身体を落とす。弟の信二郎だった。細い身体の圭子と並ぶと、大人と子供といったところだ。

「じゃ、ご馳走をつくりましょうね。なにがいいかしら」

圭子が動き出すと、アキラは隣の信二郎の大きな膝に乗り移る。

「今晩はゆっくり飲みますか。そのまえにひと浴びするか。アーちゃん、一緒に入ろうか」

「うん」
「兄さんはどうする」
「あとにする。さきに入ってくれ」
「じゃ、アーちゃん入ろう」
アキラは大男のまえをとことこ走って行った。
「親子のように、すっかりなついてしまって……、」
母と彼だけとなった。母は溜息ともつかない大きな息を吐く。それには長男陽一郎に対する言い訳と厄介になっている次男信二郎への遠慮の響きが感じられた。
「アキラをほっといたからな。そろそろ東京を引き揚げようと思っているのだけど……」
「こっちへ帰ってくるつもりかね」
母は彼をじっと見ている。
「うん……。いつまでもアキラを預けておけないし……」
一瞬、彼の脳裏にアンダーソンの髭面が浮かんだ。
「アキラは甘えたい年頃だから、母親に代わるひとがいなくなると可哀相だな。わたしはいつまで生きているか分からないし……」
「かといって、アキラを世話するためにきてくれるひとはいないだろうし……」
「お前さえよければ、もうしばらくこのままにしておくのがいいかもしれない。アキラがものごとを理解できるようになるまでね。いまは甘えたいばかりだから、いろいろなことが分かるようになるまでは環境をあまり変えない方がいいように思うけど……」
「圭子さんには子供はできないの」
彼は幾分無責任な気持ちになりかけていた。実際、アキラを育てると言ってもどうすればいいのか皆目見当がつかなかったのだ。親なら手探りでもなんとか育てようとするものだが、彼はアキラが生まれたときからひとに預けていたままだった。これだけでも父親失格にちがいなかった。
「あのふたりにはできそうもない……」
母はぽつりと言う。
アキラの声がした。裸で走って座敷きに入ってきた。
「風邪を引きますよ。アーちゃんてっぱ」
圭子が着替えを持って追い掛けてきた。
「アーちゃんのお目めが付いちゃった。おばあちゃんとお寝んねしようね」
夕食がはじまり、しばらくすると満腹になったのか、アキラがこっくりこっくりしはじめる。
「アーちゃんはママと寝んねする」
閉じていた目を半目に開け、アキラは圭子を探す。
「ハイハイ、歯を磨いて寝んねしましょうね」
圭子はアキラを連れて、出て行った。
毎日こんな調子で過ごしているのだろうか。彼は驚き、目を大きくしてアキラの後姿を追った。
信二郎はじっと兄の動きを見て、黙ってコップのビールを飲み干す。
しばらく沈黙が支配した。沈黙から気まずい雰囲気が漂い出す。
「いまのままではアキラが可哀相だ。兄さんはどう考えているんかね……」
信二郎が口を開く。
「うん……」

母には東京を引き揚げると言ったが、母は黙って口を開こうとしない。
「アキラは圭子をママと呼ぶが……」
「預けっぱなしですまないが……」
「兄さんがひとりで育てることはムリだろう。アキラは一歳半だが、二歳、三歳になると母さんにもだんだんきつくなる」
信二郎はしばらく黙って彼の顔を見ていた。彼が話し出すのを待っているようにも見えたし、どう話を切り出そうかと考えているふうにも見える。
彼の脳裏に、突然沈下する東京の情景が浮かんだ。幼児を抱え、老母の手を引いて避難する中年男の姿があった。
「母さんにいつまでもおんぶすることはできないな……」
彼は力なく言う。
「アキラは未熟児だったね。そのせいか分からないが、一寸、モロイ感じがする」
「モロイ？」
「病気に対してだ。成長すれば丈夫になるかもしれないが、小さいうちはよく見てやったほうがいい」
「……」
「どうかな、アキラを医者にして、九鬼家の跡取りにしては。母さん、どう思う？」
「……」
「兄さんも親父に対するカシが返えせる」
「カシか……」
父は彼を医者にして、医院を継いでもらいたがっていた。彼は父の願いを拒否して、気象学者の道を選んだのだった。父が死ぬまで、二人は和解することはなかった。
「こう言ってはなんだけど、幸い、われわれ夫婦には子がない。アキラを……」
「分かった」
彼は話を打ち切りたかった。死んだ亜耶子が大きな目でじっと見ているような気がした。かといって、ママといってせっかくなついてる圭子からアキラを無理やり引き離すこともできなかった。アキラは生まれた直後から保育器のなかに入れられ、一度も抱かれることなく母親を失ってしまった。アキラはいまようやく代わりのママに巡り会ったのだ。またアキラから母親を奪うことになるのかと思うと、彼は迷ってしまう。アキラと親子の縁が切れるかと思うと、切なかった。
亜耶子が死に、彼女の兄である佐々木教授が亡くなった。誰に相談することも必要なかった。だが彼はひとりできめることができなかった。
「……分かった。いますぐ決められないけれど、信二郎の気持ちはよく分かった。有難う。アキラに一番いいと思えることが一番だね。圭子さんにママになってもらえるのなら、アキラにとって一番かもしれない」
彼は自分に言い聞かせるかように、ゆっくり噛締めるように言った。

5

「ママだ」
門のまえに停まったタクシーから降りた佐橋祐子に目敏く気付き、ヒロシが庭から飛び出してきた。

「危ない、気を付けて……」
ヒロシのあとを追いかけて、母寿子の声がした。
「ただいま……、お母さん」
母は庭で花壇の手入れをしていた。植木鉢や移植ベラが散らかっている。ヒロシも手伝っていたらしい。
「祐子かい、電話くれれば迎えにいったのに……」
母は一瞬驚いた顔をした。
「……今日はお仕舞いにしようね。ヒロシちゃん、さあ、片付けてちょうだい」
寿子は軍手をした手の甲で額の汗を拭き、しげしげと娘の顔を見、「少し痩せたかね」と言う。
十一月なのに、まだ暑い。日中には二五度にもなる。日なたにいると、汗が出る。祐子は日陰を探す。母の目がうるさかった。
「ヒロシ、おばあちゃんが呼んでいるよ」
ヒロシはママの手をいじくり、そばを離れようとしない。四歳そこそこで、母親と何日も別れ別れでいたのだ。いくら可愛がってくれても、祖母に母親の代わりは勤まらないのか。祐子はヒロシに片手を預けたまま、植木鉢や植木道具を自分で片付けだした母の姿を追う。自慢していた頭髪にも白髪が混じっている。どちらかといえば、背も高く、大柄な感じだったが、身体がひとまわり小さくなったようだった。
若い頃は医師の夫が経営しているクリニックで経理を手伝っていたが、いまは郊外に建てた家でもっぱら植木いじりや花壇づくりに時を過ごしていた。
「さあ、なかに入って……」
寿子は散乱している道具を片付けると、ふたりを急き立てる。
玄関を入ると、中央に南向きの広いリビングがある。リビングの両翼には東側に和室が二つ、反対の西側にはダイニングキッチンと洋室一つがあり、洗面所、風呂、トイレは玄関にならんで北側にあった。両翼の上には収納庫兼用の屋根裏部屋があって、リビングから登れるように収納タイプの簡易梯子が設置してある。
リビングは吹き抜けの高天井で、真ん中に大きな鋳造の黒い暖炉が鎮座し、太い煙突が高い天井へ向かって伸びている。リビングの西側半分が日常的なプライベート空間で、西隅に大きなソファが置いてあった。
ここに座ると、家中が一望できる。東側の奥にある和室の境の襖はいつも開放されているし、ダイニングキッチンの境はスタンドタイプで、窓には透しガラスを嵌め込んであるのだ。
祐子はソファに腰を下ろすと、大きく息を吐いた。自分が設計した家だが、いつ来ても気持ちいい家だと思う。
「マンションは住めるようになったのかい」
寿子はお茶を運んで、テーブルのまえに座る。椅子に座ればいいのに、いつもの癖で、テーブルを座卓のようにして座り込んでしまうのだ。
「ヒロシちゃん、今夜はなにが食べたい」
祐子の返事を待たずに、寿子は母親に寄りかかって甘えているヒロシに話し掛ける。
「父さんに電話して、外でなにか食べようかね。祐子はなにがいい」
寿子は話相手をつぎからつぎに変えていく、彼女は返事を待たずに、テーブルに両手をかけて立ち上がる。
猫背の母の後姿を見て、祐子は老いを感じた。もし建築士の仕事を止め

て帰ってくると言ったら、母はどんなふうに思うだろうか。驚いてショックを受けるだろうか。それともよろこんで迎え入れてくれるだろうか。
「電話が通じない。誰もいないのかしら。今日は何曜日……」
「木曜日よ」
「じゃ、休診日だわ。あ、今朝、山荘を閉めに行ってくると言っていたようだったわ、いやだわ」
寿子はバツの悪そうな顔付きをした。
「いつ、帰るのかしら」
母の様子に祐子の脳裏を不安が過る。もしかしたら父の行き先は山荘でないかもしれない。それよりも今朝の出来事を忘れている母のことが気になった。
「おじいちゃんはどこへ行くと言っていて出掛けたの。ねえ、ヒロシ」
「うん……」
ヒロシは彼女の隣でテレビのアニメに夢中になっている。
彼女は携帯を取りだし、父の携帯を呼んだ。何度呼んでも、父は出ない。
「出ないわ。携帯をもっていかなかったのかしら」
不安が募る。彼女はヒロシを驚かそうと、事前に連絡せずに、突然帰ってきたことを悔いた。
「今日中に帰ってくると言っていたから、もうじき帰ってくるよ。さあ、夕食の準備をしようね、ヒロシちゃん。なにがいいかな」
「カレーライスがいい」
「じゃ、カレーにしましょうね。ヒロシちゃん、手伝ってちょうだい」
「ハーイ」
「祐子もそれでいい？」
寿子は返事を待たずに、台所へ立った。ヒロシが走って先を行く。
彼女は母の様子をじっと見た。別に変なところはなかった。それよりもすっかり母に懐いているヒロシの行動に目を見張ってしまう。
祐子は立ち上がる気にもなれず、ソファに深々と身を沈め、欠伸をかみ殺す。
彼女はふと、建築士の仕事を辞めて帰ってくると、こんな毎日が待っているのかと思った。こんな生活に耐えられるかどうか分からなかった。かといって、もし東京沈下地震の危険があるならば、ヒロシを連れた超高層マンションへ戻るわけにはいかなかった。一度は東京を離れようとこころに決めていたものの、彼女は迷いだしていた。

6

「九鬼先生、論文はまだですか。東京は本当に沈下しているのですか。どうしてそんなことが起こるのです？」
佐橋祐子は思い詰めたような面持ちで矢継ぎ早に問い掛けると、口を固く閉じ、じっと彼の目を覗いている。
彼女は「最後の決断」をくだす前に、東京沈下のことをもう一度確かめておきたいのだという。
彼は目の前の佐橋祐子をしげしげと見た。彼自身、郷里から戻ったばかりだった。机でアキラを思い浮かべながら、どうしようか迷い、あれこれ考えていた。
論文を出せばもう後戻りは出来ない。大学を辞めて研究も止めるか、研

究をつづけるなら日本を離れてＡＣＡＲへ行くか、いずれかの選択肢しか残されていないのだ。

そんなとき、突然、なんの前触れもなく、なにかに憑かれたような顔をして彼女が研究室に現れたのだ。机の前に佇む彼女に彼は驚き、しばらく声が出なかった。

「最後の決断とはなんですか……」

彼は机から立ち上がり、彼女の背を抱え、応接セットへ連れていった。

彼女はもし東京沈下が本当なら、仕事を辞めようかと思っているのだと細い声で言った。しばらく休養しようと、実家へ帰ったが、東京が沈下するなら、ヒロシを連れて超高層マンションに戻るわけにもいかず、かといって、ヒロシを置いて自分だけ帰る気にもなれなかったというのだ。

「本当に、沈下するのですか」

「ウソもホントもない。沈下はすでにはじまっているはずだ……」

「……」

彼女は目を大きく見開き、口を半開きにして、彼をじっと見つめている。

「公表されていないのは、まだ正確なデータが取れないのか、それとも隠しているかのいずれかだ。とにかく、僅かづつだが東京は沈下しはじめているはずだ」

彼は自分に言い聞かせるように言う。

「どうしてそう言いきれるのですか」

彼女は相変らず、不審の目を向ける。

「大まかに言えば、それはこうです……」

彼は論文を書くためすでに頭のなかで組み立てていた構想を話しだす。

地球の周りには大気の層があるが、地表に近いところから対流圏、成層圏、中間圏の順で構成され、それぞれ特有の風系をもつが、大気の殆どが高度一〇数キロメートル以下の対流圏に存在する。対流圏では大気は激しく対流しているが、東西方向と南北方向に大きな循環流を形成する。これが大気の大循環である。これを動かしているのが太陽エネルギーであり、これに地球の自転が大きな影響をおよぼしている。

地球上におけるこのような大循環は大気だけではない。海洋にも地球内部のマントルにも大気の大循環に匹敵する大循環が存在する。

最近、大気の大循環が地球温暖化によって狂いだし、大きく撹乱しだしているのだ。地球温暖化によって狂いだしたのは大気の大循環だけではない。海洋の大循環も狂いだした。そしてさらにこれらがマントルの流れにも影響をおよぼしだしていると考えられる。これが東京沈下をもたらす原因となっているらしい。

「地球温暖化によって地球の内部まで影響するのですか」

彼女はしげしげと彼の顔を見た。

「マントルは高温で柔らかくなっていて、地中でゆっくり対流循環をしている。どろどろに溶けたのがマグマで、プレートの生成や火山噴火などのときに地表へ噴き出す。東京沈下のメカニズムは……」

彼はつづける。メカニズムはこうだ。

大気の大循環が狂いだして地球の自転に影響をおよぼす。地球温暖化によって南北方向の大循環が乱れ、東西方向の大循環も大きくぶれるようになってきている。その一例は、中緯度付近を西から東へ吹くジェット気流（偏西風）の蛇行現象の頻発だ。

その結果、地球の自転速度が若干遅れだしているらしい。このことがマントルの流動に影響をおよぼし、流れの方向を変えると考えられるのだ。

自転速度の減速変化がマントルのこれまでの水平方向（赤道方向）への流れを垂直方向（極方向）へとシフトするように作用する。この変化は当然地殻へも影響をおよぼすことになる。

マントルの水平方向（赤道方向）から垂直方向（極方向）へ変化が地球表面を覆う地殻（プレート）に対して圧縮と伸張の力をおよぼすが、地球の構造上中緯度付近が一番複雑な影響を受けることになるのだ。日本列島付近はいくつかのプレートが集中しているところだが、とくに東京近辺は複雑にプレートが入り込んでいる。東京がのっている陸のプレートの下に南からフィリピン海プレートが潜り込み、その下に北から太平洋プレートが潜り込んでいる。これらプレートに圧縮と伸張の複雑な力が作用することになるということだ。

「それに最近、フィリピン海プレートの先端に太平洋プレートの『破片』である大きな岩盤があって、太平洋プレートはそれをのせたままフィリピン海プレートの下へ潜り込んでいるのだと指摘されている」

「東京はその『破片』の上にのっているというのですか」

「そういうことらしい。『破片』はかなり大きく、関東地方一帯をカバーするらしい……」

関東地方の地中構造がどこか変わっているらしいことはまえから指摘されていたが、最近、産業技術総合研究所などの研究チームが過去の膨大な事例解析を行い、地震時に発生する地震波の伝搬速度から「破片」の存在を確認したというのだ。それによると、そのプレートの破片（岩盤の塊）は関東平野の東京都から茨城県周辺に広がる範囲の地下約三〇から一〇〇キロメートルのところにあり、一〇〇キロメートル四方で約二五キロメートルの厚さの大きさであるらしい。

「まあ、関東平野地下の地殻構造は、一番上にこれがのっている陸のプレートがあり、その下（二番目）にフィリピン海プレートが潜り込み、その下（三番目）に『破片』プレートがあり、さらにその下（四番目）にそれをのせている太平洋プレートがフィリピン海プレートの下へ潜り込むという四層の重層構造になっているということらしい。このような複雑な地殻構造のところに、マントルの流れの変化からの圧縮や伸張といった複雑な力が新たに作用することになる。現在、この付近で微震動が継続して発生しているが、もしかしたら『破片』が滑り出しているのかもしれない……」

彼は「破片」を先端にのせた太平洋プレートがカーブを描いてフィリピン海プレートの下へ潜り込んでいるにもかかわらず、「破片」が太平洋プレートとともにフィリピン海プレートの下へ沈降していかなかったのは、いままでフィリピン海プレートに押さえ込まれる形で「破片」が太平洋プレートの上に止まっていたからだったにちがいないと思った。今回、地球温暖化による大気大循環の乱れによって地球自転速度が減速し、マントルの新しい動きが生じた。これによって、フィリピン海プレートと太平洋プレートの潜り込む速度が変化すればどうなるか。フィリピン海プレートによる「重し」を失えば、「破片」が太平洋プレートの上で滑るように独自の動きをはじめることになりやしないか。

「『破片』が滑り出すのですか」

「そうか。フィリピン海プレートが動かず、『破片』を置き去りにして太平洋プレートだけがいままでとは逆に後退しだしているのかもしれない。とにかく、東京がのっている『破片』だけが置き去りになったままで、両プレートにいままでとちがった動きが生じているということだろう」

彼は自転速度の減速によって、地球の赤道付近が縮小しているのに対し

て、中緯度の日本列島付近ではむしろ膨張し、両プレートが引き離されているにちがいないと思った。どこまで膨張していくのか分からないが、「破片」だけが取残されることになる。そのため、「破片」は太平洋プレートの支えを失い、次第に沈下していくのだ。

「そういうメカニズムですか。分かりました。ところで、自転速度はどの程度減速しているのですか」

「うむ、地球温暖化によってどれだけ遅れたかのデータはまだないが、このところ遅れ気味だ」

「計測は難しいのですか」

「地球の自転にはさまざまなものが影響をおよぼしているからなあ……。でも東京が沈下するとすれば影響は甚大だ。その可能性が考えられる以上、事前に知らせるべきではないのか」

彼にはこれで十分だと思っていた。かといって、彼女は「最後の決断」をしようとしているのだ。彼女がさらなる確証を欲しがっていることは理解できた。だがこれ以上のことは分からないのだ。もし論文を発表すれば、どうなるか。東京は大混乱に陥るだろうか。それとも地震に慣れっこになっている住民たちは、なんの頓着もせず、どこ吹く風と聞き流すことだろうか。

彼には彼女の目をじっと見て、彼女の決断をひたすら待つほかなかった。

7

「できたよ。例の東京沈下の原稿だ」

佐藤は前屈みになって、手渡された原稿をテーブルに広げて見入っている。彼は佐藤をぼんやり見ながら、佐橋祐子はあの日、家族のもとへ帰ってどんな話をしたのだろうかと思った。彼女は最後の決断のまえに、もう一度東京沈下について確かめたいと休養に帰った実家を抜け出て彼を訪ね、その日のうちに実家へ戻っていったのだった。

「先生は大学を辞めるつもりなんですね」

佐藤は原稿を束ねながら、ぽつんと言う。

「うん、そのとおりだよ。こんなことを書いちゃ誰も相手にしないだろうからな。佐々木教授もいなくなったし……」

彼は遠くを見た。原稿を見て、教授はなんというだろうか。

「東京は沈下しているのですかね……」

佐藤がふいにのんびりした声を出した。

「信じないのかね。一〇〇年かけて一メートル沈下するとなれば、地球温暖化による海面上昇と殆ど変わらないからな」

「そういうことか。地球温暖化といっても反応が鈍いから、今度は東京沈下地震を持ちだした、と声高らかにからかう手合もいるかもしれませんね。とにかく、佐々木教授という後ろ楯を失ったわけですから、学界の連中は言いたい放題でしょう。それでもいいのですね」

佐藤は心配そうな顔をした。

「いまは目に見えない程度でも、東京が沈下し出したら、もっとスピードが早くなるだろう。それに地球温暖化による海面上昇が加わるのだ。東京はみるみるのうちに海中に水没していく。そのときになって慌てても遅い」

彼の脳裏には全く別の情景が写しだされていた。それはまるで立ち枯れした森林のような都会の情景だった。

窓ガラスが破れた超高層ビルが照明もなく暗闇に立ち並び、風もないのに揺れ動いているのだ。水はけの悪い湿地帯が広がり、マラリアやデング熱などさまざまな感染症を媒介する無数の蚊が飛び交い、ヒトや動物を襲う。病院は発症した人びとで溢れ、収容できない患者は屋外に放置されて蚊の標的となり、マラリアの病原虫やデング熱ウイルスなどの供給源となっているのだ。

湿地帯と化した都市には水溜まりがいたるところにでき、都市を侵食していく。建物が水浸しになり、道路が水没していく。食糧の供給が途絶え、都市住民に飢餓が迫る。

東京沈下なんて序の口に過ぎなかった。地震や地殻変動でなくても、熱水塊が襲い、熱波が襲い、超巨大台風が襲う日本列島にとって、やがて来る海面上昇を思えば、大都市東京が水没することは時間の問題だった。

地球温暖化の果てに、さまざまな感染症が蔓延し、大量の飢餓難民を抱える臨海の現代都市には逃げ道のない艱難が待ち受けているのだ。

最後のダメを押すように、都市機能を喪失した現代文明都市に感染症が蔓延し、食糧が欠乏して飢えが襲おうことになるのは、当然といえば当然のことだった。東京沈下地震はその到来を若干前倒しにしたに過ぎなかった。

「ホントにそうなりますかね……」

佐藤はまだ半信半疑の面持ちでいる。

「東京沈下現象ははじったばかりの地球システム大撹乱の一過程における小さな出来事に過ぎません。これはほんの小さな火の粉といった程度のものですよ。このあと、人類には、いや日本には長い試練が待ち受けているはずだ」

「まだつづきがあるのですか。とにかく、デスクと相談してみます、掲載できるかどうか。つづきがあるということでいいですね」

佐藤は彼の返事を待たずに立ち上がった。

第二章

8

一週間過ぎても、反響がなかった。

「ああ……」

ふいに声が洩れた。九鬼は自分の声に驚き、一週間前のM紙夕刊の紙面から目を上げ、あたりを見回す。研究室には人影がなく、深閑としていた。

彼には奇声を発するクセがあった。だが大学へ戻ってからクセを忘れていた。このところ奇声を発することがなかったのだ。

彼はふたたび開いたままになっている夕刊に目を落とす。一週間前佐藤が置いていった夕刊だった。紙面の中央に大きな活字で「東京、沈下か」とある。論文の見出しだった。彼がつけたタイトルは「地下で微震動発生」といった地味なものだった。内容も断定を避け、穏便な表現で「沈下」の可能性を指摘する程度に止めていたが、このタイトルでは論調全体をセンセーショナルなものとして受け取られそうだった。

あのとき、佐藤はなぜか見出しの変更も告げず、夕刊を手渡すとそそくさと帰っていった。

彼は電話機に手を伸ばし、受話器をとった。佐藤を呼ぼうと、M新聞社の番号押した。呼びだし音が響く。だが彼はいまさらタイトルの無断変更を持ちだしてもどうかと思い直して途中で切ってしまう。

彼はふと、一度辞めると決めた大学にまだ未練があるのではないかと思った。一週間経てもいまだに変えられたタイトルを気にしているようでは、やはり無意識のうちに学界の評判を気にしていたにちがいない。それにまだ研究活動を完全に放棄する決心ができずにいたということだ。

彼はこころのなかを探りながら、もう一度紙面へ目を戻す。

最後の結びのところで、彼はひとつの問題を提起した。今後、しばらくの間、西から東へ吹くジェット気流（偏西風）が地球自転速度との関係で弱まると思われるが、このほか地中の動きが気候にどのような変動をもたらすか気になるところだと指摘し、暗に「地球全体モデル」による解明を促したのだった。

これも彼の研究活動への未練を示すものと言えるが、それにしても不思議なことに、学界からなんの反響のないのだ。地震学会や気象学会からも研究者からもなんとも言ってこないし、東京沈下というセンセーショナルな話題にもかかわらず、政府や東京都などの地方自治体の行政担当者からなんの問い合わせもないのだ。

「あの論文への問い合わせなどがそちらへ来てませんか」

彼はたまりかねて、佐藤へ電話した。

だが予期した返事はなかった。「一〇〇パーセント無視されている」のか、彼はそんな気がした。

地震学者の研究領域へ無断闖入で、彼らの逆鱗に触れたのか。研究範囲を広げすぎたために、気象学者の反発を買ったのだろうか。

彼は佐々木教授を思い浮かべた。教授がいなくなって、彼は自分の力なささを実感させられた思いだった。彼は窓辺に佇み、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

それにしても、沈下するかも知れない首都圏の四二〇〇万人の住民がどこ吹く風の無反応はどうしたことなのか。すっかり地震ずれしてしまって

いるのだろうか。それとも諦めきっているのだろうか。もっとも沈下する範囲を明示しなかったので、自分の住んでいるところが沈下するとは思わなかったのか。

例の沈下のおそれのある「破片」に乗っている範囲が東京都と周辺の三県としても、人口は約三三〇〇万人だ。それに北関東の三県が加われば四〇〇〇万人を超える。四〇〇〇万人が全く無関心とは、彼には信じられないことだった。

9

「先生、いつぞやは有り難うございました。やはり……」

受話器の奥から佐橋祐子の声がした。実家から超高層マンションへ戻ったという。

「ヒロシちゃんは……」

「一緒です。落ち着いたら、お訪ねします」

彼女は早々に電話を切った。

彼は未練がましく、しばらく受話器を持ったままでいた。

彼女はやはり超高層マンションに居続け、建築士の仕事をつづけるというのか。

理由は分からなかったが、軽い失望が彼を襲った。胸の中にさざ波が立ち、次第に広がっていく。

彼はあのとき東京沈下について詳しく説明したつもりでいた。それに彼女は夕刊も見たはずだ。なのに、なぜいずれ倒壊する超高層マンションに戻る決断をしたのか。それもヒロシを連れて来るとは。

彼には分からなかった。

もしかしたら、他から圧力があったのだろうか。それで仕事を辞めることができなかったのか。もしそうだとしても、なぜヒロシまで連れてきたのか。

論文の論調が弱かったせいか。そのために「最後の決断」が鈍ったのだろうか。もっと断定的に書くべきであったか。

彼は自分の力の足りなさゆえに、ひとりの女に誤った道を歩ませることになったのではないかと思った。とにかく、東京沈下の最中、ヒロシを連れて超高層マンションに戻るとは無謀すぎる。

ふと、彼の脳裏に超高層マンションが横倒しになっているイメージが浮かんだ。それはまえに一度見たものであった。垂直に二〇〇メートル高く延びた超高層マンションが水平に二〇〇メートルの長いマンションに変わっていくイメージだった。

「超高層マンションを倒してしまえばいいのだ」

彼は口の中で呟く。佐橋祐子を思い浮かべた。彼女が来ないのなら、自分から行けばいいのだ。

彼は研究室を飛びだした。タクシーがどの道を通ったか、全然記憶になかった。

目の前に、超高層マンションが聳えている。

エントランスはすっかり綺麗に改装されて、大理石の床はピカピカに光っていた。

ロビーで佐橋祐子が待っていた。

「突然、お伺いして……」

彼は携帯で呼び出したときの驚きの声を思い浮かべ、急の訪問を彼女に詫びた。

「夕刊拝見しましたわ」

彼女は椅子を斜めに寄せながら、明るい笑顔を向けた。一瞬、彼は死んだ亜耶子かと思った。亜耶子もよく黒い大きな目に笑みを浮かべて彼を見つめることがあった。

「そのことですか、あれは極めて控えめに書いたものです。あれを見て、ここに戻ろうと考えられたのではないかと……」

「いいえ、でもお話よりのかなり穏やかな表現でしたので一寸気にはなりましたが……、論文表現ではこんなものかとも思いましたわ」

「では、どうしてお戻りになる決断をなさったのですか。わたしは一言もそう勧めたつもりはありませんが……」

彼は彼女をじっと見た。彼女は一瞬視線を宙に浮かせた。

「……どんな事情があるか知りませんが、とにかくここに小さなヒロシちゃんを連れてくるのは無謀ですよ。いまは安泰のように見えますが、じわじわと沈下が進み、ある日突然窓ガラスが割れ落ちたり、外壁が剥がれ落ちたりしはじめることでしょう。でもこんなことは序の口です……」

「序の口ですって……」

彼女は目を丸くして彼の目を覗き込んでいる。

「そうです。沈下が進めば、やがてこの辺には水が浸入して一帯が湿地帯と化すことでしょう。いたるところに水溜まりができ、ボーフラが湧き、マラリア、デング熱、日本脳炎などさまざまな感染症を媒介する蚊が大発生することになるでしょう。蚊の大群が住民を襲い、この一帯で感染症が蔓延し、患者が溢れ、感染症の病巣地帯となるかもしれません。いや、そうなります」

「……」

「さらに、ライフラインが破壊され、水や食糧が途絶え、一帯の住民は飢餓に襲われることになるかもしれません」

「でもそんなことになるのはかなり先のことじゃないですか」

「そんなことはありません。一年を経るまえに、現実となるでしょう。早ければ、来年の春には倒壊するビルが出るかも知れない」

「そんな……」

「とにかく、ヒロシちゃんを……」

彼の脳裏を不吉な予感が過った。超巨大台風が襲ったとき、超高層マンションに留まっていたヒロシを実家へ避難させようとして佐々木教授が犠牲になったことが鮮明に思い出された。そのときと同じようなことがいまふたたび繰り返されようとしているのだ。彼はなんとしても彼女を説得して、ヒロシを実家へ預けるか、それとも彼女ともども実家へ引き揚げるか、のいずれかを実行させたかった。

「殺虫剤を散布すれば蚊の発生を防げるじゃありませんか。どうしてもヒロシを離すわけにはいきません。離れれば忘れられてしまうわ」

彼女は必死の面持ちで訴える。

「そんなことはない……。じゃ、一緒に帰ればいいではないですか」

「それはできないわ」

「なぜですか。あなたはわたしが言っていることをデタラメだと思っているのですか。間違っていると考えているのですか」

「……」

「そんな頑迷な態度が教授を死に追いやったじゃないのですか」
「……」
彼女は恨めしそうな目をしてじっと彼を見つめていた。やがてその目に涙が溢れ、頬を伝って流れ落ちる。
「ごめん、言い過ぎました。これはあの日、背を押して大雨のなかへ教授を送り出した自分に対する戒めでもあるのです。ヒロシちゃんを救いたかったら、いますぐなんとしてもそうしなければ……」
「でもヒロシをひとりだけ残すことはできないわ……、死ぬなら、一緒でないと可愛そう……」
「何を言うのですか」
「でもそんな酷いところにヒロシだけをひとり残せますか」
「だからといって、いずれ倒壊する超高層マンションにしがみついていることもありますまい」
「……」
「ヒロシちゃんたちの世代の人たちのために、沈下や感染症が蔓延するような危険な東京に代えて、こんなことが二度とない新しい都市を造ることにしませんか」
彼はじっと彼女の目を見て言った。

10

「ドクター　クキ、トップシークレットと言ったはずだ。なぜ、あんなペーパーを書いたんだ」
受話器を取ると、アンダーソンの怒気を含んだ声がした。
「四〇〇〇万人もの生命にかかわることだ。黙っていられない。キミだって、そうするんじゃないのか」
「……」
アンダーソンは黙っている。
「いずれ分かることだろう。それを、なぜ、隠そうとするんだ」
彼はふと、本当に東京沈下が日米間のトップシークレットだったのかと思った。
「ピーターソンがいきり立っている。漏洩の情報源がどこか躍起となって探し回っている。彼がそんなふうに振る舞って自分に降りかかる嫌疑の火の粉を振り払おうとしているらしいがね。とにかく、当分動きがうるさいから、しばらくじっとしとるほかないが、実は……」
アンダーソンが言うには、これは軍関係のトップシークレットではなく、金融筋の要請らしいという。東京が沈下するとなれば日本経済の破綻は免れない。株価が下落し、株は紙屑同然になるだろう。米国はそのまえに日本に投資している資本を引き揚げておきたいのだ。また日本経済が破綻すれば、日本が大量に買い込んでいる米国国債が売り出され、また米国に投資している日本資本の引き揚げもはじまる。
こうなれば日本経済ばかりでなく、米国経済もおかしくなる。世界の一、二の経済大国の経済が破綻すれば、世界経済がおかしくなるだろう。
これを回避するため、東京沈下はできるかぎり伏せておきたいのだ。幸い、東京沈下の進行は微震動を伴いながらも極めて緩慢だ。伏せて置けるだけ伏せておくことにその筋は合意し、両政府に働き掛けているらしいのだ。

「そんなことが通ると思っているのか。ある日突然、住んでいるマンションが傾きだし、倒壊するとなれば、バカを見るのは住民じゃないか」
彼は受話器を叩き付けたかった。
「日本ばかりではない。各国も動きが取れないようになっている。米国は穀物を輸出することによって各国を押さえ込む仕組みを作り上げているんだ。だから勝手に動くことができない。勝手に動けば穀物輸出をストップされてしまう」
米国は食糧を戦略物資と位置づけ、各国へ低価格で食糧輸出を行い、各国の食糧自給率を下げ、米国産穀物などへの依存度を高めてきた。これがいまではアキレス腱となって各国を縛っているのだ。
「ことに、日本の食糧自給率は低いからな。米国の言いなりか。だが、穀倉地帯の中西部で日照りがつづき、干害のおそれが出ている。今後も小雨の傾向がつづくはずだ。地下水依存も限界がある。穀物の生産量も落ち込んでいくだろう」
「そうなればますます価格が上昇するだけだ」
余剰穀物が石油代替燃料のバイオエタノール生産へ向けられ、トウモロコシなどの価格が異常に騰貴したことがあった。
「生産量がゼロになる……」
「そんなことは考えられない。それとも……」
「そうだ。今後、ジェット気流（偏西風）が弱まり、蛇行する傾向が長くつづくことになる。これで北米中西部は激しい干害に襲われることになる。そのあとには……」
「そのあとはなんだ……」
「それはまだ言えない」
ポールシフトが待っているのだ。だがこれについては迂闊に口にすることはできない。彼はじっとアンダーソンが口を開くのを待った。
「……」
受話器の奥から聞こえてくるのはアンダーソンの激しい息遣いの音だけだった。彼はしばらく息遣いを聞いていた。だがアンダーソンは口を開こうとしない。
「じゃ、また」と言い、彼は受話器を置いてしまう。
アンダーソンよりまえに受話器を置くことで、彼はＡＣＡＲとの関係を切ることにしたのだった。

１１

「先生、用事はなんですか。つづきの原稿ですか」
研究室に入ってくるなり、佐藤は応接セットで待っていた九鬼に立て続けに言い、ソファに腰を下ろす。アンダーソンとの電話をきったあと、彼は「一寸、頼みたいことがあるんだが……」と佐藤を呼んだのだった。
汗掻きの佐藤が額の汗を拭き終わるのを待って、彼はアンダーソンから聞いた話を掻摘んで話す。
「本当にトップシークレットだったのですか」
「さあ、アンダーソンはそういっているが……。そこで日本でもその扱いをしているのか調べて欲しいのだよ」
彼はいまもって論文に対して反響のないのが不思議でならなかった。どんな内容のものでもなんらかの反響はあるものだ。ことに地震に関するも

のなら一〇〇パーセント無視ということは考えられなかった。まして東京が沈下する地震に関するものだ。きっとなにかあるにちがいない。もし、本当にアンダーソンの言う通りなら大問題だった。なにしろ四〇〇〇万人が人質になっているようなものだ。ヒロシひとりですら助けたいと思う彼にはこれを放置しておくことはできなかった。

「これをばらせば、日本経済ばかりでなく、世界経済が破綻するとなれば、官僚に牛耳られている政府には手も足も出せないのじゃないのか。研究者は誰も危険を冒してまで冒険を試みようとは決してしまい」

「四〇〇〇万の住民たちを犠牲にすれば、必ず世界経済が救われるとでもいうのか。グローバル化している世界経済を押さえ込もうとしてもムリだろう。米国の要請に追従しても、結局、日本は犠牲にさせられるだけじゃないのか。四〇〇〇万の住民をこのまま放置しておくことはできない。もし、この状況を知らせずにおけば、いずれ日本全体が危機に陥ることになるのだ」

彼は沈下が進んでゼロメートル地帯が蚊の大量発生する湿地帯と化した情景を思い浮かべた。住民の間にマラリアなどの感染症が蔓延し、何百万もの患者が発生することだろう。病院には患者が溢れ、収容されない患者は路上に放置されるか、治療してくれる病院を求めて彷徨うことになるだろう。そうなれば、どのような事態が生ずるか。

地球温暖化で日本列島がヒートアイランド化し、東北地方まで熱帯化している状況ではハマダラカやネッタイシマカなどさまざまな種類の蚊が生息するようになり、蚊が病原体を媒介し、マラリアにかぎらず、さまざまな感染症、たとえば、デング熱、黄熱、日本脳炎などを発症させる。さらに、ネズミや小動物あるいは昆虫が媒介するペストやラッサ熱、狂犬病などの危険もある。それに海水の高温化によって海中のコレラ菌が目を覚まし活性化する。

「隠しても隠しきれるものではない。いずれ分かる。それまで時間稼ぎしたいということじゃないのかな」

「本音は多分そうだろう。官僚たちは責任を逃れ、諸事ハッピーに収まると踏んでいるのかもしれないが、そう単純じゃない。大惨事が待っている」

「ほかになにか……」

佐藤は目を丸くして彼を見つめる。

「東京が沈下すればどうなると思う？　ことに、ゼロメートル地帯はどうなるか」

「……」

「建物は傾き、倒壊するものもでるだろう。ライフラインは壊れ、水が浸入し、一帯が湿地帯と化す。十一月なのにこの暑さだ。水溜まりにはボウフラが湧き、蚊が大量に発生するだろう。蚊はマラリアやデング熱などさまざまな病原体を媒介する。蚊だけではない。さまざまな昆虫も発生するだろう。そしてゼロメートル地帯にはさまざまな感染症が蔓延することだろう」

「うむ……」

「ここからが問題なのだ。放置しておけば、そこから大勢の人びとが地方へ逃げ出すにちがいない。これらの人びとともに、病原体の菌やウイルスなどが全国へ伝播すれば、各地で新たな感染者を生みだすことだろう。あるいは地方へ行った人びとのなかに感染者が混じっていればいく先々で病原体を撒き散らすことになる」

「それじゃ、日本中に感染症が蔓延することになる……」

「そうだ……」
「じゃ、日本は『疫病列島』になってしまうのか」
地球は日本列島をホットスポットいや、ヒートアイランド化した日本列島全体がさまざまな感染症の蔓延地帯と化すことになるのは時間の問題だった。
「遅かれ早かれ、いずれそうなるだろう。だがそれだけではない……」
「まだあるのですか」といった顔をして、佐藤は彼を見ている。
「だからこうならないように、至急対策を講じなければならないのだ。トップシークレットなんて言っておれない」
「どうするというのですか」
「さし当たり、ゼロメートル地帯から住民を避難させることだ。沈下して湿地帯となるまえに避難させるほかない。一帯が湿地帯となって方々に水溜まりができては蚊の発生を食い止めることは不可能だ。住民がいては徹底した駆除行動は取れないだろう」
「何百万人もの住民をどうやってどこへ避難させるのですか。そんなことは……」
「だから、見殺しにしようとしているのかもしれないとしたら……。それとも感染症蔓延の危険が生ずれば、住民が生活していようがいまいがＤＤＴなどの禁止されている有害な化学合成物質である殺虫剤をどかどか撒いて住民を殺虫剤漬けにすることを考えているのだろうか」
たとえ、どんなに大量の殺虫剤を撒こうと、蚊を全滅することはできない。蚊はいずれ耐性を獲得し、殺虫剤の効かない丈夫な蚊に生まれ変わるのだ。
「そんなことはありえない。あってたまるか……」
「ではなぜ地震の専門家たちの反響がないのか。馬鹿馬鹿しいとでも思っているのか。強力な箝口令が敷かれているとしか考えられない」
「……」
「彼らは微震動が発生しているのを知っているのだ。知っていながら、沈黙を守っているのはなぜか」
「……」
「時間がないのだ。時間が……」
彼は黙ったままでいる佐藤をじっと見た。もう口を開く気がしなかった。
ふと、彼は佐橋祐子のことを思い出した。ヒロシを実家へ連れて行っただろうか。それとも頑として、いまだに超高層マンションに居座りつづけ、実験室に閉じこもろうとしているのだろうか。
いつまで経っても口を開こうとしない彼にしびれを切らしたのか、佐藤は立ち上がった。彼は口を噤んだまま、ちらっと佐藤の顔を見返しただけだった。

12

九鬼は佐藤を見送ると、研究室を出た。彼は毎日決まったように研究室に出ていたが、なにも手につかず、佐藤が帰るとなにもすることはなかった。
十一月というのに、二〇度を超す日がつづいていて、夕方になっても暖かい。彼は夕暮れが迫っている構内をしばらく歩いてから、街路へ出る。疾走する車がヘッドライトを点灯し始めていた。彼はできるだけ車やひと

の往き来の少ない道を選んで行く。
空腹感が襲ってきた。だがひとりで食事をする気になれなかった。彼は今日もいつものようにコンビニで弁当を買ってマンションへ帰ることになるのかなと思いながら、夕暮れの街を彷徨っていた。
突然、目の前に超高層マンションが聳えていた。夕闇に浮かぶ夜景に見とれて川べりを歩いているうちに、いつの間にか、佐橋祐子のマンションの近くまで来たらしい。部屋には点々と明かりは灯っているものの、まだ戻っていないのか、暗い部屋も多い。彼女はヒロシを連れて実家へ戻っただろうか、と思いながら、彼は彼女の部屋を探す。彼女の部屋には明かりがなかった。その隣も暗い。
彼は半ばほっとしながらも、どこか空虚な思いが胸のなかに忍び込み、やがて彼を包み込んでいくのを感じた。彼女はここにいないのだ、と自分に言い聞かせて、彼は背を向ける。
街路には車や人で溢れていた。黙々とひとり家路に急ぐ勤め帰りの中年の男や女、顔を寄せ囁きながら寄り添って歩く二人連れの若い男女、ひとり物色しながら彷徨う若い男、わいわいがやがやの男の子の群れ、ぴいぴいきいきいの二人連れの女の子……、彼はすれ違う人を避け、歩道の端を歩いていく。
人込みに気を取られているうちに、彼はいつも立ち寄るコンビニのまえを通り過ぎてしまう。マンションのまえまで来て、彼はようやく弁当を買うのを忘れていたことに気付いた。
彼はマンションのまえで立ち止まり、コンビニのほうに目をやり、しばらく立っていた。ふと、目を上げ、自分の部屋のあたりを見る。明かりが点いている。見間違ったのかと思い、一度目を離す。
ふたたび見上げ、三階の自分の部屋を確かめる。間違いはなかった。
エントランスの前に立ち、彼はもどかしげに身体を揺らしながら自動扉が開くのを待って、急いでマンションのホールのなかへ入る。いつもカウンターの向こうにいる管理人の姿が見当たらなかった。
一瞬、彼は空き巣かと思った。
下りてくるエレベーターを待たずに階段を駆け登る。背後で管理人の声がした。彼はかまわず階段を駆け上る。二階を上りきったところで息が切れ、歩き出す。三階の廊下には人影がなかった。
彼は忍び足でドアに近づき、ノブに手をかけた。施錠してある。
ドアに耳を寄せ、なかの気配を伺う。微かに音がする。誰だろう。やはり管理人を呼んだほうが無難か。だがもしかしたら、照明やテレビを消し忘れたのかもしれない。
彼はそっとインターホーンを押す。しばらく待っても、返事がなかった。やはり、朝出かけるとき、消し忘れたのかもしれないと思いながら、彼はもう一度インターホーンを押した。
しばらく待った。音を立てないようにそっと鍵を取りだし、カギ穴へ差し込もうとしたとき、ノブが回った。
「お帰りなさい」
ドアが開き、佐橋祐子の顔が現れた。
「あっ……」
彼は棒立ちになったまま、彼女の顔をまじまじと見ているだけで、声が出なかった。

13

「ヒロシちゃん、おばあちゃんちへ帰ろうか。それともここにいる」

祐子はソファでテレビのニュースを見ながら、彼女に寄りかかり絵本を読んでいるヒロシに話しかける。

朝食が済んでも、ヒロシは祐子のそばを離れようとしない。実家では食事が済むと、テレビのあるソファへ飛んでいったのに、後片づけする彼女のあとを追う。水を流し、シンクで食器を洗いだしても、ヒロシは彼女のそばに立っているのだ。

ヒロシと一緒に上京した母がいる間は目立たなかったが、彼女と二人きりになるとヒロシは彼女に付き纏うようになった。

九鬼は心配して超高層マンションに訪ねてきても、彼女は頑として彼の説得にも応じようとしなかった。彼女には自分が構造計算した建築物から逃げ出すことはできなかった。彼女はこころの底では超高層マンションと心中してもいいとさえ思っていたのだった。

母が帰ると、ヒロシの行動が急変した。テレビを見ても、あまり笑わなくなった。離れようとしなかったテレビにもひとりでは見ようとしなかった。保育園にも行くと言わない。

はじめのうちは長い間実家に預けていたせいで、母に懐いてしまっているのだと思った。実家に帰ったとき、久しぶりに会ったのに、ヒロシはママの自分よりも祖母である母のあとについて歩くことが多かった。そんなヒロシを見るたびに、彼女は寂しく思い、こんどこそどんなことがあってもヒロシと離れずに一緒にいようとこころに決めたのだった。

「ねえ、ヒロシ……」

なんど問い掛けても、寄りかかっている彼女にときどき背を押し付けるだけで、ヒロシは返事もせずに絵本に目を向けたままだ。

「ねえ、ヒロシたっら……」

「うーん……」

ヒロシは相変らず絵本を見ている。

「どっちが好き……なの」

「どっちも好き……だけど……」

「だけど、なあーに……」

「ここはこわい……」

「こわい……。なにが怖いの……」

彼女は目を大きくしてヒロシを見た。ヒロシは絵本を見たまま、彼女の身体に小さな背を押しつけてくる。

そうだったのか。彼女は相次いで超高層マンションを襲った巨大竜巻と超巨大台風を思い浮かべた。ヒロシはもうすぐ四歳になるときだったが、あのときはまだ三歳だった。巨大竜巻のとき、ガラスの小片が突然、保育園でお遊戯しているヒロシの小さな身体を襲ったのだ。超巨大台風のときには超高層マンションの最上にある実験室で台風の狂風に遭い、親子とも命からがら逃げ延びたのだった。覚束ない足取りで暗い階段を何百段駆け降りたことか。

「ここはこわいから、おばあちゃんちのほうがいい。ママも一緒に、おばあちゃんちへ行こうよ」

彼女はようやくヒロシの小さな胸のうちを知った。いままでこのことに気付かなかったとは迂闊だった。自分のことのみに気を取られ、ヒロシが体験した恐怖に思い至らなかった。彼女は母親としての気配りの足りなさ

を思い知らされたのだった。
翌日、彼女はヒロシを連れて実家へ向った。

14

「ヒロシを実家へ預けてきました」
佐橋祐子はドアを大きく開きながら、目を丸くしている九鬼に言う。
「おお……」
彼は驚き、まだ目を丸くしたままだ。声を出そうにも出なかった。
室内へ入ると、料理の匂いが漂い、食卓にはワイングラスに山盛りのフライやサラダなどの皿が並んでいた。
「おお、ご馳走だ」
お腹がグーとなった。
「食事はまだだったでしょうか」
彼女は細い声で言い、窺うような目をした。
彼は途中で弁当を買うのを忘れ、着替えてから近くのコンビニへ出掛けようと思っていたと言いながら、チキンフライをつまみたい衝動をじっと堪えた。
彼女がしばらく彼の目をじっと見つめていた。
それから彼女は改まった態度で、深々と頭を下げ、「このまえはわざわざいらして下さったのに、おかまいもせずに失礼致しました。ご心配いただき、本当に有り難うございました」と言った。
「いやいや。それよりも、折角のご馳走が冷めてしまう」
目の前に佐橋祐子がいて、テーブルのうえに山盛りのご馳走がある。彼はキツネに抓まれているような思いだった。早く食べてしまわないと消えてしまいそうだった。
「ヒロシを今日実家へ連れていってきました」
彼女はもう一度同じことを改めて繰り返した。
「そうでしたか。さあ、頂きましょう。魔法の料理のように、早く食べないと消えて無くなってしまうかもしれない」
「まあ……」
彼女は白い歯を見せて微笑んだ。
それからのことは彼の記憶は定かでなかった。ふたりでワイングラスを合わせて乾杯したことは覚えている。空腹だったせいか、ワインを一杯飲んだあとは、すべてが霞のなかの出来事のようにも思える。
夜半、ふと、ベッドで目を覚ますと、彼の隣にひとが横たわっていた。身体を真直ぐ伸ばし、すやすや寝息を立てている。佐橋祐子だった。
カーテンの隙間から洩れる薄明かりのなかで、彼女の愛くるしく僅かに上向いている鼻から微かに洩れる寝息を飽かずに聞いた。このまま目を閉じれば彼女が消えてしまうのではないかと思い、彼は息を殺し、目を大きく見開く。闇の中に微かに浮かぶ彼女の横顔をじっと見つめながら、彼は頭の奥から記憶の断片を拾い出しては繋いでいく。
「お仕事を片付けて直ぐ戻るからねと言っても、ヒロシったら、母のそばへさっさと行ってしまったのよ」
彼女は恨めしそうな顔をして彼に何度も訴えた。その度に、彼女はワインを一気に飲み干す。彼は調子を合わせてワイングラスを傾けながら、そんな彼女を不思議そうに眺めていた。

なぜ彼女が目の前にいるのか、だんだん分からなくなった。目の前にいるのは佐橋祐子ではなくて、亜耶子のような気がした。

朦朧としてきた。彼の脳裏に亜耶子が現れては消え、微笑んでいる佐橋祐子の顔が現れる。彼はテーブルに片肘をつき、顎を載せる。瞼が次第に重くなり、ついに閉じてしまう。

彼女の声がする。彼は必死に目を開けようとするが、両目とも強力な接着剤で接着されてしまったように開けることができなかった。

睡魔が襲い、意識が途切れ、彼は前のめりに伏せてしまう。ワイングラスが倒れる音がした。

なぜ急に酔いがまわったのか。不思議だった。滅多に酔いつぶれるようなことがなかったのに、なぜ酔ってしまったのだろうか。目のまえの佐橋祐子を亜耶子と思いたかったからか。それとも忘れることができない亜耶子を忘れてしまいたかったからか。

彼は薄明かりを通して、隣に横たわる女人の横顔をじっと見た。佐橋祐子でのあるような、また亜耶子でもあるような気がした。

彼は顔を近づけていった。寝息が頬に触れる。さらに近づけ、唇を合わせる。亜耶子の唇のようにも感じたが、どこか違っているような気がした。

唇を離そうとしてたとき、眠っているはずの彼女が両腕で彼の首にまわし、強く唇を押しつけてきた。

15

「先生、彼らも微震動をしっかり観測していますね。ただ、それが東京沈下の前兆かとなると見解が分かれるといったところですか……」

佐藤はじっと見据えるような目付きをした。これまで佐藤がこんな目付きで彼を見たことはなかった。

彼は黙ってままソファの佐藤を一瞥し、話のつづきを待つ。佐藤が話した程度のことなら、まえにも聞いたことがある。なんら新しい情報はなかった。佐藤が本気で調べているなら、さらに突っ込んでいるはずだ。彼はもう一度佐藤の顔を見た。一体、これからなにを言おうというのか。

だがなぜか佐藤の目に逡巡の色があった。これでは佐藤が話す気になるまで待つ以外ない。彼は応接セットの椅子から離れて執務机に移った。

ディスプレーに電源を入れる。日本列島が映し出された。だが彼は見ていなかった。彼の頭のなかは佐橋祐子のことしかなかった。

朝起きたとき、隣には彼女の姿はなかった。彼は寝室を出ると、リビングルームに入る。彼女の姿はない。和室を覗く。なにもない。キッチンを通り抜け、彼は洗面所で口をゆすぎ、浴室を覗く。トイレに入る。

キッチンに戻り、シンクの蛇口から水を出し、コップで水を一口飲む。彼は諦め、薬缶に水を酌み、お湯を沸かした。

どこにも彼女の姿はなかった。まるで昨夜の出来事はなかったようにすべてが片付いている。彼は一心に彼女の痕跡を探すが、どこにもなにひとつ残っていなかった。

彼は佐橋祐子の笑顔や声を思い浮かべながら、ぼんやりとディスプレーに目を向けていた。

ふと、あれは夢だったのかと思った。佐橋祐子だと思っていた女人は亜耶子だったのかもしれない。

電話のベルがけたたましく鳴った。彼は吃驚して腰を上げる。机を回っ

て、机の端にある電話機から受話器を取った。
「微震動が小さくなっているらしい。自転速度が年々若干づつ遅れてきているのだがなあ……」
もう電話してくることはないと思っていたアンダーソンだった。
「そうか」
彼は短く応える。アンダーソンが電話してきた意図が掴めなかった。
「ところで、ピーターソンがそっちへ行かなかったか」
「ピーターソン？　こちらには来ていない。どうしたというんだ」
前回の電話では東京沈下地震が公になったことをピーターソンが憤慨しているといっていたことを思い出した。
「ここんとこ、ピーターソンの姿が見えないんだ」
「一体、いつから見えないんだ……」
「もう二週間以上になる」
「じゃ、微震動が小さくなっているという情報はいつのものだね。二週間もまえの話か、それともピーターソンじゃないところからのものかね」
「おい、疑っているのか。別のところから聞いたんで、ピーターソンに確かめてみようと思っているんだが、つかまらないんだ。きみのところでも観測しているなら照合したいと思って電話したんだ」
「そうか。だったら、最初からそう言ってくれれば勘ぐることもなかったな」
「……」
「このまえ、ピーターソンが憤慨していると言っていたけど、どうなったんだい。まだ情報漏洩の嫌疑を掛けられたままなのかね、それとも、一件落着したのかね」
「大げさに騒ぎ立てるほどのことでもなかったよ。日本でも研究者たちがデータを取っていることが分かったし……」
「そうか。じゃ、無罪放免か」
「ピーターソンがどう思っているのか分からないが、もう問題じゃないよ」
「トップシークレットでなくなったわけか」
彼はいささか皮肉っぽく言う。
「まあな。そういうことだろ。だから、ピーターソンのやつ、姿を消したのかもしれないな」
「そうかね。彼がそんなやつだったとはね。気をつけるよ」
「ところで、研究はつづけるんだろ。いつでも来てくれ。待っている」
電話は切れた。
彼は受話器をしばらく握っていたが、おもむろに戻した。
いつの間に来たのか、佐藤が机のまえに椅子を持ってきて座り、電話の終わるのを待っていた。
「どうしたんですか。微震動に変化が現れたのですか」
佐藤は受話器を置いた彼に目を向ける。
「微震動が以前より小さくなっているらしい」
「ホントですか。それじゃ、東京沈下がいよいよ本格的にはじまるということになるのかな」
佐藤は遠くを見て呟くように言う。
「なんだって、収まるのじゃなくて、逆に、本格化するというのか。一体、誰がそんなことを言っているんだ」
彼はアンダーソンから聞いたとき、微震動自体が収まってしまうのだと思った。そして早まって論文を書いてしまったと悔いたのだった。

「実は、情報源をオープンにはできませんが、その研究者は微震動に変化が現るときが危ない。いまは一定の微震動だからまだ沈下することがないと言っていたんですよ。茨城沖とか、首都圏周辺での地震がつづいてから本格的な東京沈下がはじまることになるとか……」

「……」

「微震動がいまの状態でこのままつづけば、東京沈下のおそれも解消するかもしれないとも言っておられたのですがね……」

佐藤はドンデン返しを喰らってしまったらしい。彼はじっと佐藤が話しだすのを待った。だが彼の脳裏になにか吹っ切れないものが残っていた。アンダーソンが言っていたことはどこまで本当なのか。ピーターソンのことはどうか。

「……実は、今回先生がお書きになった文章のことですが、話を聞いた地震学者は全然評価していませんでした。門外漢のお話と受け取っていました。同業の気象学者たちは、またホラを吹いているといった調子のコメントばかりでした」

佐藤はときどき目を素早く動かし、彼の顔色を窺っている。

「……」

彼は素知らぬ振りをして、遠くを見ている。

「でも東京沈下が本格化すれば、やっこさんたちどう言いますかね。実名入りで彼らのコメントを紙面に掲載させていただきますかね……」

「そのときはね……。ところで、東京沈下地震のことをひた隠しにしようとしているようなことはなかったのかね」

彼はアンダーソンのトップシークレットにこだわっていた。

「そこまでは……、ただ、K省の久遠課長がなにやら策動しているようでしたが、ご存知ですか……」

佐藤が思い出したように、ぽつりと言う。

「さあ、教授が亡くなってから、すっかりご無沙汰しているからなあ……」

彼は対策しろとやいやい言ったことを思い浮かべながら、皮肉を込めて言う。風の便りに、諮問委員会の座長が教授のライバルだったイエスマンの学者に変わったことを知った。これで対策をうるさく言われなくなることだろう。

彼の経験からみても、官僚は前例を欠く事前対策が苦手のようだった。今回の東京沈下対策も官僚たちにはどうしていいのか分からないのではないかと思う。地震対策と言えば、建物の耐震強化と避難訓練や非常用品の常備奨励でお茶を濁しているだけだ。東京沈下はこの程度の対策ではどうにもならないものだった。

佐藤が携帯を取りだすと、椅子から立ち上がり話しだす。

それを機会に、彼は机から応接セットへ移る。

「微震動に変化が生じたようですが、東京沈下がはじまりますか……」

佐藤の話声が聞こえてきた。相手は地震研究者だろうが、彼には誰であるか分からなかった。

しばらく話していた佐藤が携帯を仕舞いながら近づき、ソファに腰を下ろした。

目の前の彼の顔を見ながら、「これでやっこさんたちにどんな変化が現れるか注視することにしましょうか」と言う。

「ところで、地震の連中があまりコメントらしいことを言わなかったそうだが、なぜかな。やはり、どこからか余計なことは言うなといわれているのかな」

彼はカマをかける。佐藤はなにか知っているはずだ。
「いたずらに社会不安を煽ってもどうかと思っているのかもしれません」
佐藤は本当になにも知らないのか、ありきたりのことしか言わない。
「そうかね。オレなんかはいつも社会不安を煽っていることになるのかね」
彼は嫌味たらしく言い、佐藤をじっと見る。
「いや、そうかも……」
佐藤は軽く笑う。
「どっちなんだ」
出る杭は打たれ、才気や才能のある研究者は淘汰され、学界もドングリの背比べの集まりと化してしまっているのか。日本の研究者たちもはまるで農耕民族のように隣人を気にするようになっているのか。だがこのようなことはいまはじまったことではない。彼はいままでそのことに気付かずに、自分がわがまま放題に言いたいことが言えたのは佐々木教授の後ろ楯があったからだったのではないのかと思った。
彼はこれからはただひとりで歩いていかなければならないんだと自分に言い聞かせていた。

16

九鬼は佐藤が帰ったあと、自分を責めつづけた。ホラ吹きでは済まないのだ。
自分でデータを取らず、アンダーソンの話を鵜呑みして東京沈下を言い触らしていたことを悔いた。でたらめなことを言い、もっともらしい論文を新聞に書いてしまった。いたずらに社会不安を煽ってしまったのだ。
だがそれよりも彼を苦しめたのは、もしかしたら、全く間違ったことを言い、教授を死に追いやったかもしれなかったということだった。
佐橋祐子の顔が浮かんだ。彼女になんと言おうか。東京沈下はウソだったとでも言うのか。
彼は自分を恥じ、自分を責めつづける。だが、いくら責めたところでどうにもならなかった。
彼はなにも考えることができなかった。佐藤が見据えるような目をして自分を見たのは東京沈下がデタラメであることを感じ取っていたからではなかったのか。
彼は頭を抱え、じっと机に蹲っていた。
何時間そうやっていたのか、室内に夕闇が忍び込んでいた。
ふと、彼は微震動がつづいていることを思い出した。
アンダーソンが言ってきたプレートの微震動を日本でも観測されていたのではなかったか。佐々木教授も教え子のひとりから情報を受け取っていたはずだった。佐藤の今回の取材でも微震動の観測まで否定していなかったのだ。
となると、微震動から東京沈下への間に飛躍があったということになるのか。
アンダーソンから年数センチ程度の東京沈下が予測されると聞き、それを確かめることもなく、彼は年数センチ程度沈下する東京沈下モデルを組み立て、データなしに東京沈下の予測を試みたのだった。
彼は東京沈下の可能性を理論的に解明し、単に、東京沈下理論モデルを構築したにすぎなかったのに、あたかも東京が沈下するように言ってしまっ

たのだった。彼は取り返しのつかないミスを侵してしまったのだ。
もし、東京沈下がはじまれば、彼は逆に先見性ある科学者として称賛されることだろう。
「ホラか……」
彼は力無く呟く。
東京が沈下しないか、早く……。彼の耳元で、しきりに悪魔が囁く。

ドアを叩く音がする。
彼は机で眠り込んでいたらしい。彼は目を開けようとするが、開かない。目を閉じたまま、朦朧とした意識のなかで、彼は誰がドアをノックしているのかと思う。守衛だろうか。暗くなったのに照明を灯していないのを不審に感じたのだろうか。
手を伸ばして、机のスタンドを点けた。飛び込んでくる眩しい光を避け、目を細めて立ち上がる。
ノックが止んだ。
室内照明のスイッチを押した。ノブが周り、ドアが開いた。ドアの隙間から、背の高い細身の男が顔を突き出し、なかを覗き込んだ。
ピーターソンだった。
「おお、ドクター　クキ」
目のまえに立っている彼に驚いたのか、大声を上げる。
「ああ、ピーターソンだったのか……」
彼もドアを開けようとしていたところだった。
彼は若い男を眺め回した。突然現れたピーターソンに驚き、一瞬怒鳴り込んできたのかと思った。
ピーターソンは誰から聞いたのか、佐々木教授が亡くなったことを知って非常に驚いたと言い、彼に弔意を述べた。
「アンダーソンが心配していたが、どうしてここへ……」
彼はソファで長い足を持て余しているピーターソンをもう一度ゆっくり眺め回し、一体、この男はなにしにここへきたのかと思った。
「……」
ピーターソンは黙って、微笑んでいる。
彼は若い男を見ながら、どう切り出したものか、と考えこんでいた。もしアンダーソンが言うように、東京沈下がトップシークレットだったなら、それを侵して論文を書いたことになる。
「アンダーソンが二週間も姿が見えないと言っていた……」
彼はカマをかける。
「M紙のペーパーを拝見しました……」
「そうですか……」
いよいよきたか、と彼は思った。どういうことになるか、彼は観念する。
「それで日本へ来ることになりました……」
「……」
彼はどんな用事で日本に来たのか、知りたかった。
いまとなっては、彼にはトップシークレットを侵したことに対して、なんら抗弁できることはなにもなかった。論文を書いたときには、四〇〇〇万人の住民を見殺しにできないという強い思いがあったものの、それが単に社会不安を煽っただけとなってはいかなる言い訳も通用しないのだ。
「実は……、まだ秘密なのですが……」
彼ははっとして、ピーターソンを見上げた。

「……実は、東京沈下の調査に来ていたのです……。先生のペーパーを読んだらしく、上から要請がありまして……」
「え？　調査とはどういうことですか。東京が年数センチ程度沈下するとは言っていたのでは……」
「誰がそんなことを……、それは確かですか……」
ピーターソンは驚いた顔をした。
「え？　知らないのですか。アンダーソンが……」
彼はまた口を滑らしたかと思って、途中で口を噤んでしまう。
「アンダーソン？　彼がどうかしたのですか……」
「日本列島付近の太平洋プレートとフィリピン海プレートの先端で生じている微震動が東京沈下の前兆だと……」
「彼がそう言いったというのですか」
「きみは全然このことを知らなかったのか、東京沈下のことですよ……」
「ええ、先生のペーパーを読むまでは……」
「本当か……」
あのとき、確かにピーターソンからの情報だとアンダーソンは言っていた。あれはウソだったのか。東京沈下はトップシークレットでもなんでもなかったのか。彼はアンダーソンに一杯喰わされていたのかと思った。
「アンダーソンは先生をＡＣＡＲへ呼びたくていろいろ作戦を練っていたことがありましたよ」
ピーターソンが言うには、その作戦は九鬼が科学誌の電子版に「地球全体モデル」について論文を発表したあとにはじまったという。
すると、あれはアンダーソンの全くの作り話だったということか。ついこの最近の電話で、微震動が小さくなっているといったのは、東京沈下の作り話も収束させようとしていたからなのか。
それにしても、まんまと喰わされたうえに、浅慮からあんな論文を書いてしまい、とんだことになってしまった。真に受けた自分の愚かさが身にしみ、激しい自己嫌悪に堕ちていった。
「ああ、なんちゅうこった……、アンダーソンのやつめ……」
いまさら、アンダーソンを責めてもはじまらない。身から出た錆だった。
「どうしたのですか……」
声を荒げ、急に激しく落ち込んでしまった九鬼を見て、ピーターソンが目を丸くしている。
「……」
彼は口を固く閉じ、ピーターソンを睨み返した。
ピーターソンは身体を小さくしてじっと彼を見ていたが、思い出したようにアタッシュケースを開くと、分厚い資料を取りだし、テーブルに広げた。
「実は、先生のご意見をお伺いしたいのです。これが今回の東京沈下調査のデータですが、できたら、先生の東京沈下モデルで予測して欲しいのです」
ピーターソンによると、日本列島付近の海底では以前から微震動がつづいており、米海軍によって精密な観測もつづけられていたという。日本列島付近の海域は各国の潜水艦が行き交うところでもあって、海中の音波や電磁波のほか、海底の震動にもことのほか神経が注がれているらしい。
ピーターソンが不意に訪ねてきたわけはこのためであったのかと思い、改めて、彼は若い男の精悍な顔を見、データへ目を移す。
分厚い微震動のデータがあった。振幅の波形が揺れていた。

「この揺れは周期的なものですかね。なんでも微震動に変化が生じると……」

彼は佐藤が言っていたことを思い出した。

「東京沈下が近いのですか。これは秘密ですが、軍では沈下が起こるまえに首都圏にある基地を移転しておきたいという意向です。いつごろはじまるのですか……」

「これらのデータからはなんとも言えないでしょう。わたしの専門分野ではないのでこれ以上のことはなんとも言えません。東京近郊や首都圏周辺の観測データはないのですか。そのあたりで沈下の兆候が出ていないのですかね。その辺が最初に沈下するところらしい。予測なんか当てになりません。毎日の観測が一番です。一寸、おかしなデータが見付かったら、沈下が近いと思えばいいですよ」

彼はもうなにを聞かれても曖昧な返事しかしなかった。アンダーソンに一杯喰わされたのに、思わぬ結果になったことが彼にはどことなく理解できないところがあった。だがこういう結果になったことから、そもそもアンダーソンは最初から全くデタラメな情報を提供したのではなく、彼なりに計算していたものを持ちだしたのかもしれないと思えてくるのだった。それとも単にあてずっぽうにやったことがまぐれ当たりになったというのだろうか。とはいっても、なぜアンダーソンはそんなことを考えたのか、彼には釈然としなかった。

ピーターソンは彼のそんな様子に気付き、今夜の便で帰国するのだと言い、テーブルに広げたデータのコピーを集めはじめた。アタッシュケースに仕舞うと、ＡＣＡＲでの解析結果を知らせると言い残して立ち去った。

ピーターソンを送り出したあと、彼は応接セットの椅子に腰を下ろし、しばらくぼうっとしていた。

彼はふと、アンダーソンの電話を思い出し、ピーターソンもアンダーソンと一緒になって彼を欺いていたのではないかと思った。帰りしなに、ＡＣＡＲの解析結果を知らせるなんてまことしやかに言い残して言ったが、大気圏の研究機関であるＡＣＡＲでの解析なんてありうるはずがないではないか。まんまと嵌まった自分も間抜けだが、こんな冗談は悪質過ぎる。彼はアンダーソンに真相を確かめ、文句を言おうと立ち上がり、机の電話に近づく。

彼の動きを感知したように、一瞬電話が震えた。受話器を取った。

「先生、東京が沈下しだしているそうです……」

佐藤だった。受話器をとる寸前に電話が繋がっていたらしい。

「なんだって……、ウソだろう……」

「本当です。テレビを見て下さい。一寸まえに茨城沖で小さな地震があったのです。それが東京沈下の引金になったらしいと言っています」

首都圏の境界付近に最初の兆候が現れると睨んでいたＫ研究所の研究員が東京沈下のデータを捉えたのだ。極小さな沈下なので、誤差の範囲かもしれない。さらに観測を継続し、沈下現象であることが明らかになってから発表するので、それまで公表は控えて欲しいといっているが、関係機関では今後の対応やデータの取り扱いの検討をはじめているという。

「うむ……」

「先生の論文で注意が喚起されていたので、連中も素早く対応できたのでしょう」

「ウソ言え、きみも全然信用していなかったくせに……」

「いやー、参っちゃうな、先生には……」

佐藤は電話を切ってしまう。
電話が切れてしまったにもかかわらず、彼は受話器をもったまま、「佐藤までもがバカにして……、参っちゃうのはオレのほうだ」と呟く。

17

九鬼は電話のそばに立ったまま、身体が硬直したかように動くことができなかった。彼はじっと身体がほぐれるのを待った。
しばらくすると、急に、全身から力が抜けていった。彼は立っているいることができず、へたへたと床に座り込む。
どのくらい座り込んでいただろうか。彼は机や壁につかまり立ち上がると、覚束ない足取りで応接セットに近づき、椅子に倒れ込む。
もう一度佐藤の電話を受けたときを思い起こす。
あのとき、一瞬、彼はほっとしたのだ。それまで自分を苦しめていた思いが一斉に放たれたような気分だった。
彼はアンダーソンへ抗議の電話をしようとしていたことも忘れてしまった。これでホラ吹きという中傷や社会不安を煽るという批難も消え、先見性ある研究者だという称賛に変わることだろうと思った。
やはり自分の判断が正しかったのだと思った。アンダーソンが冗談まじりでプレートの微震動や東京沈下を持ちだしたとしても、彼にはそれを材料に東京沈下理論モデルを組み立て、その可能性を予見したのだという思いがあった。
だが彼のこんな思いも、なぜか空気が抜けていく風船のように、瞬く間のうちに萎んでいった。
不意に、佐橋祐子の顔が浮かんだ。彼はアンダーソンの一言に過剰反応し、超高層マンション倒壊の危険性を煽ったのだ。
彼は自分が佐藤の電話に一瞬ほっとしたことを恥じた。これで一瞬救われると思った自分を決して許すことができなかった。
彼は愚かにも東京沈下を煽り、佐々木教授を死に追いやったのだ。自分に対する中傷や批難に抗しきれず、こころ密かに一刻も早く東京沈下が現実となることさえ期待していたのではないのか。
彼はこれまでなんの疑いも持たずに、自分が誰よりも先に的確な予測を行ない、社会へ警告を発し、事前対策を促し、多くの人を異常気象の災難から救い出すのだと思ってきた。この思いを胸に抱き、彼は地球温暖化の研究を進め、いま極端現象の巨大異常気象の予測を実行していたのだった。
だが多くの人を災難から救い出せると思っていた「予測」が両刃の刃となって彼を突き刺したのだ。
彼は異常気象の予測に舞い上がっていた自分にようやく気付いた。
すべての条件が揃えば、未来に生起する事象を寸分たがわずに予測できると信じていた。いや、すべての条件が揃うことなどありやしないのだが、そう信じることで、一歩でも二歩でも的確な予測に近づきたいと研究を進めていたのだ。
それは神の領域へ踏み込もうとするようなものだった。彼はそれの気付かず、予測の的中率を上げることに熱中していたのだ。
彼はついに地球全体モデルを構想するまでになって、その思いはますます強まっていったのだ。だが的中率を上げたいという思いは、いつの間にか災難発生予測を超えて災難発生期待へとつながっていく。何時いつこの

ような災難が発生するだろうという予測から災難が予測した通り必ず発生するとなり、ついには災難が早く発生して欲しいと思うようになるのだ。それは悪魔の勧誘だった。

彼は地球温暖化にともなう異常気象の予測モデルの研究を行いながら、このことに全然きづいていなかった。神の領域への浸入を試みながら、悪魔の誘いに気付かずにいたのだ。

彼はいまようやく、日本列島近辺のプレートで微震動から東京沈下地震発生が懸念されるなかで、悪魔にこころまで売り渡してしまっていたことに気付いた。彼はなかなか発生しない東京沈下に苛立ち、発生予測を的中させたいばかりに、東京沈下を待ち望んでいたのだ。

彼は異常気象予測では気付かなかった予測というものの持つ怖さを東京沈下で思い知ったのだった。

18

九鬼は佐橋祐子に無性に会いたかった。ありのまま話し、東京沈下を煽ったことも詫びたかった。だが応接セットの椅子に座ったまま動くことができなかった。身体が椅子にロープで雁字搦めに結わえられているように感じるのだ。

彼は早くロープを解きほぐしたかった。だがロープは絡み合って固く結ばれているのか、身動きひとつできない。

ヒロシの手を引く佐橋祐子が浮かんだ。

電話のベルが鳴った。

彼は立ち上がろうとするが、動けない。なんとか身体を動かそうともがいているうちに、ベルが止んだ。

彼は息を大きく吐いて、椅子に身体を沈める。

ふと、彼はアンダーソンのトップシークレットを侵してまで二〇〇〇万人を救おうとしたことを思い出した。もしそれに偽りがなかったら、単なる予測だけで済まさず、自らさらに対策を実践すべきではなかったのか。彼はずっと異常気象の予測だけで、対策は人任せだった。研究者としての自分の仕事は予測だと割り切って、対策の不備を批判するだけだった。

こんな態度で満足していたから、アンダーソンの東京沈下にまんまと乗せられてしまったのだ。つねに対策の実践を考えていたなら、こうも易々と騙されることはなかっただろう。

とにかく、佐々木教授を翻弄し、佐橋祐子を欺むいてしまったことはどうしても許せなかった。ロープに縛られ、このまま果てようと、自業自得だった。そうなるなら、むしろ、そうなって欲しいと思った。

彼は目を閉じた。

遠くで靴音がした。靴音がだんだん近づいてくる。ドアのまえで止まった。

ドアをノックする音が響いた。間をおいて、二度目のノック音がした。

しばらくして、ノブが金属性の小さな音を発し、回った。ドアの隙間から白い顔が覗いた。

「先生、先生……」

中肉中背の女の人が飛び込んできた。

彼は身体を強く揺すられて意識を取り戻す。朦朧とした意識のなかに佐

橋祐子の顔があった。
「ああ……」
彼は全身から力が抜けていくのを感じた。彼は崩れるようにまえへ落ちていく。彼女が急いで手を伸ばし、彼の身体を抱え、椅子の背にもたせる。
彼は身体を固く結わえていたロープが解かれたように感じた。急に、涙が溢れ、ぼろぼろと流れ落ちた。
彼女は彼のそばに膝立ちし、彼の背を撫でた。
しばらくして、硬直していた体中が解き放されたように柔軟になり、身体のなかに力が漲ってきた。
「どうしてここに……」
彼は彼女の手を握りしめた。
「いつまで待ってもお帰りにならないし、電話しても出ないし、もしかしたらお仕事かと思って……」
夕食持参で、様子を見に来たのだという。そして小さな声で「もう帰るところがないので、押し掛けてきた」と言い、含羞むように顔を隠す。
彼は彼女を隣の椅子に座らせ、すべてを話した。
「まあ、超高層マンションが倒壊するというのはウソだったの」
「ごめん、早とちりしていた。微震動から東京沈下へと飛躍し過ぎてしまっていたのかもしれない」
「……」
「ヒロシちゃんと引き離してしまって、本当に悪いことをしてしまった」
「ヒロシは超高層マンションが怖いところだからいやだと言ったのよ、自分から」
「とにかく、取り返しのつかないことをしてしまった。もう、気候変動予測研究は止める。予測は一切止める。予測で対策を促進しようと考えたことは間違っていた。対策を考えるなら実践あるのみだ」
「ではそうしましょうか。でも東京沈下がはじまったみたい……。もうすぐ超高層マンションには住めなくなるわ」
「やはり、ホントか、それは……」
彼はじっと佐橋祐子の目を見つめた。

19

不順な天候がつづいていた。
十一月の末だというのに、真夏日となったりするのに、明くる日は氷のような雨が降るのだった。
「堤防から水がしみ出ている」
散歩の途中で気付いた住民のひとりが通報してきた。
超巨大台風のときの洪水で決壊した堤防の復旧工事をようやく了えたばかりだった。そこからふたたび漏水が見付かり、業者は手抜き工事じゃないかと責められた。
業者は補修工事するが、何度やっても漏水が止まらなかった。方々に水溜まりができた。十二月に入ると、ゼロメートル地帯一帯に水溜まりが広がっていた。
佐橋祐子はテーブルの小物入れのカゴからゴルフボールを手に取った。彼女に最後の決断をさせたものだった。

彼女は迷っていた。一度は仕事を辞めようかと思ったものの、なぜか気が変わってしまい、ヒロシをともなって補修工事を了えた超高層マンションに戻った。だがここは怖いからいたくないとヒロシが言い出したのだ。

九鬼の強い説得にも迷い、ヒロシの怖いという思いにも悩み、彼女は決断を先送りしたまま、ソファでヒロシが床でゴルフボールを転がして遊んでいるのをぼんやり眺めていた。床に放置したままのゴルフボールがいつの間にか転がり出し、壁に向って徐々に移動していくのだ。何度試しても同じだった。それを見て、彼女はヒロシを実家へ連れていったのだった。

彼女はゴルフボールをリビングの中央にそっと置く。

手を離した途端、ゴルフボールは転がりだし、徐々にスピードを上げていく。まえより早い。ゴルフボールはベランダのガラス戸にぶつかって止まった。

やはり、超高層マンションは確実に傾きだしているのだ。

彼女は携帯を取りだすと、プッシュした。

「間違いないわ。昨日よりも傾いているみたい」

「先生、地球温暖化の果てに、日本列島はこれからどうなりますか。ヒートアイランド化からはじまって、熱水や熱波・干ばつに襲われ、超巨大台風や大雨に翻弄されてきましたが……」

朝から研究室に入り浸っている佐藤が応接セットのソファの真ん中にちょこんと座って何度も同じことを聞く。

九鬼は執務机に座ったまま、ときおり机の端の電話機に目をやる。佐藤がなにを言ってもちらっと見ているだけで、口を開かない。

彼は佐橋祐子からの電話をいまかいまかと待っていたのだ。

「先生、いまの電話はなんですか……」

佐藤は彼が机で電話を待ち構えていたことに気付き、受話器を置いて応接セットに近づいてきた彼を見上げた。

「佐藤くん、間違いなく東京沈下がはじまっているようだ」

彼は椅子に腰を下ろしながら、佐藤に顔を向けた。

「やはり、ホントだったんですか。東京沈下がもうはじまっているというのですか。間違いないんですね……」

地震研究者のひとりが極微の東京沈下現象を観測したらしいと佐藤が洩らしていたのを思い出し、彼は彼女に確かめてもらっていたのだ。

「そうだ。またホラ吹きと言われないように、いま確かめたところだよ」

彼は笑いながら、ゆったりした口調で言う。

「これからどうなりますかね……」

「どうなるかな。一切、出しゃばるつもりはない。もうすぐ政府や関係機関が動き出すんじゃないのか、ただ……」

彼には気にかかることがあった。それは東京沈下の出だしのスピードが鈍いらしいということだった。これに合わせて対応も鈍くなるおそれがあったのだ。

「ただ、なんですか……」

「のんびりしていると、収拾つかない事態に追い込まれることになりかねない」

超高層ビルの林立するところで沈下現象がはじまれば、超高層ビルのドミノ倒しがはじまるのだ。また二〇〇メートルもある超高層マンションが倒壊すれば、周囲のビル群を巻き添えにして被害が広範囲におよぶことだ

ろう。
とにかく、沈下スピードが鈍いからといって、ビルが林立する大都市では気を抜いていることはできないのだ。
それに地中の構造には分からないところがある沢山ある。地層が急にどんな動きをするか分からない。
彼は単純に、首都圏が広がる関東平野がのっている小岩盤（プレート片）を下で支えている太平洋プレートだけが小岩盤を置いてスムーズに後退することをイメージしていたが、こうなるとは限らない。太平洋プレートともども小岩盤が移動することも大いに考えられるし、あるいは太平洋プレートが小岩盤をのせたところから折れて切断することだって考えられるのだ。こんなことになれば地上には突然猛烈な大激震が走るにちがいない。
「ホントですか。K研究所へ取材にいってみるか」
佐藤の後ろ姿を見送りながら、彼はこれが杞憂であればいいのにと思った。

第三章

20

「最近、一寸おかしいのよ」

祐子がソファで新聞を広げている九鬼に寄りかかるように身体を寄せる。

「うん……」

彼は目を新聞に向けたまま、生返事する。

「もしかしたら……」

「どうした……」

佐橋祐子はヒロシを実家に預けると、彼のマンションに押し掛け、それ以来居座っていた。倒壊の危険があるからといって、構造計算を担当したものがそれを理由にいますぐ超高層マンションから完全に引き揚げるわけにもいかず、当分事務所として使用することとし、毎日、超高層マンションの自室へ通っていた。

彼は身体を離し、彼女の顔をしげしげと見る。幾分やつれて見えた。

「イヤだわ」

彼女はソファから立ち上がると、キッチンへ消えた。

彼は彼女の後ろ姿を追いながら、ふと不吉な予感に襲われた。

「おかしいって、なにが……」と声を掛けようかと思ったが、声が出なかった。

三月一杯で、彼は大学を辞めるつもりでいた。それまでの間にやっておきたいことがあった。だが東京沈下のことが気になって、手に付かないのだ。

一か月も過ぎるのに、佐藤からなんの連絡もなかった。東京沈下についての情報も漏れてこないのだ。

いまさらアンダーソンに聞く気にもなれなかったし、ましてピーターソンに確かめる気にもなれずにいた。彼のこころのどこかに住みついた半ば担がれているような感じを払拭できずにいたのだ。

「あのね、最近、沈下が収まっているみたいなのよ」

祐子がコーヒーカップを手にしてソファに戻ってきた。

彼女はまえから沈下が収まれば超高層マンションを引き払いたいと言っていた。沈下が進行している間は言い出しにくいので、毎日のように進行状態をチェックしていたらしい。

「いつごろから……」

「ゴルフボールは同じように転がるのよ。でもこのところなんとなく落ち着いている感じなの。もう一週間はなるわ」

彼は彼女の目をじっと見た。

一週間もまえから沈下がストップしていたのだろうか。彼女は毎日チェックしていたのに、なぜもっと早く気付かなかったのか。

といっても、ゴルフボールを転がすことで沈下速度の微妙な変化を読み取ることは至難なことにちがいない。

「一週間同じ状態がつづいているというんだね。それで沈下が収まりかけているように感じるというんだね」

彼女は大きく頷く。

東京沈下は収まりかけているというのか。本当にこのまま、東京沈下は収まってしまうのだろうか。それとも最初から途中で収まるような兆候が

あったのだろうか。
政府や関係機関はこのことを予知していたのだろうか。そして箝口令をしいてひたすらその日を待っていたのだろうか。
いや、そうではない。どう対応していいのか分からず、単に時間稼ぎしていたに過ぎまい。そうしているうちに、たまたま沈下が収まったのにちがいないのだ。
むしろ、沈下現象に変化が生じたときこそ、危険な兆候ではないのか。沈下速度が遅くなるか、一時止まるのはなにか障害となるものが生じたからではないか。だとすれば、障害が取れ、沈下速度を抑制する力が消失すればどうなるか。反動から大沈下が生じるのか。それとも何事もなかったように、ふたたびまえと同じような緩慢な沈下に戻ることになるのだろうか。
彼はコーヒーカップをテーブルに置くと、ソファから立ち上がる。電話機に近づき、受話器を取った。
「佐藤くん、最近、首都圏で米軍に動きがないかね。たとえば、艦船や航空機等を移動したとか、軍の再編成や基地移転を予定しているとか、なにか聞いていない？」
彼はピーターソンが言っていた基地移転のことを思い出し、佐藤に聞いてみる気になったのだった。
「東京沈下と関係があるんですか」
「まえにそんなことを言っていた男がいたんだよ。まさかと思って聞き流していたが……」
「そうですか。東京沈下に関してはここんところ全然動きがないんですよ。まるで忘れているみたい……。でも米軍が動き出せば、政府も動き出すかもしれませんね」
「なぜ、政府や関係機関に動きがないのかな。完全に無視しているわけでもないだろうに……」
「東京沈下のデータの扱いをめぐって学界内で意見の対立があるようです。学界における勢力争いも関係しているのか、最初に見付けた若い研究員の旗色が悪い。一人で突っ走ったので上の方の感情を害したところもあるらしく、やっこさん、こぼしていましたよ」
「そんな次元の話じゃないよ。四〇〇〇万人の生命がかかっているんだ」
「だから困っているらしい。どう進行するか分からない東京沈下に対してどう対応すればいいのか難しい問題だし、具体的な対応策なしに東京が沈下すると発表しても社会不安を煽るだけだと考えているらしい」
「どう進むか分からないのであれば、当面、地球温暖化による海面上昇の対策ということにして、まずゼロメートル地帯に住む人びと二〇〇万人を移住させることにしてはどうかな。とにかく、早く実行することだ。なにしろ、時間が限られているんだから」
「うむ、海面上昇の対策としてね……」
「そうだ。できることはなんでもやっておこう……」
「じゃ、その筋に話してみるか」
佐藤の声を聞いて、彼は電話を切ってしまう。
「やはり、懸念していた通りだ……」
彼はソファの戻ると、彼の目をじっと覗く祐子に呟くように言う。
「ねえ、地球温暖化の海面上昇対策ということで、ゼロメートル地帯住民二〇〇万人の移住のための行動を起しましょうよ。その一環として、まず、超高層マンションを引き払うことにするわ」

彼女は彼と佐藤とのやり取りを窺っていたらしい。驚く彼をしり目に、彼女は勢いよく立ち上がった。

21

九鬼は毎日苛々していた。現に東京沈下がはじまっているにもかかわらず、政府や関係機関にはなんら表立った動きがないのだ。

彼は懸念していた通り、緩慢な沈下現象に政府や関係機関が様子見をしているにちがいないと思った。だがこれではいざというときに間に合わなくなってしまう。

かといって、彼はどうしていいのか分からなかった。

一方で、このまま東京沈下がひとりでに収束していってくれるのなら、一番いいと思った。

だがこのところ、ジェット気流（偏西風）が弱まり、蛇行することが多かった。これにはマントルの動きやマントル最深部にある電流を通しやすい鉱物層などの影響で生じる自転速度のゆらぎと関係しているのであるまいか。だとすれば、プレートの微震動もまだまだつづくにちがいない。

世界各地で異常気象がつづく。熱波と寒波が交互に襲い、酷暑の日がつづいたかとおもうと、雪が降りだすのだ。

気候は大きく変動し、砂漠や乾燥地帯に大雨を降らせたり、肥沃な穀倉地帯には干害をもたらす。自然への依存度の高い農産物に甚大な影響が出はじめていた。

日本は自由貿易のグローバリゼーションの大波のなかで、食料自給率を低下させてきた。政府は日本列島の住民の食べものを海外に依存する政策を採用していたのだ。

これによって、日本の食料自給率は年々さらに低下し、二〇〇七年にはカロリーベースで四〇パーセントを割り込んでいった。

日本は貿易立国を目指し、工業製品を世界へ売りまくった。農産物の生産国も貿易の自由化を押し進め、農産物に対して工業製品と同等の扱いを求めてきた。農産物の関税率が下げられ、それにともない輸入量が増え、国内の農業は追い詰められ、衰退の一途を辿ることになった。これにともない、食料自給率が急速に低下していったのだ。

農産物は天候や土地の条件に左右され、簡単に増産することも出来ない。また食料は工業製品と異なり、必要不可欠なものである。国の自給率が低いことは必要量を輸入できなければ国民に飢えが迫ることを意味する。

日本政府は長年にわたり、国外へ工業製品を売り、国外から食料を買うという政策を選択してきた。金さえあれば、食料はどこからでも買えると考えたのだ。

だが気候変動で、農産物生産国であるオーストラリアやアメリカの穀倉地帯に大干ばつが立て続けに襲った。これで世界の穀物需給が著しく逼迫した。これを受け、インド、ロシア、アルゼンチンなどの穀物輸出国も、自国の食料確保のために輸出規制に走り、一層世界の穀物需給が極端に逼迫し出した。

これによって、世界の穀物価格が急騰した。絶対量が不足しだしたのだ。それにともない、必要量を確保することが難しくなった。

金があれば、いくらでも食料が手に入るという前提が崩れてしまったのだ。

食料の輸入が途絶えると、一番に影響を被るのは都市住民である。

東京には毎日何万何十万トンもの食料品が運び込まれる。東京都民の胃袋を賄う市場のひとつである築地市場（２００５年）で売り買いされる青果は一日あたり約一二〇〇トン、水産物は約二二〇〇トンだ。その大半が輸入食料品である。

単純な計算に基づき、工業製品の輸出量を増すほうが利益が多いという理由で貿易自由化が進められてきた。これによって農産物の関税も引き下げられ、大幅に食料自給率の低下を招くことになった。

工業製品と農産物を同列で論ずること自体おかしな話だが、政治の世界は論理よりも力が支配する。力の世界では弱いものより強いものの主張が通るところだ。だが論理の通らないことをムリに通しても、いずれしっぺ返しを受けることになるものだ。

そのときが目の前に迫っていた。

先進国で最低の食料自給率を誇る日本には、輸入食料の確保が不能となれば食料の絶対量不足が生じ、食糧危機から飢餓の発生が待ち構えていた。だがこれは表層に現れたひとつの現象に過ぎなかった。

実は、世界のこれまでの政治経済社会システムのすべてが行き詰まり、これらに対して全面的な見直しが迫られていたのである。

二〇世紀後半になって、世界人口の爆発と現代文明の巨大化高度化大量化のもとで、地球の有限性が明白となった。にもかかわらず、これを頭から無視し、国際社会のグローバル化からバーチャルリアリティの世界へと、さらなるフロンティアを求めて人間活動がつづけられた。

人類のゴールデン世紀と期待されて迎えた二一世紀に入って、地球の有限性がますます際立ち、異常気象が頻発し、世界各地を大風、大雨、洪水、干ばつ、熱波が襲う。地球温暖化による気候大変動の世紀がはじまったのだ。

これは無分別な人間活動に対する地球の有限性からの警告であった。

これまでの世界のシステムは、意識すると意識しないとにかかわらず、経済であれ、政治であれ、社会であれ、すべて地球の無限性を前提とするものであった。だが二〇世紀後半、世界人口が大爆発して六〇億人の壁を超え、現代文明の巨大化高度化大量化とともに、人間活動が地球の規模や容量をも凌駕するようになった。

この時点で、人間社会に「コペルニクス的転換」が生じたのだ。これまでの「プラス（利潤）最大化」システムは「マイナス」を拡大再生産することになった。「プラス」が地球の有限の壁に衝突し、「マイナス」へと転化していくのだ。

その結果、「プラス最大化」追求のための過剰な人間活動が「マイナス」の最大化を招くことになっていく。

冷蔵庫の冷媒用に開発されたフロンガス（ＣＦＣｓ）などの化学合成物質がオゾン層破壊や地球環境汚染を招いた。

石炭や石油を燃料として使用する技術の開発による化石燃料消費の増大が大気中二酸化炭素濃度を増加させ、地球温暖化を招くことになった。

原子力の利用から核戦争の恐怖と地球規模の放射能汚染を招いた。

大量生産にともなう景気拡大のための大量消費が大量廃棄を招き、ゴミの山を築き、大気や水域を汚染し、地球環境を悪化させたばかりか、さまざまな資源枯渇を招いているのだ。

米国のサブプライムローンから生みだされた実体経済から離れた金融派生商品がグローバル化した金融界を席巻し、世界恐慌を招くなどなど。

このような「プラス」の「マイナス」への転化が生じているにもかかわらず、いまもって、経済をさらに成長させて最大限の利益を確保しようと、ますますグローバル化を押し進め、大量生産大量消費大量廃棄システムをフル回転して一層の消費拡大を促し、相も変わらず過剰な人間活動がつづけられている。

一見すると、個々的には合理的にも見える人間活動でも、全体から見れば不合理なものとなる。たとえば、経済のグローバリゼーションのもと、コスト最小化のための生産分業システムを一層先鋭化するとともに、貿易自由化の徹底がつづけられる。だがこれは生産コストの安いところを漁り、地球環境と労働者をとことんしゃぶり尽くそうとすることにほかならない。バーチャルウォーター（自国で生産した場合に要する仮想的な水必要量）の増加やフードマイレージ（生産国から輸入国までの輸送エネルギー量）の増加のほか、生産地の環境汚染や自然破壊などといった環境負荷の大幅増大は無視あるいは軽視されたままなのだ。

いまや、人間は自らの個々の活動を通して地球環境へ加える環境負荷を幾何級数的に増やしてきており、それはすでに限界（地球環境容量）を超え、生存の場である地球環境を日増しに悪化させ、自らの生存さえ危うくしているのだ。

問題は人間がまだこのことに気付いていないことだった。いや、気付こうとしないのだ。人間は自ら破滅への道を転がりだしていたのだ。だがこれらはすべて、欲得に目が眩み、我欲に走った人間の為せる業だった。

彼は大きな溜息を吐いた。

２２

「海面上昇対策にからめて東京沈下対策を実施することにしてはどうかと話してきましたよ」

久しぶりに研究室に顔を出した佐藤がソファに座ると、机から立ち上がり、近づいてくる九鬼に向った大声で言う。

「で……」

「海面上昇対策には防潮堤のほうが安上がりだというやつをどう説得するかなんて言ってましたがね。先生のほうからゼロメートル地帯住民移住計画の具体案を提示してはどうですかね」

「うん、いま用意しているところだ。佐藤くんも一緒にやらんか。いろいろな案が考えられる。片っ端から実行しなければ間に合わないからね」

祐子は早速行動を開始していた。インターネットにＨＰを開設して「Ｕターン推進運動」や「限界集落再生計画」のほか、「田舎暮らし体験運動」「有機野菜栽培講座」などの情報提供と斡旋をはじめ、住民移住計画を強力に推し進めているのだ。これらとともに、実践のためにＮＰＯやＮＧＯを立上げ、実行部隊の隊員を募り、行動を開始していた。

だがこんなことではいくら頑張ったところで、東京沈下までに住民のごく限られた数しか移住させることはできない。ゼロメートル地帯の二〇〇万人もの住民全体となると、新たに都市をつくるようなことをしなければ全員を収容することは到底できない。まして沈下が予想される首都圏の四〇〇〇万人を移住させるとなれば一体どうすればいいのか。

「『首都機能移転』を再燃させますか。いっそのこと、東京全体を移転させればいいんだよな」

二〇世紀中頃から末にかけ、人口過密対策と災害対策として首都東京に集中している政治機能の一部を地方へ移転することや遷都が検討されたことがあった。候補地域の絞り込みまでやったが、反対論が強くうやむやになってしまっていた。

「遷都か。大げさなことを考えても、なかなか纏まらない。できるとこからやっていくほかない。とにかく、早く、ひとりでも多く救済することだ。それに新しい居住空間を確保するなら、たとえば、雨水の利用はもちろん、超高層ビルやガソリン車のない省エネ低二酸化炭素型都市といった環境に優しいものでなければ意味がないしな」

彼は建築士佐橋祐子の新しい仕事として、このような新しい環境都市の設計をけしかけていた。とにかく、東京沈下が本格的にはじまり、河川堤防や防潮堤が損壊して河川水や海水が漏洩してくればまずゼロメートル地帯が水没するのだ。そのまえに、二〇〇万人の住民の受け入れ態勢を早く整えなければならない。東京が広く沈下するとなれば、この近くにテント村を造営するところなんかないのだ。

「ところで、米軍の動きは……」

いまだに、政府や関係機関に動きがなかった。東京沈下がすでにはじまっていると考えていた彼はいつ沈下が本格化するか気が気でなかった。もしピーターソンの言が本当なら、本格化するまえに米軍は行動を起こすにちがいないと思った。

「とくに表立った動きはないけど、横須賀基地で原子力空母艦隊が出航の準備をはじめているらしい。大量の食料や水のほかにさまざまな物資を調達して積み込んでいるという」

「ホントか……」

やはりピーターソンの言っていたことは本当だったのか。日本の政府は一体なにをしているのか。

「あれは東京沈下に関連した動きですかね」

佐藤は急に黙り込んだ彼を見ながら、呟く。

電話が鳴った。彼は立って、机の受話器に手を伸ばす。

「あ、きみか……」

祐子だった。

「堤防が崩れ、水が噴き出しているらしいの」

「どこの堤防がどの程度、いつ崩れ出したの……」

「方々でサイレンが鳴っているわ。かなりの沈下がはじまったらしいのよ」

「洪水になるまえにそこから抜け出たほうがいい、早く……」

「分かったわ……」

電話が切れた。彼は受話器をもったまま、しばらく机のわきに立っていた。

「堤防がどうしたんですか、先生」

佐藤がそばに寄ってきた。

「決壊しだしたらしい。ゼロメートル地帯で沈下が起きているようだ……」

佐藤はテレビのスイッチを入れ、携帯を取りだす。

「どこだ……、荒川か……」

画面にはヘリから撮影した映像が映し出されている。

「ゼロメートル地帯を流れる河川堤防から水がしみ出ていると言っていたが……」

彼もテレビの画面に身を寄せ、食い入るように見つめ、超高層マンションを探す。彼女はマンションを出ただろうか。

「社に戻らなければ……」
佐藤はテレビを振りむきながら、立ち上がった。
彼は気が気でなかった。ゼロメートル地帯を流れる川は地面より高いところを流れる天井川だった。もし天井川の堤防が決壊するようなことになれば、ゼロメートル地帯にはあっという間に水が溢れ、一帯が水没してしまうのだ。
テレビはつぎつぎと新しい映像が映し出されていく。彼は祈るような気持ちでテレビの画面を見ていた。

23

「総理、荒川の堤防が決壊しそうです。荒川だけではありません。堤防の数箇所で激しく水が噴き出しているということです。決壊は時間の問題です。東京東部のゼロメートル地帯一帯が水没の危険にあります……」
頭に禿げた首席補佐官があたふたと駆け込み、大きな執務机で書類に目を通している首相に緊急報告を伝える。
「うむ、すぐ委員会を開いてくれ」
「全員が集まっております」
首相は補佐官を一瞥し、革張りの椅子から立ち上がると、幾分突き出た腹を揺するように身体を左右に揺らしながら、隣の会議室へ向う。背は高くないし、肉づきもいいほうではないが、顔が大きいせいか大きく見える。
会議室の中央に長方形の大きなテーブルがあった。
首相は中央の席に着くと、青ざめた顔で出席者を見渡した。議論を纏めやすいように極力人数を控えるように言っておいたが、それでも委員総数一〇名になっていた。二名の補佐官と関係省庁の大臣六名のほかに、地震と国際経済の二名の専門家だ。
「かねてからご検討頂いておりました東京沈下の件ですが、新たな展開がありまして公表すべきか否かについてご意見を頂きたい」
首相は一通り委員たちを見渡すと、委員たちの席の後ろ陣取っている関係各省庁の部長や課長たちに珍し気な視線を送った。いよいよ行動の時を迎えたというのかと思い、首相は青い顔を引き締めた。
いつもなら会議はオフレコで、議題に関係する委員のみを呼び、委員全員を招集することはなかった。だが今日は総委員出席の会議だった。
「只今、数箇所で河川堤防から水が噴き出し、決壊のおそれが生じたとの報告を受けました。詳細はお手元にお配りした資料に記載してありますが、このような事態発生にともない、これまで伏せてきた東京沈下に関する情報の公開に踏みきるべきか否かについてご議論頂きたいと思います」
隣の頭の禿げた補佐官が首相の挨拶を受けて議事を進行する。
首相は東京沈下を可能な限り伏せて置こうと考えていた。東京沈下が表沙汰になれば、世界有数の経済力をもつ日本経済の破綻は免れないからだ。かといって、いつまでも先送りすることはできないことだった。いつかは明らかにしなければならない。だができるだけ先に延ばしたかった。自分が首相の座に留まっているときは伏せたままにしておきたかった。
避けていたそのときがとうとうやって来たのだ。いま、東京沈下が火の下に曝されてしまったのだった。
東京沈下による日本経済の破綻は止むを得ないが、影響は日本経済だけですまないのだ。グローバリゼーション下の世界経済では一国の経済破綻

でもその影響は世界へ波及していく。世界へくまなく手を広げている日本経済ともなれば、破綻の津波が世界経済を何度も襲い、甚大な影響をもたらすことになるのだ。

東京沈下を公表するとはこのような事態の発生を容認することだった。

首相は東京沈下がもしかしたら世界経済をも巻き添えにするかもしれないという戦慄きと、日本国そのものの存立を危うくするおそれとを感じ取っていた。このことが彼の決断を鈍らせ、問題を先送りしてきたのだった。

実際四〇〇〇万人もの住民が住んでいる首都圏の広範囲が沈下する事態に直面しても、秘密裏に対策を打つことは不可能なことだった。彼はじっと堪え、一心に考えた。だがたかだか東京沈下が独りでに収束し、遠のくことを祈るほかなかった。

いま、東京沈下が牙を剥いたのだ。

首相はふたたび委員たちを見回す。これまで何度も対応策をめぐって意見を戦わせてきた委員たちも首相の青ざめた顔を盗み見るだけで発言しようとしない。

東京沈下の公表は首相が決断することなのだ。堤防が損壊し、ゼロメートル地帯に浸水がはじまっているとき、公表するかしないかを議論してもはじまらない。賽は投げられたのだ。

ゼロメートル地帯の二〇〇万人の住民が現に救済を待っているのだ。

首相は腹をくくるほかなかった。

「本日、記者会見を行い、東京沈下について話します。東京沈下にともなう政治、経済、社会の混乱を最小限に止めるよう、ご尽力頂きたい」

首相は深々と頭を下げた。

沈黙が支配した。

「では……」

しばらくして、首相は一言言い、立ち上がった。

「記者会見は準備が整い次第実施します。混乱の生じない時間を見計らって設定することにします。これで散会します」

補佐官は口早に言い、首相の後を追った。

２４

「先生、首相が記者会見を行うそうです。東京沈下がいよいよ危険水域へ入ったということらしい」

佐藤が早速研究室に連絡してきた。

「いつ……」

「もうすぐでしょう、多分……」

「……」

九鬼は祐子のことが気になった。超高層マンションから出ただろうか。記者会見で東京沈下が公表されれば、ゼロメートル地帯方面は街中が大混乱となるにちがいない。道路には家路を急ぐ男女の勤め人や車が溢れ、交通機関はラッシュ以上の混雑となるだろう。

「市場が閉じてから記者会見を行おうと考えていたらしいが、すでに内容が洩れてしまっているらしく、円と株が急落しはじめている……。大パニックだ」

半信半疑だった佐藤も本気になったのか、上ずった声で口早に言い、

「取材だ」と電話を切った。

彼は祐子の携帯を呼び出す。だが何度やっても繋がらなかった。

彼は諦めてテレビのまえに戻り、画面を覗く。ヘリから撮影した映像に首相の記者会見を予告するテロップが流れている。

突然、画面に水が噴き出している堤防が大写しになった。辺りに水が溢れ、噴き出る水が堤防の土砂を流している。見ているうちにみるみる水の噴き出る穴が大きく広がっていった。

彼は一瞬、奇妙な光景を思い浮かべる。からからに乾いた砂漠に突如として天空から一条の滝のような雨が降り、乾いた砂地にしみ込んでいく。やがて水が溢れ、水溜まりをつくり、大きな溜池となる。さらに広がり、川となって流れていく。辺には草木が茂り、鳥や大小の獣が群がる。天空から滝はますます勢いよく流れ落ち、洪水となって一面を覆い尽くす。草木は没し、鳥や獣は逃げ出す。満々と水を湛えた水面を飛ぶ水鳥が魚をかすめ獲る。

いま世界中で約三〇億人が水不足に悩まされている。その一方で、水が溢れているのだ。今世紀半ばには世界人口が八〇億人を超え、その約半数である四〇億人以上が水不足の危機に陥るのに、ゼロメートル地帯では水害の危機に襲われているのだ。水を必要とするところに水はなく、いらないところに水が溢れている。

まもなく、ゼロメートル地帯一帯は洪水に呑まれ、一面が海となるのだ。海のなかから突き出る超高層マンションも次第に傾き、やがて海中に消えていくにちがいない。

テレビでは首相の記者会見がはじまっていた。だが彼の耳には首相の声も質問する記者たちの声も聞こえていなかった。彼の目には静かに沈みゆく超高層マンションが映っていた。

そのときふと、彼は祐子の悲鳴を聞いたように思った。

25

消防士の一団が一列に並んで砂袋を手渡し、水漏れ箇所の水中へ砂袋を投げ込み、漏水防止のための堤防補強作業がつづけられていたときだった。

「決壊するぞ……」

先頭にいた中年の消防士が、突然、大きな叫び声を上げた。

堤防の頂上の一部が僅かに陥没しているのか。砂袋を同僚から受け取ったとき、踏ん張った右足の親指あたりの靴の先端が土中にのめり込むような感じがしたのだ。足元を見ると、幾分凹んで見える。

「堤防の内部に水道ができて土砂も流れているんだな。危険だ。そばによらないほうがいいぞ」

作業を中断し、消防士は堤防の内側にまわり、漏水状況をチェックする。案の定、漏水が激しくなっている。堤防の中腹に走る亀裂から噴き出る水はまわりの土砂を流し、濁水となって口を広げていた。

最初は目に見えない亀裂だったが、いつの間にかそこから水が染み出す。その段階で内部では次第に亀裂が広がり、漏水に内部の土砂が混じり濁水となっていった。

濁水が勢いを増し、内部を空洞化していくのだ。やがて堤防は大きく崩れ、決壊するにちがいない。

「危ない、離れろ」

そのとき、突然、消防士の足元が陥没し、堤防が崩れ落ちた。同僚の消

防士が腕を引っ張る。二人の消防士が渦を巻く河川水のなかに落ち、渦に吸い込まれていく。

堰を切って溢れ出る河川水が堤防を切った。

見る間につぎつぎと堤防が連続して崩れ落ち、決壊口を広げていく。

広がった決壊口から大量の濁水が低いゼロメートル地帯へどっと滝のように勢いよく流れ込む。濁水のなかを落ちた二人の消防士が流されたいく。

堤防から道路を隔てて戸建の二階建ての古い住宅が並んで建っていた。

道路へ流れ込んだ濁水は、まるで津波のように、数十センチメートルほどのかま首に立てて直進し、戸建の住宅群を襲う。玄関口や庭先に浸入した濁水は植木鉢や犬小屋を押し流し、家屋の壁やガラス戸に襲いかかる。ガラス戸を打ち破り、壁を激しく揺する。

床一面に濁水が広がり出す。瞬く間に、水嵩が急増し、床下に浸水した水が床から噴き出し、畳を浮き上がらせた。

堤防決壊の警報もなく、知らずに一階のリビングで食事やテレビを見ていた住民たちは慌てて二階へ避難する。

水嵩はさらに増し、家屋を持ち上げる。古い木造家屋は土台から離れ、洪水のなかを流されていく。

マンションは低層高層にかかわらず、一階や地階には浸水し、水没するものもでた。

決壊個所はさらに広がり、ゼロメートル地帯への浸水はさらに激しくなった。

道路へ流れ込んだ濁水が河川を流れるように滔々と流れ、ゼロメートル地帯全域へと広がっていく。

消防士や近所の住民ボランティアが総出で必死に漏水防止の応急措置をやっていた堤防もつぎつぎに決壊していった。

堤防が決壊した河川は荒川だけではなかった。荒川には数多くの支流があるが、堤防決壊は江戸川などのほか、荒川から分かれた隅田川、新中川など大小の河川のいたるところで発生した。決壊箇所は数十箇所を超えた。

一時間後、洪水はゼロメートル地帯のほぼ全域に広がった。

26

「あっ……」

佐橋祐子はふいに勢いよく押し寄せてきた水に足を取られた。津波のような濁水が転倒して横になった彼女を押し流す。

いくら待っても来ないタクシーに苛立ち、重いスーツケースを引いて超高層マンションのエントランス前からアプローチの坂道を降りて通りに出た。そのときだった。

突然、流水が押し寄せて来たのだ。道路が川となった。転倒した彼女は流水に押し流されていく。

満潮時だった。満ちてくる潮に河川水が流れ込み、正面衝突して海面が一層上昇しているところの防潮堤の一部が沈下し決壊したらしい。埋立地へ一挙に大量の水が流れ込んだのだ。

彼女は十数メートル流され、道路端の杭につかまり立ち上がった。びしょ濡れだった。靴が脱げ、スーツケースはどこかへ流されていった。たすき掛けに肩に掛けていた小さなショルダーバッグだけが残った。

濁水の流れは最初の勢いが失せていたが、水嵩が増して膝に達していた。

彼女はマンションのエントランスをめざして水のなかを歩いていく。
彼女は急いで自室に戻ると、熱いシャワーで冷えた身体を温め、着替えを済ませた。だが疲れてしばらくソファに横になった。全身から力が抜けていく。彼女はそのまま眠りに落ちていった。
身体が冷えてきて、目を覚ました。すっかり眠り込んでいたらしい。辺りは暗くなっていた。
彼女は窓からの薄明かりのなかで照明のスイッチを探した。
リビングのスイッチを何度押しても照明が灯らない。故障かと思い、キッチンのスイッチを押す。ダメだ。リビングに戻って、テレビの電源を入れる。うんともすんともいわない。
「停電かしら……」
彼女は窓辺により、外を覗いた。都心の空は照明に照らされ、一面に光が溢れ、明るい夜の光景が広がっていた。
真下に目を移すと、暗闇が支配している。時折、サーチライトの光線が光る。耳をすますと、遠くでサイレンが鳴っている。救急車の警笛音が響く。
一か月ほどまえ、マンションを引き払うことを決め、手放すことにして売りに出したが、なかなか買い手が見付からなかった。そこで、彼女は相変らず事務所として使用していたのだった。
壁の時計を見ると、九鬼がそろそろ帰宅する時間だった。彼女は彼へ連絡しなければと思い、携帯を探した。マンションにいるときにはいつもテーブルの上に置いているが、そこにはなかった。
「ショルダーかしら」
ショルダーも見付からなかった。彼女はバスルームで濡れた服を脱いで裸になったことを思い出した。
パウダールームの化粧台のうえにびしょ濡れになったショルダーがあった。突然の流水に足を取られ、転倒したときのことがまざまざと思い出された。
あのとき、タクシーが直ぐ来てくれていたら、いまころは九鬼のマンションで夕食を作り、彼の帰りを待っていただろう。彼女は彼の声を無性に聞きたいと思った。
彼女はショルダーのなかに手を入れ、携帯を獲りだした。携帯は濡れ、水滴が付いていた。
彼女は急いでタッチパネルを押す。
何度押しても、電源が入らない。
部屋のなかに闇が押し寄せてきた。
部屋には懐中電灯もローソクもなかった。いまのうちに管理室へ行って予備の懐中電灯を借りておこう。ついでに電話を借りて、九鬼に連絡したいと思った。
彼女は廊下へ出た。照明が消え、暗い。僅かに非常灯が足元を微かに照らす。停電ではエレベーターは動いていなだろう。もしかしたら、非常用電源で動いているかしら。彼女はエレベーターに近づく。
やはりエレベーターは動いていなかった。彼女は非常階段を探した。
非常階段はエレベーターの反対側にあり、入口にはドアがあった。彼女はドアのハンドルを引きだし、ノブをゆっくり回す。
暗い空間のなかにコンクリートを張った階段が非常灯の淡い光に浮かんでいた。
彼女の脳裏に、以前屋上の実験室からヒロシと一緒に非常階段を下りた

記憶が蘇ってきた。前を行くヒロシが振りむいたような気がした。
彼女はヒロシの姿を探すかように、しばらく暗い空間を覗いていた。
「ヒロシ……、どうしているかしら……」と彼女は思わず口を吐いたが、声にならなかった。
彼女は暗い闇の中へ歩みだす。
濡れた衣服を着たひとが通ったのか、それとも濡れた雨傘を引き摺ったのか、階段に点々と水滴が垂れたあとがあって、非常灯の淡い光に鈍く光っていた。滑りそうになる足先に力を入れ、彼女は慎重に階段を下りていく。
「ママ……」
後ろからヒロシの声がしたような気がした。彼女は振り向き、闇の中を探す。誰もいない。
「ママ……」
しばらくして、ふたたび、声がした。彼女は声のする方へ身体を大きく回した。
その瞬間、足元が滑って、彼女の身体が宙を舞った。

27

ゼロメートル地帯では洪水の発生とともに送電が途絶え、広範囲にわたって停電していた。暗闇の中、投光器を投入して決壊した堤防の仮止め工事がつづけられた。その一方、非常用電源を用い、排水ポンプをフル稼働させたが、一向に水嵩は減らず、ゼロメートル地帯を襲った洪水は時間が経っても引く気配はなかった。
「これじゃ、ムリだ。いくら土嚢を投げ込んでも効果がない」
消防士の指揮官が呟く。首相の記者会見は「寝耳に水」だった。東京沈下なんて信じられなかった。だがやはり、緩慢な地滑りで堤防のいたるところで基礎が沈下し出しているというのは本当かもしれない。ではどうすればいいのか。
消防士は天を仰ぐ。暗い闇夜が広がっていた。
彼の脳裏にふたたび記者会見の場面が蘇ってきた。時折目を伏せ、視線も定まらないまま、原稿を棒読みする首相のいかにも自信なげな様子が目に浮かぶ。
首相の説明を聞いても、半信半疑だった。消防士には東京沈下が進行中だとはどうしても思えなかった。だが決壊個所へいくら土嚢を投げ込んでも流水を止めることができなかった。むしろ土嚢を投げ込むたびに堤防の崩壊が広がり、決壊個所が大きくなっていくのだ。
もはや、仮止めは不可能だった。全くお手上げ状態だった。ゼロメートル地帯は水没状態のまま放置するほかなかった。

同じころ、東京都心に進入する高速自動車道でトレーラーや大型トラックが横転する事故が相次いだ。東名高速道路の大井松田付近で急ブレーキを掛けたトレーラーが横転し、後続の三〇数台が追突する玉突き事故が発生した。中央自動車道では相模湖付近で大型トラックが横転した。後続車が何台も追突した。関越自動車道では藤岡ジャンクションと本荘児玉の間で大型トラックが防音壁に激突して横転した。東北自動車道では館林付近で同様の事故が発生した。
これらの事故に共通することは道路の路面に異常があったことだった。

生命を取り止めた運転手の話では、道路に段差ができているように通過の際に激しくバウンドしてハンドルを取られたというということだった。
また事故発生以前にその付近を通った運転手らによると、そのときすでに路面が波打ち、通過の階に激しい震動を感じたという。
事故の後始末に追われていた若い係員はなにか得体のしれない異変が生じていると感じた。係員は時折手を休め、闇を透かしてみるが、なにも見えなかった。夜が明けるのを待って、詳細な調査が行なわれることになった。

28

道路には車が増え、ところどころで渋滞しはじめていた。九鬼は混雑していない道路を探し、地下鉄の駅に向う。
彼は海中に取残された超高層マンションが倒壊する様子を思い浮かべたとき、不意に祐子の悲鳴を聞いて、反射的に研究室を飛び出したのだった。
地下鉄の駅構内には家路を急ぐ会社員風の勤め帰りの中年男や若い女性、学生風の若い男女で溢れていた。
学生たちの話し声がした。
「荒川の堤防が切れて、洪水が発生したらしい。大丈夫かな、家は……」
「東京が沈下するって、ホントか」
「テレビでは沈下しているといっていたじゃないか、進行形だよ」
「じゃ、電車はムリだ、いつまで待っても動かない」
彼は諦め、駅を離れた。彼は携帯を取り出し、祐子を呼びだす。通じなかった。こんなときは通信量が増え繋がりにくいのかなと思ってみるが、彼女の悲鳴が重なり、不吉な思いが頭をもたげ、彼を一層不安へ陥れていく。
歩道には駅へ向うひとの群れが溢れ、彼は押し寄せてくる人びとを掻き分けるようにして進む。
ふと、彼女がマンションに帰って待っているような気がした。彼は急いでマンションへ向う。
だがマンションの自室の窓には明かりがなかった。それでももしもと思い、彼はマンションのなかに入り、エレベーターを待たずに階段を駆け登る。
ドアのなかは深閑として、人の気配はなかった。
突然、電話が鳴った。彼は室内の照明を点け、受話器を取った。
「先生、今日は早いですね。研究室へ伺ったのでしたが……」
佐藤だった。
「あ……、一寸……」
「ゼロメートル地帯は全域水没したようです……」
「……」
彼は溜息を吐く。
「佐橋祐子さんの超高層マンションも水のなかのはずです。彼女はいますか。超高層マンションにいるんじゃないですよね」
佐藤は九鬼の気持ちを察しているのか、ずけずけと言う。
「……連絡が付かないのだ……」
彼はようやく声をしぼり出す。
「どこにいるのですか。超高層マンションですか」

「……かもしれない」
「予知（地震予知連絡会）の連中の話では、液状化現象が起きているのじゃないかと言っているんですが……」
地震予知連絡会は地震予知のための情報の交換や専門的検討を行なうために集まった大学や関係研究機関の地震研究の専門家の集団であった。彼らはまえまえから東京沈下についても検討を重ねていたのだ。佐藤は首相の記者会見後、彼らに取材したのだという。
「ホントか、微震動でも液状化が起こるというか……」
液状化現象とは地下水を多く含む砂質地盤に強い震動が加わると地盤が液体のようになってしまう現象だ。このような現象が生じると、地盤には上の建物を支える力が失われ、建物が倒れてしまうおそれがあるのだ。
「まさか、超高層マンションに取残されていないでしょうね」
「直前までいたらしい……」
彼は最後に連絡したときのことを思い浮かべる。
「行ってみましょ、超高層マンションへ。待っていて下さい。迎えに行きますから」と言うと、佐藤は電話を切ってしまった。

29

「行けるところまで行って、そこから歩きましょ」
佐藤は車窓から外へ目を向けたまま、ぽつりを言う。彼を迎えに来た車にはM新聞の社旗を付けてあるが、渋滞に嵌まってなかなかまえへ進まない。
車は進んでは止まり、また進む。そんな車に苛立ちながら、彼は携帯で祐子に連絡を試みる。
「電源が入っていないらしい」
「管理事務所はどうですか、遅くとも、誰かいるでしょう。非常事態のときですからきっと誰かいるはずだ」
遠くに暗い空が広がって見える。いつもなら地上の照明に反射して空の雲が薄い光を放つ。だがゼロメートル地帯から明かりが消え、空まで闇が支配している。
「歩きましょうか」
佐藤が車を降りた。
歩道には座り込んでいる人影が点々とあった。帰るに帰れず、夜が明けるのを待っているのだ。あるものは頭を垂れて蹲り、またあるものは顔を上げて目を見開き、暗い彼方を凝視している。
橋が見えた。その向こうに超高層ビル群の黒い影が空に突き出ている。
橋を下りていくと、一面に水が張っていた。
「明るくなるまで待ちますか。潮が引けば水嵩も減るかも……」
彼には佐藤の声が聞こえなかった。
くるぶしまでしかなかった水深が次第に深まっていく。どこに深みがあるか分からない。暗闇のなかを足先の感覚を頼りに、彼はまえへ進む。
彼はふと佐々木教授を思い浮かべた。教授も大雨の洪水のなかをこんなふうに超高層マンションを目指して歩いたのだろうか。
足元に一条の光が射した。懐中電灯の光だった。後ろの佐藤が射していた。彼は佐藤を待って、ふたりは広い道路らしいところを選んで歩いていった。

超高層マンションのエントランスは若干高いところにあるせいか、そこまで水位が達していない。奥の方に薄明かりが見えた。
管理室に人影があった。佐藤の大きな声に人影が動いた。
小窓が開いた。よく見えないが、中年の男らしい。
「M新聞の佐藤です。六階の佐橋祐子さんを訪ねてきたのですが……」
佐藤は懐中電灯で自分の顔を照らした。いつのまにかM新聞のヘルメットと腕章を付けている。
「佐橋祐子さんですか。一寸、お待ち下さい」
かちゃかちゃと音がした。インターホーンの操作音か。
「留守のようですね……」
中年男は素っ気無く言い、欠伸をかみ殺す。
「そんなはずはない。眠っているのかもしれない。いや、もしかしたら……」
九鬼が叫ぶ。
中年男は顔を引っ込めた。ふたたび機械音がした。
「やはり、返事がありませんが……」
中年男はじろじろとふたりを見ている。
「さっきまで彼女はここにいたんですよ。出ていく姿を見たんですか、あなたは……」
九鬼は佐藤を押し退けて前へ出る。
「……」
「わたしが調べてきますから、鍵を貸して下さい」
「それはできません」
「じゃ、一緒にいって調べて下さい」
「で、あなたは……」
「彼女のフィアンセです」
佐藤が驚いた顔をした。中年男はしぶしぶ鍵を持って出てきた。
「エレベーターはないですよ、停電で動かない。非常階段で……」と言いながら、中年男は懐中電灯で自分の足元を照らし、さっさと歩き出す。
管理室の横の狭い廊下を抜けて奥へいく。
「非常階段は何箇所かあるんですか。まえのときと違うようですが……」
佐藤が後ろから声をかける。
「このマンションには二本の非常階段があります」
中年男は事務的に応えた。こんな夜中に六階まで階段を上らされるとは全くついていないと思っているのか、余計なことはなにも言わない。
ふたりは黙々と歩く中年男のあとに従う。壁のドアを開けると、非常階段があった。三人は階段を上っていった。
六階の佐橋祐子の部屋には彼女の姿はなかった。
九鬼はなにか彼女の手掛かりとなるものが残されていないか、懐中電灯の光を頼りに丹念に探すが、中年男はそばで早く出ろと言わんばかりに鍵をかちゃかちゃ鳴らしつづけている。
彼はトイレを覗き、隣のパウダールームの半開きになっているドアを押した。
パウダールームにショルダーバッグがあり、携帯が投げ捨ててある。手に取ると、携帯から水滴が垂れた。バスルームに濡れた服が脱ぎ捨ててあった。
「なにがあったんだ……」
そばで佐藤が呟く。

「まだですか。もういいでしょうか……」
中年男が悲鳴を上げる。
九鬼はじっと中年男を見た。この男は本当に佐橋祐子の姿を見なかったのか。なにか隠しているのか。
「この辺に水が流れて来たのは何時ごろですか」
「あれはお昼過ぎでしたか……」
「そのころ、佐橋祐子さんがマンションを出るのを見かけなかったですか」
「さあ、今日は夜勤で、管理室には六時に入ったので……」
「夜勤でしたか。そのまえの方はお帰りになったんですか」
「ええ、まあ……」
中年男は曖昧に応え、もういいでしょうと言わんばかりに、鍵を激しく鳴らした。
「どこへ行ったのかな、彼女は……」
ドアの開閉音を発てて見て回っていた佐藤が戻ってきて、呟く。
「もういいですか」
中年男は繰り返した。
ふたりは顔を見合わせ、ドアへ向って歩き出す。
廊下に出て施錠すると、中年男はさっさと歩き出した。
「あのう、別の非常階段はどこですか。帰りはそっちを通りたいのですが……」
彼は中年男の背に向って、声を掛けた。中年男は一瞬立ち止まって振り向く。やがて、黙ったまま、向きを変えて反対側へ歩き出した。
二箇所にある非常階段は彼女の部屋からほぼ同じ距離で、対称的な位置にあった。上りは時計回りで、下りは逆となる。
非常階段へのドアを開けると、なかには湿った空気が淀んでいた。暗い空間に非常灯が浮かび、淡い光を放っている。
まえを下りて行く中年男が足を止めた。
「あっ……」
あとにつづくふたりが下を覗く。
踊り場にひとが倒れているらしい。
恐る恐る近づく中年男が射す懐中電灯の光の輪のなかに、仰向けに倒れている佐橋祐子がクローズアップされていった。

第四章

30

首都圏のゼロメートル地帯は東京都二三区の湾岸部と東部のほかに、千葉県の浦安市、市川市行徳、船橋市などの湾岸部へ広がる。なかでも、東京都の足立区、葛飾区、江戸川区、墨田区、江東区などは人口密集地帯で、約一五〇万人が住む。首都圏のゼロメートル地帯全体では約二〇〇万人に達する。

今回の堤防決壊による被害はこれらの二〇〇万人全員におよんだ。

犠牲となった住民の多くには、避難警報が間に合わなかった。突然の出水に逃げ惑い、生命を奪われた住民が多かった。急な増水が一人で逃げることの出来ない寝たきり老人を襲ったのだ。

堤防から水がしみ出ていることが最初に見付かったときからかなり経っていたことも災いした。東京沈下のことを知らされていなかった住民はサイレンの音にも慣れ、今回も補修すればいいのだろうと思っていたらしい。結果的に、住民には「寝耳に水」となったことが被害をさらに大きくしたのだ。

堤防の決壊過程では皆同じような様相を示していた。最初は堤防に目に見えない亀裂が走り、そこから水が染み出した。次第に亀裂が広がり、漏水に土砂が混じり、濁水となっていったのだ。堤防内部の土砂が流れ出るようになった濁水漏洩の段階で、砂袋で漏洩防止の補強が試みられたが、そのときはすでに遅く、土砂の混じった漏水はつづき、効果がなかった。

堤防に亀裂が走って水が染み出し、次第に漏水の量が増して水の流れる水道ができたときには堤防内部に大きな空洞ができてしまっていたのだ。微震動がつづき、土砂が崩れ落ち、ますます土砂が流れ出していったらしい。微震動が長期的に継続していることも地盤を軟弱化し、ついに液状化していったのかもしれない。問題はこのような状態が継続していることだった。決壊堤防の仮止めはできず、洪水が引くことがないのだ。むしろ、時間とともに、沈下によって水深が増していくおそれがあった。

出水したとき、二〇〇万人の被害者のうち、半数の約一〇〇万人が家の中にいた。残りの半数、全体の四分の一の約五〇万人がゼロメートル地帯内で仕事や買い物で、あるいは学校、塾、友だちと遊んでいるとき、または車などで移動中に突然の洪水に遭った。残りの約五〇万人がゼロメートル地帯から離れた勤務場所で仕事中か、帰宅途中者であった。

当面、この二〇〇万人の救済が問題だった。

この他にも、被害があった。奇妙なことに、東京に向うすべての高速自動車道でほぼ同時刻に同様な事故が発生した。東京を取り巻くように小さな亀裂が地面を走り、それを境に東京側が僅かに沈下したために生じた路面の異常によるものであった。

地面の亀裂は注意深く観察しなければ発見できないほどのものであった。茨城から栃木、群馬の南部を東西に抜ける一〇〇キロメートル、埼玉、東京、神奈川の西部を南北へ走る一〇〇キロメートルに達するものであった。それは東京を中心とするほぼ正方形のエリアの輪郭付近にあたり、亀裂に沿って内側に数ミリから数センチの沈下がみられた。

31

「うちで掲載した先生の小論文が見直されていますよ」
佐藤は佐橋祐子の急死でショックを受けている九鬼を気遣い、なんとか元気づけようと毎日のように研究室に顔を出していた。だが九鬼は机に座ったまま、一日中動こうとしない。
今日も九鬼はずっと黙ったままで、机でじっとしている。
佐橋祐子は転倒の際後頭部を打ったらしく、発見されたときは意識を失っていた。すぐ救急車を呼んだものの、洪水のためかなり手間取り、病院へ着いたときには発見から数時間を経過していた。
彼女はついに一度も意識は戻ることがなく、三日後、息を引き取った。
佐藤はなす術もなく、机のまえに椅子を寄せ、無精髭を伸ばした九鬼を見守るほかなかった。
弁当と飲み物を置いて立ち去ろうとしたとき、机の電話が鳴った。
佐藤は九鬼が受話器を取るだろうと思い、背を向けた。だが電話のベルがつづく。振り向くと、九鬼は虚ろな目で虚空を見つめたままだった。
佐藤は受話器に手を伸ばす。
「ハロー、ドクター　クキ。元気か」
「えぇ……」
「どうした……、アンダーソンだが……」
佐藤は「アンダーソンだ」と言って、九鬼の耳に受話器を押し付ける。
「九鬼か」
「ああ……」
「どうした、元気がないようだが……」
「うん……」
「東京が壊滅したそうだが……」
「バカ言え、電話が通じているじゃないか」
「電波だから関係ない」
「話している電話は大学のケーブル電話だ」
「東京が水浸しになったんじゃないのか」
「うん、東京は沈下している」
「そうか。まあ、海面上昇の予行練習だと思えばいい。いずれ、海面は上昇する。国土面積に比べて、極端に長い海岸線をもつ日本への海面上昇の影響は計り知れない。その日のためにシミュレーションしているようなものじゃないか」
「犠牲者も大勢でているんだ……」
「とにかく、きみのモデルが実証されたということだろ」
「実証か。実証なんかして欲しくなかった。間違いであればよかったんだ……」
「どうした……」
「……」
「近いうちに会いに行く」
「ああ……」
「じゃな、ピーターソンがよろしくと言っている」
九鬼は佐藤から受け取った受話器をゆっくり戻す。

32

洪水はゼロメートル地帯一帯を瞬く間に覆っていったが、水深は潮の干満で変動するもののそれほどではなかった。損壊を免れた堤防や防潮堤の頭は露出しているし、高台はもちろん、盛り土して造られた道路の一部も潮の具合で顔を出す。戸建ての屋根や二階部分、ビルやマンションの二階以上は水中から突き出ており、一見すると普段と変わらないようにも見える。

水中に取残された戸建ての屋根や二階部分には避難している人影があった。またビルやマンションの屋上にも避難民が群がっている。突然洪水に出会い、急いで避難したのだろう。

水嵩が増しつづけることはなかったが、洪水が引く気配もなかった。

救助活動は夜通しつづけられた。救急車のサイレンも絶えることはなかった。洪水で家のなかに閉じ込められた病人や怪我したひと、衰弱したお年寄りや幼児がゴムボートに乗せれて、待機している救急車へ運ばれた。

ゼロメートル地帯から離れた勤務先の事務所や仕事場に出ていた約五〇万人にのぼる域外勤労者たちは、その夜は照明が消えたこともあって、洪水のなかに取残されたわが家へ戻ることはできない者が多かった。近くの路上で一夜を過したものたちは空がしらむと一斉に動き出した。なかには洪水のなかへ飛び込んでいくものもいた。

夜が明けると、自衛隊や消防隊が各地からぞくぞくと集結し、大規模な救援活動がはじまった。ボランティアも集まってきた。

洪水のなかに取残された住民を救い出して避難場所へ運ぶ一方、崩壊した堤防の補修に再度挑戦する。だが水漏れを完全に防ぐことができなかった。排水ポンプで排き出す量と同じ量の漏水が生じ、水嵩が減る気配はなかった。

沈下現象がつづいているし、微震動で液状化現象が発生しているらしい。そのため、仮止め用の土嚢が役に立たないのだ。

重機を駆使しての本格的な補修工事も効果が期待できず、当面は洪水の排水を断念し、住民の救助に専念することになった。

だがゼロメートル地帯の洪水を放置することはゼロメートル地帯を放擲することにほかならなかった。このままゼロメートル地帯は海の中に沈み、ここに住む二〇〇万人の住民はふたたびここに戻ることができないのだ。

救出された二〇〇万人の住民は住むところもなく、戻るところもない避難民と化するのだ。

自衛隊や消防隊はもくもくとして洪水のなかの住民たちを避難地の高台や丘へ運ぶ。避難民たちは水中に取残されたわが家を振り返りながら、ボートに乗り込んだり、誘導にしたがい、浅瀬を歩いていく。

水中から陸に上がる二〇〇万人を収容するため、公園、グランド、遊園地など、空き地という空き地にテントが設置された。テント村には風呂やトイレなど、日常生活が送れる程度の設備は完備されていた。テント村は近場だけでなく、郊外にもつくられた。だが二〇〇万人を収容するには足りなかった。

団地の空き部屋、学校、体育館、空家、新築マンションの空き部屋、ホテルやペンション、その他ボランティアが提供する空き部屋まで、臨時の収容所となった。

こうして避難民たちは洪水のなかから救出され、陸の住み処がまがりなりにもほぼ確保されたものの、これは一時のものにすぎなかった。避難民

たちの陸の住み処も沈下しつづけ、いずれ水中へ没するのだ。東京を中心とする一〇〇キロ四方が沈下しつづけているからだ。
こうして行くところも戻るところもないゼロメートル地帯の二〇〇万人の避難生活がはじまったのだ。

33

「先生、東京沈下は進行中なんでしょ。エンドレスにつづくのですか」
佐藤は今日もまた研究室にやって来て、九鬼の机のまえに陣を取る。アンダーソンと話したことで、それを契機に恢復することを期待したのだった。
だが九鬼は佐藤を一瞥しただけで、ふたたび目を閉じた。
佐藤には佐橋祐子の突然の死に九鬼がこれほどまでの打撃を受けるとは信じられなかった。なにもせずに机に座ったまま研究室に居続け、差し入れた弁当にも殆ど手をつけなかった。なにがそこまで彼を打ちのめしているのか、佐藤には分からなかった。
「先生、二〇〇万人を救うのじゃなかったんですか。四〇〇〇万人の生命が懸かっていたのではなかったんですか」
佐藤は声を張り上げる。こんなときに恋人かフィアンセか知らないが、佐橋祐子の死のショックから未だに立ち直れずにいる九鬼を腹立たしく感じるのだ。
九鬼は目を開けて、佐藤をしばらくじっと見た。それから立ち上がると、ふらふらした足取りで研究室から出ていった。
九鬼はなかなか戻らなかった。佐藤は引き揚げようかと腰を上げたが、思い直して応接セットの移り、いつものようにソファに深々と腰を下ろして彼を待った。
いつの間にか、佐藤は眠り込んでいたらしい。
視線を感じて、薄目を開けた。じっと見つめている二つの目があった。
「あ、先生……」
九鬼だった。無精髭もすっかり剃り落とし、頭髪も整っている。
「心配かけた……」
細いが力が籠った声だった。
「床屋さんにいっていたんですか……」
佐藤は自分でも随分間抜けなことを言うと思いながら、頬のこけた顔のなかで光る九鬼の目をじっと覗く。
九鬼は佐橋祐子の死を知ったとき、全身から力が抜けていくのを感じた。自分ではこんなことではいけないと思いながらも、どうすることもできなかった。立ち上がろうといくらもがいても立ち上がることができなかった。なにもする気が起こらなかった。息を吐くことさえする気がないのだ。このまま死んでいくなら、それもいいと思った。まるで生きる屍だった。生きる屍となったいま、彼はただ時間の流れに身を置くほかなかった。
彼は仮死状態にあった。
「二〇〇万人を救うのじゃなかったんですか。四〇〇〇万人の生命が懸かっていたのではなかったんですか……」
佐藤の叫びが響いた。微笑みを湛えた佐橋祐子が現れた。彼は彼女と二〇〇万人の移住計画を話しあったことを思い出した。

彼はようやく息を吹き返したのだった。

34

「まだ洪水のゼロメートル地帯に留まっている人たちが大勢いるんですよ。彼らは洪水がいずれ引くと思っているんです」

佐藤は目の前にいる九鬼に向って大声で言う。

「……」

彼は口を閉ざしたまま、じろりと佐藤を見た。

「決壊した河川堤防や防潮堤が補修されてゼロメートル地帯が元通りになると信じているんだ、彼らは」

「いずれ海中へ沈んでいく……」

彼は遠くを見て、ぽつんと呟く。

「いますぐではないでしょう。いつになるかそうなるというのでしょう……、そこが問題なんです。いつそうなるのですか、先生」

「そう遠くないうちにそうなる」

「ゼロメートル地帯を水没したまま放置すれば、わが国の領土が減り、貴重な財産が失われることになる。いつ水没するか分からないならば、いまはできる限り領土の保全に力を入れるべきではありませんか」

「いずれ水没するのだよ」

「ゼロメートル地帯の二〇〇万人をどうしようと考えているのですか。彼らの生命、財産をどう考えているんですか」

「新しいところへ移住できるようにすることだ」

「それにはどうすればいいのですか。いまのままでは彼らは難民化するほかないでしょう」

佐藤は訴えつづける。彼は次第に引き込まれていく自分を感じていた。

ゼロメートル地帯の被害者たちの居住環境は日増しに悪化していた。都や区あるいは県や市の係員や近所の人びとの説得にもかかわらず、かたくなに洪水のなかの水浸しの住宅に留まっている人びとはライフラインを絶たれ、水も食べものも事欠くなか、必死にわが家にへばりついていた。

かといって、陸に上がってキャンプ村に入った被害者たちにはラッシュアワーなみの混雑が待っていた。水や食料の配給には長蛇の列ができ、何時間も待たされる。最初は潤沢にあった救援物資も次第に減り、全員に十分行き渡らなくなっていったのだ。

テント村など避難者収容施設は方々にあって、物資の輸送に時間を要したことも一因だったが、物資の流入そのものが滞りだしていたのだ。恐れていたことが起こりつつあった。

亀裂や凹凸など道路の異常がいたるところに現れだした。高速自動車道の事故でいずれは道路が使用できなくなるかもしれないと薄々感じられていたが、それが思ったよりも早く現実となりつつあったのだ。

高速自動車道では段差の生じた異常箇所には応急措置を講じ、最徐行区間として使用をつづけてきたが、それも限界に達しつつあったのだ。地方から東京都心に入る新幹線や幹線鉄道の運行にも支障が出はじめていた。

飛行場にも異常が現れ、メンテナンスに時間がかかり出し、キャンセル便が出だした。外国からの発着便に影響が出、成田や羽田の国際空港が閉鎖されるおそれがあった。

一方、これまで殆ど影響がなかった港湾施設にも異変が生じだしていた。

岸壁が傾き、クレーンが正常に作動しないことがあったのだ。
「このままでは日本全体があやしくなるな……」
「なんですって、先生。日本がどうなるんですか」
佐藤は目を見開き、大声で問い直す。
彼はかって地球温暖化の果てに全世界が直面する海面上昇を思い描き、絶望に似た感情に襲われたことがあった。そのときは日本列島が海面上昇に襲われるのはかなり先のことであると思い直して、辛うじてわれを取り戻したのだった。だがいま、これが現実となりつつあるのだ。
以前の彼なら、ふたたび絶望の淵に立たされ、戦慄いたことだろう。だが最愛の妻亜耶子を奪われ、恩師佐々木教授を失い、そして佐橋祐子の死に遭い、激しい情熱を喪失していた彼には失うことに対する恐怖はなにもなかった。奪いたいものがおれば、自分の生命さえ提供してもよかったのだ。
「日本列島は飢餓に襲われ、さまざまな感染症が蔓延することになる……」
「え？　日本列島が飢餓疫病列島になるというのですか。どうしてそんなことになるんですか」
佐藤は目を剥き、食いついてくる。
「東京沈下をこのまま放置すれば、いずれそのような事態に陥ることになる。現実を直視せず、すべてを先送りすることしか考えない無責任ないまのような政治や行政の動きでは必ずそうなるのちがいない」
「ではどうすればいいのですか、それを救うには……」
佐藤が何度問うても、彼は遠くを見たまま、口を開こうとしなかった。

35

「ハイ、クキ」
顔を上げると、アンダーソンが立っている。後ろに背の高いもうひとりの男がいた。
ピーターソンだった。
ふたりの突然の出現に、彼は目を見張り、思わず机のまえで立ちつくす。
「ど、どうしたんだ……」
彼は応接セットへ移り、ふたりにソファをすすめる。
「大都市が海面上昇に直面したときのケーススタディというわけだ。これは出張の名目で、本心はきみに会いに来たのだよ」
アンダーソンは片目を瞑り、髭面を崩した。ピーターソンもにやにやしている。
空港が閉鎖されるまえに行こうということになって、急に出発したという。それで突然の訪問となったのだった。
「ピーターソンまで同行とは……」
彼は笑った。
「われわれが二人してきみを騙したと思われているようなのでね……」
「東京沈下が現実になってしまったからには、今更、そんなことは問題外だな」
「そうか。実は、ピーターソンにはべつの用事がある……」
アンダーソンはピーターソンを見た。
「……」
ピーターソンは黙ったまま、軽く頷く。

「というわけさ。ところで、上空から見たんだが、思ったより酷いね。洪水が一面に広がっているようだけど、あそこがゼロメートル地帯か」

成田空港に着陸する飛行機の窓から見たという。

「河川堤防が決壊した。補修もできずにいる。沈下が進んでいるのでね。この辺は単純な海面上昇の場合と異なるだろう」

「国や東京都などの行政はどんな対応策を計画して実行しているのですか」

ピーターソンが真面目な顔を向ける。

「さあ、役人たちに聞いてみるといい……」

彼は投げやりに応える。それは自分も聞いてみたいことだった。いつまで経ってもなにも見えてこず、彼にも行政がなにを考えているのかさっぱり分からないのだ。

東京沈下が進行中であるというのに、ゼロメートル地帯の被害者二〇〇万人を救い出し、テント村に収容しただけで、その先どうするのか全く不明であった。そのテント村も二〇〇万人の避難民にはとても足りず、避難民は方々に分散して収容された。そのため、収容所の対応もまちまちで不満が絶えなかった。どこもすし詰め状態で、それに沈下の進行が加わり、環境は日に日に悪化していくのだった。

「実は、今回の沈下範囲内にある基地を五年以内に移動する計画を立て、実行に移そうとしているんです。それの打ち合わせで来たんです」

彼は精悍な顔付きをした若い男の目をじっと見た。だが灰色がかった青い目の奥でなにを考えているのか、よく分からなかった。

「五年以内というと……」

「東京沈下は今後もつづくと考えていますが、ごく僅かつつであろうと予測されているのです。それで五年ぐらいかけても移動に支障がないだろうと……、どう思われますか。わたしは一年以内に移動すべきだと主張するつもりいますが……」

「一年以内か……」

「いままでのペースで沈下が進むとは思われないのですよ。一度動き出したら、次第にペースを上げていくにちがいないからです」

「ペースを上げているのですか、最近は……」

「きみのモデルではどうなんだ」

アンダーソンが口を挟む。

「モデルと言うほどのものではないよ、あれは……」

「じゃ、どう思う？」

「予測できない」

「予測できなければ、計画的な行動はできないだろう」

「予測しても計画的な行動をしようとしない。だから予測してもムダなのだ、この国では……」

「だからといって、予測をしなければいつまで経っても計画的な行動はできないことになる」

「計画的な行動か……」

彼は力無く呟く。なんとかしていますぐ、政府や地方自治体に二〇〇万人のゼロメートル地帯からの避難民や首都圏の沈下内住む四〇〇〇万人の住民を救済する計画的行動を取らせることができないものかと思うのだが、彼にはなんの手段も思いつかなかった。ただ、せめて米軍の行動計画が参考となって、政治や行政が動き出すことを期待するばかりだった。

36

アンダーソンとピーターソンが帰ったあと、九鬼は妙に落ち込んでいる自分を持て余していた。

彼は何時間も机に座ったままだった。ただ「予測なければ計画なし」というアンダーソンの言葉がなぜかこころにひかかって、胸のなかにさざ波が広がっていく。

さらに、アンダーソンは「たとえ沈下の予測が多少狂っても、問題ない。グリーンランドや南極大陸の氷床が意外に早く溶け出しているので、遠からず海面が急上昇して東京は水没することになるからだ。今回の東京沈下は日本列島を襲う海面上昇の事前の実地練習なのだ」という。

地球上の氷の殆どが南極大陸（八九パーセント）と北極圏のグリーンランド（一〇・五パーセント）にある。南極大陸の氷が全部溶け出すと、海面は一〇〇メートル以上上昇する。グリーンランドの氷が溶けると、七から一五メートル上昇するという。

これまでこれらの氷が溶けるにはかなりの時間がかかると思われ、来世紀以降のことと考えられていた。

ところが、北極海では氷が急激に溶け出しているのだ。グリーンランドの氷床に何千何万もの穴が開き、大量の水が流れ込み、下の岩盤まで達しているのもあるらしい。こうなると、氷床は滑りやすくなるし崩壊しやすくなる。これが一気に進めば、大量の氷床が海中へ崩落していくのだ。

「海面上昇か……」

彼は独り言を言い、手を伸ばして受話器を取った。

しばらくして、佐藤が顔を見せた。

「このまえのつづきだが……」

彼は佐藤の顔を見るなり、テーブルに纏めたペーパーを広げ、切り出した。ペーパーは彼が佐藤を待っている間に東京沈下の予測、海面上昇の予測、これらによって起こる被害の予測、これへの対応策について、急いで数枚に取り纏めたものだった。

「なるほど、なるほど……」と言いながら、佐藤はペーパーを捲っている。

「問題はどう行動計画をつくるかだ」

「うん……」

「資金は限られているだろうから、費用効果を考慮して優先順位を考えることになる。それにこのような非常時ではマンパワーや資材にも限りがある」

「なるほど……」

「つぎはこれをどう実行するかだ」

彼は畳みかける。

「そうだ。やつらは逃げ腰なんだ」

「政治家や官僚、企業の経営者たちか……」

「取材にいったら、自分たちが逃げ出すことしか考えていないんだ。地方へ逃げていったものもいるとか……」

「今回の東京沈下は日本列島を襲う海面上昇のミニチュア版だということだ。東京沈下で首都圏に生じる諸々のとんでもない出来事や甚大な被害は、いずれ名古屋を中心とする中京圏、大阪や神戸などの関西圏などの太平洋ベルト地帯でも当然予想される」

これらの人口稠密地帯が水没すれば、ゼロメートル地帯の水没による二〇〇万人の比でない何千万人もの数の環境難民が出る。もちろん、多かれ

少なかれ、残りの四国や九州の沿岸、日本海側や北海道の沿岸など日本列島の海岸線すべてにおいても同様のことが予想されるのだ。

とにかく、海面上昇では沿岸の領土が水没するだけでは済まない。沿岸部の水没によって領土が痩せ細そる。半身不随となった領土にさらに思いがけないような様々な影響が生じるのだ。

東京沈下はまさにこれからやって来る海面上昇に対する実地訓練の場となるものではないか。まさに千載一遇の実経験を積む良い機会なのだ。それなのに、国をリードする立場のエリートたちが逃げ出すとはどういうことだ。

彼は腹が立って仕方がなかった。

「これも影響のひとつかもしれないが、最近、物価が急騰し出している。ことに食料品はひどい。品不足の情報も耳にする」

「もう食料品が値上がりしているのか。海面が上昇すれば、日本列島の全港湾施設は使用不能となってしまう。そうなれば、たとえ金があっても食糧の輸入は途絶え、食料自給率四〇パーセントの日本は瞬く間に食糧不足に陥り、全土が飢餓地帯と化することになる。東京に沈下でいまその現象が起こりだしているのだ」

「え？　ホントですか」

佐藤は目を丸くする。

「とにかく、もう時間が残っていないのだ。一年か、長くても五年か……」

彼はピーターソンが言っていたことを話した。

「米軍が基地をですか……」

「なんとか行政を動かす方法はないかな」

「とりあえず、先生のこのペーパーを夕刊に載せる手配をしてみます。これが行政に新しい行動を促す起爆剤となるか、それともやがて環境難民となる四〇〇〇万人の総脱出の端緒となるか……、どうなるか全然見当つきませんが……」

「時間が逼迫している。やってみるしかないか……」

彼と佐藤はじばし顔を見合わせていた。

37

まだ三月になったばかりだというのに、急に暑くなった。日中は二五度を軽く超し、太陽が出ているとすぐ三〇度に達するのだ。

日に日に悪化していたテント村の衛生状態は、ここにきて極度に悪化していった。周囲にはゴミが散乱し、いたるところに排泄物が放置されたままになっている。餌を漁る野良犬や野良猫がうろつく。

排水状態が悪く、方々に水溜まりでき、この暑さで急速に腐敗が進んだ。悪臭が満ち、ハエは飛び交う。蚊が大量に発生した。

「堤防が修復して水が引きだしている」とか、「ゼロメートル地帯の復旧を諦めた」とか、「巨大地震が襲う」とか、「首都圏一帯が海中深く沈んでいく」とか、「政府が一人当たり一〇〇万円の移住資金を用意している」とか、いろいろな噂が飛び交う。避難民たちは一喜一憂して情報に耳を傾ける。だが確実なものはなにもなかった。

噂も日が経つにつれ新しい情報は次第に少なくなり、噂も時間とともに消え、ただ時間だけが過ぎて日を重ねていく。

避難民たちも次第に憔悴していった。幼児や年寄に病人が輩出した。

テント村に限らず、避難場所はどこもすし詰め状態で、混雑していた。飲用水や食糧も不足し出してきていた。

とにかく、避難民の数が多いうえに、東京地区への食料品の搬入が滞りだしたのだ。食料品ばかりではない。すべての物資の搬入量が減り出していた。

スーパーやコンビニの商品棚に空きが目立ち出した。ことに生鮮食品や生ものが品薄となっている。なかには全然入荷しないものも出てきた。同時に、価格が急騰しだした。三〇パーセントの値上がりがすぐ倍になった。やがて、三倍になり、数倍になったところで、品物が姿を消した。

直接の原因は東京沈下によって道路や港湾が損傷を受け、搬入手段が奪われたからであった。東京都心へ入る高速自動車道に生じた段差が大きくなっていよいよ通行ができなくなった。そのため国道や県道を迂回せざるをえなくなったのだ。だがこれらの道路にも方々に沈下の窪みができており、大型車輌がいつまで通行できるか分からなかった。ただ沈下のスピードが遅いことが救いだった。

港湾施設には一見したところ、目立つような被害が見当たらないが、荷揚げ用のクレーンの基盤が不均等に傾き、大型コンテナーの荷揚げが難しくなった。それでも通常の三分の一以下の程度であれば、まだ稼働することができるが、それも時間の問題だった。それに岸壁に大型船がいつまで接岸できるか分からなかった。岸壁が傾斜し出しており、崩壊するおそれが生じていたからである。

大都市東京が毎日消費する食料の量は膨大なものだった。それが先細りの状態になっていたのだ。避難民を収容するテント村への食料供給も影響を受け、量も質も落ちていった。日に三度配っていたおにぎりやパンは二度になった。

避難民二〇〇万人分の食料ばかりでなく、東京沈下内の四〇〇〇万人の食料が不足しがちになっていったのだ。

３８

「お腹が痛い」

腹痛を訴える幼児の周りでハエが飛び回っている。若い母親はぐったりした幼児を抱え狼狽えている。

テント村には臨時の救急所が設置されて、医療に当っていたが、急に暑くなって、食中毒などで腹痛を訴える患者が増えだしていた。

「Ｏ－１５７かもしれない」

幼児を診た若い医師は呟いた。

かなり酷い脱水症状を起こしている幼児は一瞬手足を震わせた。急いで点滴の処置がとられた。幼児は力無く頭を横にしてぐったりしてしまった。

若い医師には動かなくなったわが子を揺さぶる若い母親を見守るほかなかった。

方々のテント村でＯ－１５７などの腸管出血性大腸菌による汚染が広まり、生命を落とす幼児やお年寄りが続出した。

病原菌Ｏ－１５７などを伝播するハエ退治の殺虫剤散布がはじまった。ゴミや排泄物処理が滞りがちなテント村ではハエがつぎからつぎに湧くように発生し、追いつかない有様だった。

テント生活ではハエの駆除もままならず、Ｏ－１５７などの腸管出血性

大腸菌による感染症はなかなか収まる気配がなかった。

そんなところに新しい感染症が発生した。マラリア、デング熱など、蚊によって病原体が媒介される感染症だった。温暖化によって熱帯並になった東京近辺ではこれらの病原体を媒介するハマダラカやネッタイシマカなど、熱帯で生息していた蚊が浸入してきていたのだ。

これらの蚊が従来のアカイエカやシマカなどに混じって日本にも生息し出していた。東京沈下によって方々にできた水溜まりが恰好の棲息地となった。

病原体をもった蚊がテント村に浸入してきたらしい。

網戸もなく、全く無防備のテントでは瞬く間にこれらの感染症が広まっていった。問題はこれらの新しい感染症に対する備えが十分でなかったことだった。治療法に精通している医師も少なく、治療薬を常備しているところも少なかったのだ。

デング熱の主な症状は、不快感、倦怠感、高熱、頭痛、全身の筋肉痛である。多くは一週間前後で自然治癒するが、デング出血熱へ移行すると死亡の危険が生じる。血小板が減少し、血漿成分が失われると、デングショック症候群に陥る危険があるのだ。

デング熱には特別効果ある治療法やワクチンはまだなく、鎮痛や解熱にアスピリンを使用すると出血しやすくなるらしい。

テント村では蚊に刺されないように注意することと貼り紙が張られ、蚊帳や防虫スプレーが配付された。ヘリによる殺虫剤の散布も激しくなっていった。

39

政府が東京沈下をひた隠しにしてきたのも、またゼロメートル地帯の水没後に決壊堤防の補修に拘ったのも、ひたすら日本経済への影響を心配してのことだった。だが結果的に、単に問題を先送りにしたに過ぎなかった。事実は、どう対応していいのか分からず、考えあぐねていたのだった。

東京沈下が事実となって以来、株価は連日下げつづけた。時折、復旧工事や新都市建設を見込んで建設関連株が上昇に転じることもあったが、長続きせず、翌日には大幅に下げていった。

金融機関は軒並み大打撃を受けた。ゼロメートル地帯の水没で住宅ローンが大量に不良債権化した。それにつられていまだ水没していない区域の住宅ローンにも同様な動きが出ていた。

さらに、株価の急落が輪をかけ、含み資本が減り、資金繰りが難しくなった管内の銀行や信用金庫は軒並み取付け騒ぎに巻き込まれた。政府による全額保証で騒ぎは一応収まったかに見えたが、いまも燻りつづけて預金の引き出しがつづいていた。

火災保険や自動車保険などを扱う損保関連会社は支払い超過に追い込まれ、破綻寸前となり、政府へ救済を申し立てていた。

日本経済の先行き不安から、円が売られ、円が急落していった。このため、輸出入関連企業で破産が続出した。過剰消費に支えられていた関東地区のデパート、スーパーなどの小売業も大打撃を受けた。

関東地区に立地してある工場が相次いで閉鎖された。まず、神奈川から千葉に至る東京湾沿岸部の工場が操業を停止した。つづいて、内陸部の工場が閉鎖した。

原材料が手に入り難くなったこともあるが、それよりも需要が落ちる一方で、従業員の休暇や無断欠勤が増え、労働力を確保できない日がつづいたからであった。雇用が不安定化し、失業者が溢れていた。

東京沈下ショックで働く意欲を喪失した若年中年の労働者が街に溢れ、治安も悪化を辿っていた。

飲食店やスーパー、コンビニにも店を閉じるところがでた。街は活気を失い、ごみが舞い、薄汚れて寂れていった。

道路も波打ち、アスファルトにひび割れができ、ところどころに窪みができた。

学校も早々に春の学年休暇に入っていた。多くは始業日さえ未定であった。混乱している都市にいるより、田舎で過すほうが子供にとっていいだろうということらしいが、すべての子供が田舎へ帰れるわけでもなかった。

東京沈下が進めば、ライフラインは壊れ、電気、ガス、水道が絶たれ、都市は廃虚に化すことだろう。そのまえに、現代文明の象徴である天を突く超高層ビルが傾き、倒壊するだろうか。高層ビルのドミノ倒しが起きるだろうか。

タクシーや鉄道などの都市交通も止まり、血管に流れる血液が失われ、ついに大都市東京も死を迎えるのか。

餌を求めてうろついていた野犬や野良猫も見かけなくなった。烏の大群もどこかへ行ったのか、一羽もいなくなった。

だがこれで終りではなかった。大東京にゼロメートル地帯と同じ運命が待っているのだ。

40

「田舎へ行けば、腹一杯食べられるぞ」

「いやよ、いまさら田舎暮らしなんか」

「ここがいいというのか。見てみろ、こんなに痩せてしまって……」

四〇代後半か、男はシャツの袖をまくり上げ、裸の腕を差し出す。

「丁度いいよ、メタボのお腹もすっかり凹んで……」

「オイ、ユカ、お腹空いているだろう。育ち盛りにパン一切れじゃ足りないよな」

男は母親の隣で横になっている少女に話しかける。

「どうでもいい」

気だるそうな返事に、男はむっとしてテントの外へ出ていった。

テント村に押し込められたままの二〇〇万人の避難民が動き出した。

四〇〇〇万人も蠢きだしていた。行く当てのあるもの、行く当ての無いものにかかわらず、誰もがそわそわしはじめていた。

九鬼が書いた小論文がM新聞に載ったのだ。

これには五年以内、早ければ一年以内に東京を中心とする一〇〇キロメートル四方が海中へ向って沈下していくとあった。そのため、国は早急に、四〇〇〇万人の受け入れ先を確保しなければならない。

四〇〇〇万人の受け入れのために、地方と協力して、各地の国有地や公有地を移住者たちに解放したり、限界集落や過疎地帯を再生して移住受け入れを押し進め、地方の活性化を通して四〇〇〇万人の受け皿化を計るのだ。その一方で、かって遷都論議で候補地と上げられた地域に本格的に新

都市建設を進めてはどうか。持続可能なエコシティ、森林生態系や生物生態系などと共生する環境システム都市、雨水利用や太陽熱利用の自然循環都市といった新しいタイプの都市だ。

こんな趣旨だったが、前半だけが独り歩きしてしまったらしい。こうして沈下する大東京圏からの「大脱出」がはじまった。

政府や東京都はただ手を拱ねいて見ているだけだった。まず住民たちの自主性を尊重したいということだったが、無為無策に変わりなかった。土台、四〇〇〇万人を計画的に地方へ分散させることは考えてもみなかったことだった。実際、首都圏に四千数百万人が集まってきたときも、行政はただ手を拱ねいて見ていただけだったのだ。

だが環境難民化した四〇〇〇万人が地方へ向うとなればどんな混乱が生じるか分からなかった。かといって、食料品の搬入が滞りがちで、絶対量が不足している状況ではひとりでもテント村の収容者が減れば助かるのだ。何千人何万人でも、自分で出ていくことに対しては何も言うことはなかった。

ただひとつ問題があった。テント村にはO－157やマラリア、デング熱などの感染症が広がっていることだった。

元気なひとなら問題がないが、感染者を地方へ送り出すことはできなかった。これらの感染症が地方へ広がり、やがて日本列島に蔓延することになりかねないからだ。

政府は感染者のいるテント村を封鎖することにした。

だが長年住み慣れ親しんだ都会を捨てて、いっそのこと東京脱出を試みようとするのは、第一に収容生活に疲れたテント村の避難民たちだった。夜陰に乗じて村を抜け出すものが続出した。

「あっちへ行けば、食べるものがいっぱいあるからね……」

沈下地帯の境界にできた一〇センチほどの段差を越えれさえすればいいのだ。

子供連れの若い夫婦や老若男女の家族連れの一団が歩いていく。次第に群れが大きくなっていく。ついに、歩いて沈下地帯を脱出するひとの大きな群れができた。

首都圏を脱出する車の列もできた。高速自動車道は沈下地帯の境界付近で通行止めになっていた。段差がだんだん大きくなって、ついに支柱にもクラックが走り、倒壊の危険が生じたのだった。自動車は段差を鉄板で補修した国道を迂回して通り抜け、高速自動車道へ乗り込むのだ。

「体調のおかしい方はいませんか。下痢や熱のある方はおりませんか」

境界付近の道路にはテントが設置され、それぞれの関係自治体の保健所の係官が監視している。そのわきを徒歩の避難民の群れが通り抜けていく。

境界を越えたところに、大規模なテント村ができていた。そばでボランティアのひとたちが歩き疲れた避難民に水やおにぎりを差し入れしている。

徒歩でやって来た幼児やお年寄りは水のペットボトルとおにぎりをもらい、テントのなかで倒れ込むように横になって眠り込む。

41

「行政は全く無反応だ。どういうことだ……」

佐藤が怒気を含んだ声で叫ぶ。

「……」

九鬼は目を上げ、佐藤を見る。彼はマンションに帰る気にもなれず、研究室に居座りつづけていた。佐藤はどこで見付けてくるのか、食べものをもって毎日のように顔を出す。

「先生、避難民たちの大移動がはじまりましたよ。それにしても、政治家や官僚はなにを考えているのか。やつらはまだ東京沈下が止むことを期待しているらしい。いたずらにバタバタしてあとで恥をかかないようにしたいのだ。メンツが第一だからな、やつらは……」

応接セットの横にあるテレビには避難民の移動の様子がヘリからの中継で流している画面が映し出されていた。

「地震の連中は東京沈下をどう予測しているのかね。このまま進行するのか、それとも止まるとみているのか……」

「うん、それがはっきりしないんだ。何度取材に言っても、いうことは決まっているんだ。ことに大家の教授連が歯切れが悪い。それで若手も歯にものを挟んだような言い方しかしない」

「政治家や官僚らは東京が海中へ沈下するとなれば、何十兆何百兆円もの富を失うことになるから簡単に認めたくないかもしれないが、東京沈下が途中で止まることがあっても、遅かれ早かれ、海面上昇で同じようなことになるのだから、その対応策をいまから講じておくと考えればいいのに、なんで踏ん切りがつかないのかなあ……」

「やはり、きちんと予測できていないからではないのですか。地震の予測は難しいし、被害が激甚だからはずれもこわい。ムダな予算は使いたくないし……」

「予測がきちんとできれば、国や地方自治体はきちんと対応するというのかね」

「何回も予測の通りになれば、そうせざるを得なくなるでしょう。政治家も官僚たちも予算がないなんて、言っておれないにちがいありませんよ」

佐藤は彼のこころを見透かしたように、にやっとした。

テレビは相変らず、避難民の行列を映し出していた。北に向う高速自動車道に何人も乗った車が連なっている。トランクから荷物がはみ出し、車の屋根にも荷物を載せている。西に向う高速自動車道も同じだった。

「これで何人が東京を脱出できるかな……」

「こんなに一度に押し掛けて行った先でうまくいくかだ、問題は……」

「新しい問題がでるだろうな……」

「感染症は大丈夫かな」

「感染してもすぐ発病しないから見逃されることもある。到着してから発病すると厄介だ。病原体をもったハエや蚊も人間と一緒に車で運んでいるかもしれないし……」

「何人でもいいから脱出して助かればいいさ……」

彼は佐藤の顔を見ながら、ふと、こうやっていつまで話ができるだろうかと思った。

42

最初に悲鳴を上げたのは、受け入れ先の市町村だった。はじめは好意をもって避難民を迎えていた住民も、ウンカのように押し寄せる避難民がところかまわず糞尿を垂らし、ゴミを捨て、わが物顔の振る舞うことに腹を立て、街への進入を妨害するようになったのだ。やがて、高速自動車道

のインターが封鎖されてしまった。

先々の市町村も同様の措置にでた。

高速自動車道には車が溢れ、車の行列が延々と連なったまま、動きが止まった。パーキングエリアは渋滞を避ける車でつぎつぎと埋まっていった。

高速自動車道一帯が駐車場に化した。

雲間から顔を出した強烈な太陽が容赦なく動きを止めた車を射った。車内は急速に暑くなり、オーブンと化した。一斉に、車の窓が開かれ、ドアが開放された。なかから人が飛びだし、携帯を耳にしたまま、上空の取材ヘリに手を振っている。

病人が出たらしい。救急ヘリが近づいてきた。だが車が溢れる高速自動車道には着陸するスペースがない。やむなくヘリは着陸場所を求めて去っていった。

政府が漸く動き出した。救助活動に自衛隊を大量に投入した。これまでかたくなに拒んでいた国際救助活動チームを受け入れるとともに、米軍にも救助活動を依頼した。

とりあえず、高速自動車道上に取り残された大量の避難民を救済することだった。太陽が射る車のなかには体調を崩した多くの幼児や年配者が救助を待っているのだ。

大型ヘリが車を釣り上げて移動し、臨時のヘリポートを造る一方、政府はインター封鎖の解除を市町村に要請し、通行の再開を計る。

だが事前の準備不足のため、なかなか意思の疎通がうまくいかず、時間がかかった。とくに問題となったことは、政府がインター封鎖解除を要請するだけで、その先のことを市町村に丸投げしたことだった。市町村には何万人もの避難民を一度に引き受ける力はなかったのだ。

知事の了解を得て、高速自動車道上の避難民の受け入れ先が北海道と決まったのは、翌々日のことだった。これでも問題があった。自分の故郷や親元あるいは親類縁者をめざす避難民の扱いだった。彼らはすぐにも故郷や親元をめざしたかったのだ。

行き先の決まっていない避難者は最寄りの空港へ直行することになった。そこから臨時便で北海道へ飛ぶのだ。これとともに、主要な港湾から船舶で車ともども輸送することも考えられた。

このような手順で、一応、高速自動車道上の避難民の救済は済んだが、大騒ぎした割には首都圏から脱出できた避難民は大きく見積もっても一〇万人程度にすぎず、全体からみてごく僅かに過ぎなかった。この脱出騒ぎで、途中生命を失った犠牲者は五一五八名に上った。目的地に到着したあとに新たな犠牲者が出たかは不明であった。

43

「結局、どうだったんだ、あの脱出劇は……」

佐藤は大声を出した。

「リーダー不在の烏合の衆だったということか。東京脱出が大きな流れにならなかったということだね」

九鬼は力無く呟く。

「だが政府を動かした。巨大船舶を用いて、北海道へ避難民を運ぶ計画を練っているらしい。とにかく、ゼロメートル地帯の二〇〇万人をどうにか

したいというのが政府の本音だな」
実際、テント村は厄介なものになっていた。食料品の搬入が滞りがちなうえ、同じものを大量に調達しなければならない毎日の食料供給が重荷になってきたし、テント村がＯ－１５７やマラリア、デング熱などの感染症の温床となっていたからだった。
ことに、これらの感染症はこれから夏場に向ってますます猛威を振るうにちがいなかった。そのまえにテント村を取り除き、感染症の巣を排除してしまいたかったのだ。
そこでこれらの病原体を媒介する蚊が生息できない寒冷の地北海道が候補にのぼったのだった。また北海道はコメの生産量も多いし、馬鈴薯などの野菜も豊富に生産されている。
ただ問題は水没したゼロメートル地帯に残っている土地建物といった財産だった。避難民たちに国がその放棄を迫ることはできないことだった。このことが政府の行動を煮え切らないものにしていたのだ。
だがいつまでもこの問題を放置しておくことはできなかった。この問題を解決するよりももっと難しい問題が生じていたからだ。感染症の巣と化したテント村を放置しておけば、沈下区域の四〇〇〇万人をも巻き込んでしまうことになるのだ。食糧不足も目の前に迫っていた。
政府はようやく強権を発動してゼロメートル地帯避難民の強制移住に踏みきることにしたのだった。それでもゼロメートル地帯の水が引けばいつでも戻ってこれると保証することだけは忘れなかった。政府の誰もが万が一にも水が引くことを期待していなかったが、そうでもしなければ長年にわたって営々と築き上げてきたわが家を離れることを避難民に承知させることができなかったのだった。
五万トン級の巨大な船舶が調達され、避難民移住の東京北海道間の往復がはじまった。傾いた岸壁に係留された巨大船舶にゼロメートル地帯避難民がつぎつぎに乗り込み、北海道をめざす。巨大船舶は何度か往復して、二〇〇万人の避難民の最後のひとりまで北海道へ運ばれていった。
東京湾の岸壁に巨大船舶が接岸したのは、これが最後となった。

４４

「日本各地にデング熱が流行している。どうしたんだ」
久しぶりに、アンダーソンが顔を見せた。
「デング熱が……」
彼はやはり病原体を道連れにしてしまったかと思った。
「マラリア患者も見受けたが……」
「一体、どこをうろついていたんだ」
「もう、そろそろ帰ろうかと思っている。データもかなり取ったし、いろいろ勉強になったよ。どうだ、一緒に行かないか」
「いいね。海中への沈下まで東京に付合うこともあるまいからな……」
アンダーソンのひとことが九鬼のこころを擽る。彼はいっそのことアンダーソンに付いてＡＣＡＲへ行こうかと思った。大学にも東京にも未練がなかった。三月末で大学を辞めるという彼を学部長が盛んに慰留していたが、その気は全然なかった。
妻亜耶子、佐々木教授、佐橋祐子と相次いで失い、そのたびに気候変動の研究に意欲を喪失し、研究を放擲しようとさえしたが、研究への思いを

完全に捨て去ることができずにいたらしい。アンダーソンのタイムリーなひとことに彼のこころは大きく揺れ動いた。

彼が何度も異常気象について予測してきたが、彼の予測する異常気象に対して政治や行政は反応することがなく、頭から動こうとしなかった。そのたびに、予測の精度が低いせいかと思い、精度向上を図ったが、同じだった。そして彼は予測軽度の向上をいくら図ってもムダだと思うようになった。彼には研究さえムダだと思えたのだった。

それでも懲りずに、彼は畑違いの東京沈下の予測にのめり込んでいったのだ。異常気象の予測を無視されつづけたことに対する腹いせだったのか。それとも、こころから二〇〇万人のゼロメートル地帯住民の生命を案じてか、四〇〇〇万人の首都圏沈下地区住民の将来を思ってだったのか。

そのとき、なかなか予測通りに発生しない東京沈下に苛立ち、沈下発生を期待する自分がいることを発見したのだ。

予測研究は両刃の剣だった。彼は自分が予測研究を通してなにを求めていたのか思い知ったのだ。

妻亜耶子を奪われ、佐々木教授を死に追いやり、佐橋祐子を失い、彼はようやく本当の自分を知ったのだった。

彼は一度放棄した研究をふたたびはじめようとしている自分に戸惑っていた。

一度は悪魔の誘いにこころを許した自分がふたたび予測研究を手掛けていいものか。彼は迷う。

日本では予測に対して反応が鈍いとはいえ、だからといって予測をしないほうがいいとは言えないのじゃないか。予測がなければ、事前に一次被害や二次被害を最小に食い止める行動計画を用意しようとしても、用意することさえできないではないか。

予測研究は大向こうを唸らせたり、喝采を期待して実行するものではないのだ。それに精度の高い予測は日本のみ必要としているのではない。地球温暖化が暴走しだしているのに対策を先送りしようとしているいまこそ、精度の高い予測を全世界へ向けて発信するときではないのか。

アンダーソンがしきりに予測関連のプロジェクトへの参加を誘うではないか。

彼は次第にその気になっていった。

「明後日、ピーターソンが軍のヘリで関西空港へ連れていってくれるというんだ。そこからサンフランシスコへ飛ぶ予定だ。急だけど、どうかね」

「待ってくれ、明日、返事する。一緒に行けるように調整してみるから」

アンダーソンを見送ると、彼は窓辺に佇み、まだ四月にもならないのに、すでに青々と色づいている並木に目を向けた。

アキラや母の顔を思い浮かべた。佐藤の大声が響く。妻亜耶子、佐々木教授、佐橋祐子の面影がつぎつぎに現れては消えていった。

エピローグ

地球温暖化は気温上昇や異常気象といった気候変動ではじまり、海面上昇でおわりを迎える。だが温室効果のある二酸化炭素の大量放出がつづけば、地球温暖化はエンドレスの暴走局面へ突入し、地球システムの大変動へ陥るのだ。

東京沈下は小規模な地殻変動だった。これは地球システムの大変動の端緒のひとつであったのだ。

これはまた、地球温暖化の果てにやってくる海面上昇における日本列島のケーススタディであり、ひとつのシミュレーションでもあった。

プレートの微震動からはじまった東京沈下はゼロメートル地帯の水没で姿を現した。

水没をもたらした河川堤防や防潮堤の決壊は、いくら修復を重ねても、もとに戻ることはなく、ゼロメートル地帯の洪水も引くことはなかった。

「大脱出」を機に、日本全土へ分散していったゼロメートル地帯の避難民たちとともに、各地でマラリアやデング熱が流行しだした。夏の到来とともに、これらに加え、O－157やコレラなどの感染症が全土に蔓延していった。各種の感染症が猛威を振う日本列島は疫病列島の様相を呈した。

このとき以来、熱帯地方に生息していたネッタイシマカやハマダラカといったデング熱やマラリアの病原体を媒介する蚊が温暖化した日本列島にも棲息地を見出し、一年中活動するようになっていったのだ。

テント村の撤収と同時に、北海道へ強制移住させられた二〇〇万人弱の残存避難民のうち、そのままかの地に定住したのは約二〇万世帯に過ぎなかった。残りの避難民は国内外へ新しい定住地を求めて旅立っていった。

東京一帯は四〇〇〇万人とともに沈下をつづけた。日が経つにつれ、ビルや戸建ての家屋が傾きだし、見切りをつけて脱出する人びとが増えていったが、その数も大きくならず、大半が傾きだした家やマンションで不自由な生活をつづけていた。

水道が方々で漏水し出した。倒壊する電柱が出た。ガス管が破断した。

もはや猶予がなかった。

四〇〇〇万人を載せたまま、沈下する東京が海中へ滑りだしたのだ。沈下地帯の境界にできた亀裂が幅を広げていく。

避難民となってここを離れるか、それともここにへばり付いたまま、東京とともに海中へ沈んでいくのか。

四〇〇〇万人に決断の日が迫っていた。

地球温暖化による熱波や巨大台風に目を奪われているうちに、地殻は人知れず動き出していたのだ。

プレートの微震動を知って、九鬼陽一郎は自分の研究の遅れを感じ取ったのだった。だが地球温暖化の研究は人間自らそのタネを蒔き、自ら刈り取る羽目に陥った人間の業そのものであった。

彼はふたたび自らその業に身を置くほかないと思ったのだった。

エピローグのエピローグ

島国で海岸線が長い日本列島にとって、海面上昇は国の存続のかかわる甚大な被害をともなう。ことに、日本は領土の七〇パーセントが山地で、生産や生活の活動地帯は殆どが海岸部の低地に限られており、これらのほとんどが海面上昇によって水没の危険に曝されることになるからだ。日本にとって、海面上昇による社会的経済的大混乱は免れがたい避けがたいものだ。

世界人口の増加と地球温暖化による食糧生産量の減少によって、今後とも世界の食糧需給は逼迫する傾向にあるが、食料自給率が極端に低い日本を襲う食糧危機には、世界の食糧生産量減退にともなう絶対量不足による危機（国内の生産量減退も含む）ばかりではない。むしろそれ以外の原因による食糧危機のほうが断然多い。たとえば港湾機能損壊、戦争、船腹不足などによる食糧輸入不能から生じる食糧不足の危機だ。海面上昇すれば、これらによる食糧不足が日本を同時に襲うことになるだろう。

「それよりも早く日本全域が飢餓地帯と化すかもしれない。なにしろ、日本の食糧自給率がことのほか低いから、食糧を輸入できなくなれば、飢餓に襲われることになるのだから」

同時に、海面上昇によって、海岸にある多くの都市は壊滅的な被害を被る。太平洋ベルト地帯の工業地帯も被害を免れない。臨海に立地してある原子力発電所、火力発電所も危険だ。これによって、日本の経済システムは破綻し、社会は大混乱に陥る。

さらに問題なのは、その結果、大量の環境難民が発生することだ。

地震国日本が取るべき第一の地球温暖化対策は食料自給率を上げることである。やがて来る海面上昇に備えて、自給自足（地産地消）の自立型環境都市群を内陸部につくることだ。そして沿岸部の人口稠密地帯からの人口移動を進めるのだ。

とにかく、食糧の量と質を確保するためには食料自給率を上げるほかないのだ。

すでに大量生産大量消費大量廃棄の経済システムはすでに破綻しているのに、相変わらず、不景気だからといって、消費を刺激して大量消費大量廃棄をうながそうとする。こうして地球環境は破壊されつづけ、地球温暖化を促進させているのだ。

これではいくら二酸化炭素を減らそうとしてもムダだ。人間はいつになったら生きている自分本位の生活から脱することができるのか。

地球はいつまでも人間どもの地球環境を省みないエネルギーの大量消費を放置して温暖化をさらに進めるのか、それともある日、地球は意を決して突然寒冷化へ舵を切るのだろうか。

（第四部　完）

（この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実存するものと一切関係がありません。）

地球温暖化の果てに第四部ー飢餓疫病列島
生野以久男
二〇〇九年一月一〇日第一版発行
（c）Ikuo Ikuno 2009
発行所　kinokopress.com
代表　森岡正博
所在地　大阪府堺市学園町一ー一　大阪府立大学人間社会学部
倫理学研究室内
連絡先　www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ
本文レイアウト＋デザイン　森岡正博

本書およびＰＤＦファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。
ＩＳＢＮ　なし